

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2021

多賀城跡



宮城県多賀城跡調査研究所

序 文

多賀城跡調査研究所は、昭和44（1969）年の設立以来、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査事業と環境整備事業を継続的に実施しています。発掘調査によって古代多賀城の歴史的特質とその価値を解明し、その成果をもとに環境整備事業を実施することで、特別史跡多賀城跡附寺跡が多くの方にとって親しみやすい憩いの場となる史跡公園を目指しています。

発掘調査事業は第11次5ヵ年計画の3年目の調査として、多賀城政庁地区北方において、遺構の構成と時期の把握を目的とする第95次調査を実施しました。調査対象地は政庁跡の北西側隣接地で、調査の結果、第Ⅲ期以降の大型掘立柱建物2棟を発見しました。これらの建物は政庁と密接な関係があることが判明し、政庁北側の使われ方を理解する上で貴重な成果となりました。

環境整備事業は、宮城県の総合計画『宮城の将来ビジョン・震災復興・地方創生実施計画』の重点事業に位置づけられ、「多賀城創建1300年記念重点整備事業」として、多賀城創建1300年記念の年となる令和6（2024）年に向けて実施しています。政庁南面地区を対象とした第11次5ヵ年計画の2年目の事業としても位置づけられ、城前官衙の遺構表示等を継続して行いました。今後も、管理団体である多賀城市と連携して着実に推進していきたいと考えています。

本書の刊行にあたり、日頃よりご指導をいただいている多賀城跡調査研究委員会の諸先生、文化庁、多賀城市および多賀城市教育委員会、調査と整備事業に対しご支援を頂いた皆様方に対し、所員一同深く感謝を申し上げます。

令和4年3月

宮城県多賀城跡調査研究所
所長 高橋 栄一

目 次

I. 調査研究事業の計画	1
II. 第95次調査	2
1. 調査の目的と経過	2
2. 調査成果	11
3. 総括	51
III. 鉄製品と瓦の追加報告	61
1. 第94次調査出土鉄製品	61
2. 多賀城廃寺跡出土軒丸・軒平瓦、鬼板	64
IV. 付章	70
1. 関連研究・普及活動	70
2. 組織と職員	74
3. 沿革と実績	75

図版目次

図版1 調査区の位置	3	図版24 SB3450 掘立柱建物出土遺物	31
図版2 第95次調査対象地と周辺の調査	4	図版25 SB3450 掘立柱建物断面写真	32
図版3 第95次調査区遠景写真	5	図版26 SK3446・3447・3448 土坑断面・出土遺物	34
図版4 政庁地区北方の調査	6	図版27 SD3426・3438 溝、SD3424・3425 自然流路断面・出土遺物	35
図版5 第95次調査・公開の様子	8	図版28 SD3449 溝断面・写真・出土遺物	37
図版6 調査区全景写真	10	図版29 SD3451・3453 溝、SD3455 自然流路断面・出土遺物	38
図版7 基本層序模式図	12	図版30 第VI a層出土遺物	43
図版8 遺構配置図	14	図版31 第I～VI a層出土遺物	44
図版9 古代の遺構面の南北縦断面・東西横断面	15	図版32 第95次調査出土遺物写真(1)	45
図版10 北区平面図・断面図	16	図版33 第95次調査出土遺物写真(2)	46
図版11 北区全景写真	17	図版34 第95次調査出土遺物写真(3)	47
図版12 南区平面図	18	図版35 遺構の重複関係	53
図版13 南区断面図・断面写真	19	図版36 SB3415 掘立柱建物と9m方眼	55
図版14 南区全景写真	20	図版37 古代の遺構と中世以降の道路の位置	56
図版15 SB3415 掘立柱建物平面図・エレベーション図	21	図版38 第94次調査出土鉄製品	63
図版16 SB3415 掘立柱建物全景写真	22	図版39 第94次調査出土鉄製品写真	63
図版17 SB3415 掘立柱建物断面図(1)	23	図版40 多賀城廃寺跡出土瓦(1)	65
図版18 SB3415 掘立柱建物断面図(2)	24	図版41 多賀城廃寺跡出土瓦(2)	66
図版19 SB3415 掘立柱建物模式図	26	図版42 多賀城廃寺跡出土瓦(3)	67
図版20 SB3415 掘立柱建物断面写真(1)	27	図版43 多賀城廃寺跡出土瓦写真(1)	68
図版21 SB3415 掘立柱建物断面写真(2)・出土遺物	28	図版44 多賀城廃寺跡出土瓦写真(2)	69
図版22 SB3450 掘立柱建物平面図・断面図	30		
図版23 SB3450 掘立柱建物模式図	31		

表目次

第1表 多賀城跡調査研究委員会委員	1	第10表 第95次調査出土瓦の集計(重量)	50
第2表 多賀城跡発掘調査第11次5ヵ年計画	1	第11表 多賀城跡で確認された廂付建物	57
第3表 第95次調査検出土遺構・登録遺構番号一覧	10	第12表 多賀城跡で確認された廂の付かない桁行6間以上の掘立柱建物	59
第4表 第94次と第95次の層序の対応	11	第13表 鉄製品の写真の登録番号一覧	62
第5表 SB3415 掘立柱建物の柱穴の属性	26	第14表 多賀城廃寺跡出土瓦の写真の登録番号一覧	69
第6表 SB3450 掘立柱建物の柱穴の属性	31	第15表 多賀城跡環境整備事業第10・11次5ヵ年計画	70
第7表 遺物写真の登録番号一覧	42	第16表 令和3年度現状変更一覧	71
第8表 第95次調査出土遺物の破片集計	48		
第9表 第95次調査出土瓦の集計(点数)	49		

例 言

1. 本書は、令和3年度に実施した多賀城跡第95次調査の成果と多賀城跡環境整備事業、多賀城関連遺跡発掘調査事業、関連研究事業、普及活動の概要等および、令和2年度の第94次調査で出土した鉄製品と、多賀城廃寺跡で出土した瓦の追加報告を収録したものである。
2. 当研究所の発掘調査と環境整備事業については、多賀城跡調査研究委員会における審議と承認に基づいて実施している。
3. 測量原点については政庁正殿身舎南側柱列中央に埋標し、この原点と政庁南門の中心を結ぶ線を南北の基準線とする座標軸を定めている。南北の基準線は真北に対しておよそ1°04'東に偏している。政庁正殿と政庁南門の測量基準点の平面直角座標（第X系）の座標値は、東日本大震災後（平成24年）に実施した再測量の成果から以下のとおりである。
正殿 世界測地系 X座標：-187968.3530 m、Y座標：13560.4850 m、標高：32.964 m
南門 世界測地系 X座標：-188037.4930 m、Y座標：13559.3150 m、標高：29.799 m
4. 本書における遺構の位置の表記については、測量原点から平面直角座標上の東西南北方向の距離(m)で示している。
例：W5 = 原点から西に5 m、S3 = 原点から南に3 m
5. 本書で使用した遺構記号は、SB：掘立柱建物、SD：溝・自然流路、SI：竅穴建物、SK：土坑、P：柱穴・ピットである。
6. 土色は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖17版』日本色研事業株式会社（1996年）にもとづく。
7. 瓦の分類基準は『多賀城跡 政庁跡 本文編』による。
8. 当研究所の刊行物については、『多賀城跡 政庁跡 本文編』を『本文編』、『多賀城跡 政庁跡 図録編』を『図録編』、『多賀城跡 政庁跡 補遺編』を『補遺編』、『多賀城跡 政庁南面地区-城前官街遺構-遺物編-』を『南面Ⅰ』、『多賀城跡 政庁南面地区Ⅲ-政庁南大路・南北大路-』を『南面Ⅲ』、『多賀城施輪陶磁器』を『施輪陶磁器』と略記する。また、『宮城県多賀城跡調査研究所年報』については『年報2010』、多賀城関連遺跡発掘調査報告書については第19冊を『関連19』のように記す。
9. 本調査で得た資料については、宮城県教育委員会に保管している。
10. 本書の内容の一部については、『第95次調査現地説明会資料』、『令和3年度宮城県遺跡調査成果発表会資料集』、『第48回古代城柵官街遺跡検討会資料集』で紹介しているが、本書の内容が優先する。
11. 本書の整理は、遺物を、矢内雅之・村上裕次・初鹿野博之・鈴木貴生・柴田とみ子・菊池摩耶、遺構を、村上・菊池が担当した。
12. 本書の作成にあたっては所員で討議と検討を行い、Ⅰ・Ⅱを村上・矢内、Ⅲを鈴木・初鹿野・矢内、Ⅳを白崎恵介・村上・初鹿野・矢内が執筆し、村上・矢内が編集した。

調査要項

多賀城跡第95次調査の発掘調査・整理体制、調査期間、調査面積等は下記のとおりである。

調査主体	宮城県教育委員会（教育長 伊東昭代）
調査担当	宮城県多賀城跡調査研究所（所長 高橋栄一）
調査員	高橋栄一・白崎恵介・村上裕次・初鹿野博之・鈴木貴生・矢内雅之
調査期間	令和3年5月31日～令和3年12月15日
調査面積	約700㎡
調査参加者	市川昌暎・伊藤電子・氏家雅夫・奥 清志・佐藤有佳利・鈴木幸夫・畑中和子・升 孝司 （多賀城跡調査研究所会計年度任用職員） 谷津愛奈・傍島健太・矢代真魁・尾前千怜・藤原彰也・田口志織・樋口謙心・顧 健・ 高野証人・股 航（東北大学）
整理参加者	柴田とみ子・菊池摩耶（多賀城跡調査研究所会計年度任用職員）

【表紙題字は大塚惣一郎氏の揮毫による。表紙写真：南より撮影（登録番号：Z9385）、裏表紙写真（登録番号：Z9456）】

I. 調査研究事業の計画

当研究所では、特別史跡多賀城跡附寺跡の発掘調査と環境整備、多賀城関連遺跡の発掘調査などの事業を、多賀城跡調査研究委員会の審議と承認のもとで5ヵ年計画を立案して行っている(第1・2表)。今年度、当研究所は、多賀城跡発掘調査第11次5ヵ年計画の3年次目の事業として政庁北側の政庁地区北方を対象に第95次調査を、環境整備第11次5ヵ年計画2年次目の事業として政庁南面地区の遺構表示工等を、多賀城関連遺跡発掘調査第8次5ヵ年計画3年次目の事業として大崎市大吉山瓦窯跡の第1次調査を実施した。

以下、本書では主に多賀城跡第95次調査の内容を記すとともに、その他の今年度の事業の概要については付章で述べる。

氏名	所属	専門分野
委員長 佐藤 信	東京大学名誉教授	古代史学
副委員長 藤澤 敦	東北大学学術資源研究公開センター総合学術博物館長	考古学
委員 小野 健吉	大阪観光大学教授	庭園史学
委員 熊谷 公男	東北学院大学名誉教授	古代史学
委員 黒田 乃生	筑波大学教授	造園学
委員 櫻井 一弥	東北学院大学教授	建築デザイン学
委員 佐々木由香	金沢大学人間社会研究領域付属古代文明・文化資源学研究センター特任准教授	植物学
委員 藤井 恵介	東京大学名誉教授	建築史学
委員 古瀬奈津子	お茶の水女子大学名誉教授	古代史学
委員 本中 眞	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所長	造園学

第1表 多賀城跡調査研究委員会委員(任期:令和3年4月1日~令和5年3月31日)

年度	回数	発掘調査対象地区	発掘面積	調査の目的
平成31 (令和元)年	93次	外郭北西隅(丸山・新西久保地区)	300㎡	外郭北西隅の区画施設と付属施設の確認
令和2年	94次	政庁地区北方	600㎡	政庁北西側丘陵部の遺構の確認
令和3年	95次	政庁地区北方	700㎡	政庁北西側丘陵部の遺構の確認
令和4年	96次	政庁地区北方	300㎡	政庁北・北西側の丘陵部と沢状地形における遺構の確認
	97次	外郭南辺(坂下地区)	300㎡	第1期外郭南門西側の区画施設の確認
令和5年	98次	政庁地区北方	700㎡	政庁北方建物の確認

第2表 多賀城跡発掘調査第11次5ヵ年計画(令和3年度委員会承認)

II. 第95次調査

1. 調査の目的と経過

(1) 目的

多賀城跡発掘調査の第11次5ヵ年計画3年次目にあたる第95次調査では、政庁北側の調査資料の蓄積を目的として、昨年度に引き続き政庁地区北方を対象とした(第2表、図版1・2・3)。

政庁地区北方については、第19・31・32・76・94次で調査を行っており、丘陵尾根部と丘陵斜面ないし沢状地形の範囲を調査対象としている(図版4)。丘陵尾根上では、第19・31・32・76次調査において政庁北辺築地塀北側で、大型の掘立柱建物4棟が「コ」字形に配置された「政庁北方建物」(『補遺編』)、第76次調査において竪穴建物2棟(SI2806・2813)を検出した。政庁北方建物は、政庁遺構期第Ⅳ期(以下、政庁遺構期を省略する)のもので、政庁と密接な関連を持つ施設であり、地形上の制約によって政庁中軸線より西寄り位置している(『本文編』)。また、SI2806は第Ⅲ期の中でも前半段階とみられることから、「伊治公告麻呂の乱」による火災後の一時的な施設と推定した(『年報2004』、『補遺編』)。

政庁の北西側では、第94次調査A区で年代や全体の規模は不明だが、大型の可能性のある掘立柱建物(SB3415・3416)や、竪穴建物(SI3418)を検出した(『年報2020』)。SB3415については、政庁西辺築地塀の北側延長線上に柱筋を揃えて位置しており、計画的に配置された建物である可能性を推定した。

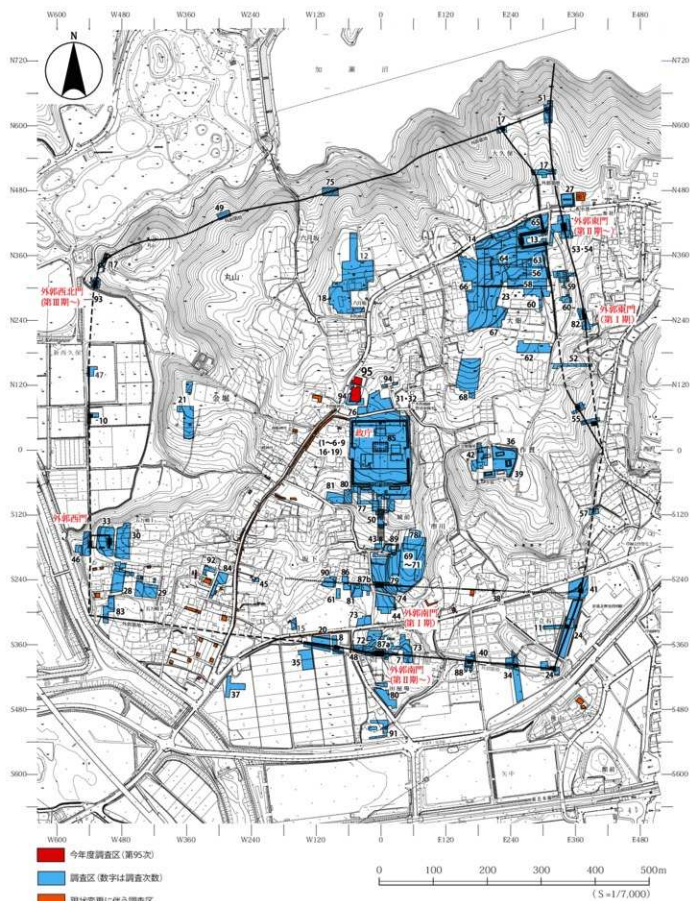
丘陵斜面ないし沢状地形では、第31・32次調査において、沢状地形の南に面した斜面で第Ⅲ期以降の掘立柱建物4棟(SB1017・1022・1023・1026)(『年報1977』)、沢状地形内で第Ⅲ期の竪穴建物3棟(SI1024・1063・1065)(『年報1978』)、第94次調査B区において、沢状地形の北に面した斜面で掘立柱建物を構成する可能性がある柱穴や竪穴建物1棟(SI3439)を検出した(『年報2020』)。

この他に、平成5・6年度には市道市川線(塩竈街道)西側で特別史跡の現状変更に伴う発掘調査を行い、調査面積は狭いながらも複数の掘立柱建物を検出した(『年報1993・1994』)(図版2)。

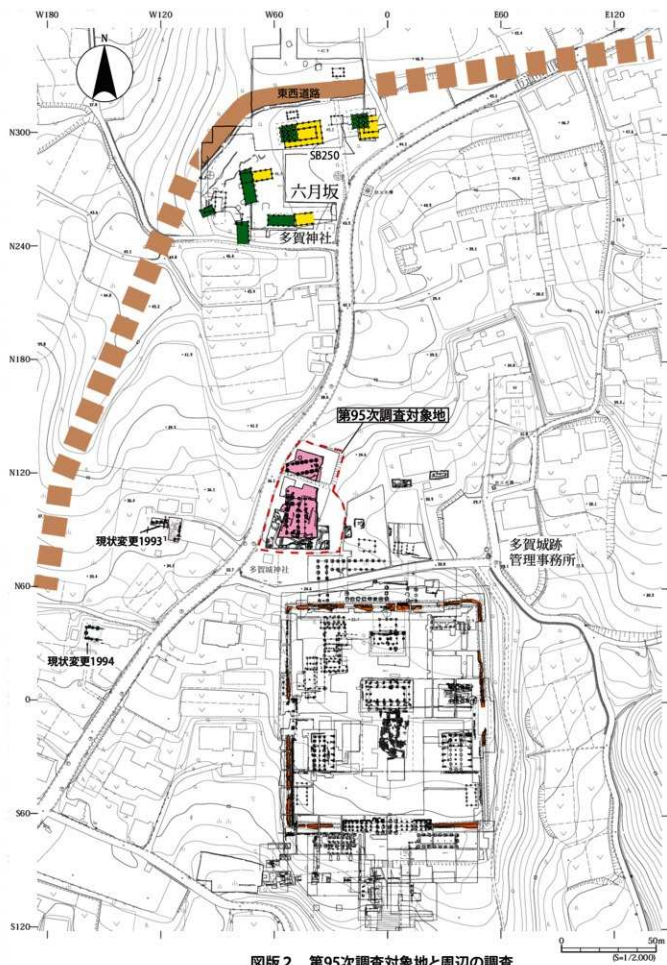
これまでの調査で、政庁地区北方では、①第Ⅲ期以降の遺構が分布すること、②丘陵尾根上に大型の掘立柱建物群である政庁北方建物や竪穴建物、丘陵斜面や沢状地形に小型の掘立柱建物や竪穴建物が分布することが明らかとなり、さらに、③政庁北方建物以北の丘陵尾根上にも計画的に配置された大型の建物が分布することが推定された。そこで、第95次調査では、第94次調査A区の未調査範囲を中心に遺構の分布や構成を確認すること、加えて、沢状地形の範囲など旧地形を把握し、地形と遺構分布との関連性を確認することを目的とした。

(2) 調査の経過と方法

〔調査区の設定と表土除去〕対象地は多賀城跡政庁北側隣接地に所在し、政庁正殿の基準点から北へ86～133m、西へ33～58mの範囲に位置する(図版2)。現況は過去に宅地として利



図版 1 調査区的位置



図版2 第95次調査対象地と周辺の調査



政庁と第95次調査区（南から）

[Z9364]



政庁と第95次調査区（北から）

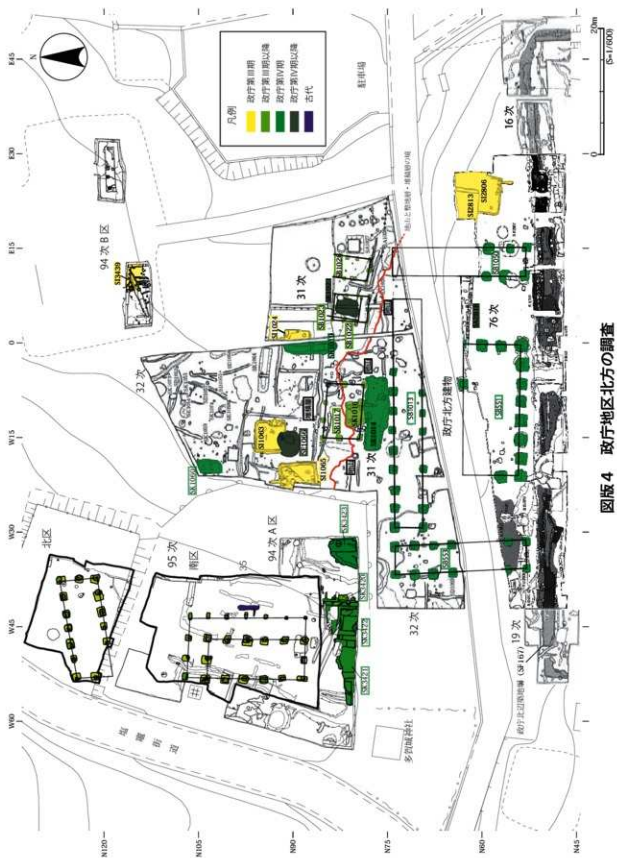
[Z9370]



政庁地区北方と第95次調査区（南から）

[Z9366]

図版3 第95次調査区遠景写真



図版 4 政庁地区北方の調査

用されていたことにより、南北に高低差のある平坦面が2箇所認められる(図版5-1)。現地表面の標高は、北側の平坦面が36.2~36.5 m、南側が34.4~35.2 mである。

昨年度の第94次調査では、南側の平坦面の西・南縁を中心に調査区(A区)を設定したが(図版4)、今年度は南北の平坦面両方を対象として、面的な調査区を設定し、それぞれ北区、南区とした。南区は、第94次調査A-1区とA-2区西・南と一部重複する(図版8)。

調査の開始は5月31日である。最初に、重機による表土除去を北・南区の順に行い、6月8日に終了した(図版5-2)。北区では、広範囲で表土直下に地山の岩盤が認められ、南区でも東壁周辺以外は同様の状況で、第95次調査区の大部分は、第94次調査区と同じく近現代の造成により地山まで削平されていることが判明した。

【北区の調査】表土除去が終了した6月3日から人力による遺構検出に着手した(図版5-3)。古代の旧表土は残存していなかったが、調査区の全域で大型の柱穴の分布を確認し、これらが東西6間、南北2間の掘立柱建物であることが判明した。この他に、土坑や柱穴、調査区東壁周辺で沢状地形の堆積層を確認した。遺構・堆積層の検出、柱穴の一段下げが終了した6月21日には北区の空中写真撮影を行った。

平面図作成については8月5日から11日に、遺構精査については9月15日に土坑の半截、9月30日から10月15日にかけて掘立柱建物やそれと重複する柱穴の半截を行い、併せて断面写真撮影、断面図による記録作成を行った。現地説明会終了後の10月28日からは、補足調査とそれに伴う断面写真撮影、断面図作成、平面図の追加と標高値の測量を行い、11月4日に北区の調査を終了した。

【南区の調査】北区の遺構検出が終了した6月21日から着手した。北部から第94次調査区の養生に伴う埋め戻し土と近現代の土坑や溝を掘り下げながら遺構検出を行った(図版5-4)。その結果、第94次調査で検出した掘立柱建物、柱列、竪穴建物、溝、土坑、自然流路とともに、新たに柱穴、溝、沢状地形の堆積層を確認した。このうち、第94次調査で検出した溝(SD3419・3432・3433)については、それぞれの延長部分を確認し、SD3419は遺構確認面の層の年代からSD3438と同一の溝であること、SD3432・3433は第94次調査の「第Ⅱ層」上面で検出され、後述するがこの層は現代のものであることから、現代の溝であることが判明した。

【南区の掘立柱建物の調査】南区では、再検出した第94次調査の掘立柱建物(SB3415・3416)と柱列(SA3417)とともに、新たに複数の柱穴を確認し、その位置関係からこれらが1棟の建物になることが判明した。この建物の西側柱列の柱穴は、第94次調査で検出した自然流路(SD3424・3425)と重複しているとみられたことから、建物を構成する柱穴すべてを検出し、その規模・構造の詳細を明らかにするため、断面観察用の畦を残しながら自然流路の精査を行った。その結果、それらの底面で想定された位置に柱穴を確認し、この建物が南北6間、東西3間で東と北に廂が付く南北棟であることが判明した。また、柱穴の一段下げを行う中で柱痕跡や柱抜取穴とともに、ほぼすべての柱穴で建て替えの痕跡を確認した。なお、北廂の東から2個目の柱穴には、柱痕跡に灰白色火山灰が含まれていた。

掘立柱建物の検出が終了した9月15日に南区と北区の空中写真撮影を行った。そして、平面



1. 調査区近景（南東から） [Z9458]



2. 重機による表土除去（北西から） [Z9460]



3. 北区の調査（東から） [Z9461]



4. 南区の調査（北東から） [Z9462]



5. 考古学実習（遺構精査） [Z9463]



6. 考古学実習（遺物整理） [Z9466]



7. 多賀城跡調査研究委員会の現地指導 [Z9467]



8. 現地説明会 [Z9469]

図版5 第95次調査・公開の様子

図を作成し、9月22日から10月15日にかけて掘立柱建物の柱穴の半截とその断面写真撮影、断面図作成を行った。

【南区の堆積層の調査】堆積層については、南区東壁周辺を中心に広範囲で確認した。平面では、遺構との重複関係から2つの遺構面の存在が認められたが、複数の堆積層が広範囲に分布し複雑な状況であったことから、断面での検討を行うこととし、空中写真撮影後に、東壁に沿った南北方向と東壁から東西方向に深掘りを行った。その結果、東壁周辺で検出した遺構と堆積層には少なくとも3つの遺構面があること、東壁南部で検出した地山が中央から北では堆積層が厚く確認できず、沢状地形の沢筋に相当する部分がこの範囲に位置することが明らかとなった。これらの理解を基に北壁についても検討し、東・北壁の断面写真撮影、断面図作成を行った。そして、北区の調査が終了した11月5日からは沢状地形の堆積層の再検出と平面図作成、標高値の測量を実施し、12月6日に作業を終了した。

【撤収・埋め戻し】12月7日に器材の撤収と遺構の養生、12月9日から重機による調査区の埋め戻しを行い、12月15日に野外調査を終了した。

【調査成果の検討・公開等】調査期間中の10月19・20日には、多賀城跡調査研究委員会による現場視察を受けるとともに調査内容を報告し、その審議を経て成果に関する指導と承認を受けた(図版5-7)。それを踏まえて10月21日には調査成果を報道機関に公開し、10月23日に現地説明会を開催した(図版5-8)。参加者は65名である。調査後の令和3年12月11日には令和3年度宮城県遺跡調査成果発表会、令和4年3月には『第48回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』で調査概要を報告した。

また、9月6日から9月16日には東北大学考古学実習の一環として、東北大学学生10名が調査に参加した(図版5-5・6)。

【調査記録の作成方法】平面図・断面図については遣り方測量により、縮尺1/20で図面用紙に手書きで作成した。また、図面作成や遺物取上げに使用するため、政庁内に埋設された「内城」と「内城W」を基に、トータルステーション(ソキア製CX-107F)を用いて調査区内に3m四方のグリッドを設定した。

遺構の写真撮影にはデジタルカメラ(Nikon製D7000:1,690万画素)を用いた。画像の保存形式はRAWとJPEGで、撮影時には色調補正のためグレーカードを使用した。空中写真撮影にはドローン(DJI製PHANTOM3 PROFESSIONAL:1,200万画素)を使用した。

【遺構・遺物の整理】遺構平面図・断面図、遺物実測図のトレースにはドローソフト(Adobe Illustrator CS5)を、遺物拓本のデジタル化は画像編集ソフト(Adobe Photoshop)を用いた。

遺物の写真撮影にはデジタルカメラ(Nikon製D7000:1,690万画素)を用いた。画像の保存形式はRAWとJPEGで、色調補正のためスパイダーチェッカーを使用した。遺構・遺物写真の補正・調整には画像編集ソフト(Adobe Photoshop)を用い、TIFF形式で保存した。空中写真の保存形式はJPEGである。

【遺構・遺物の登録】検出した遺構については遺構登録台帳の3446~3459番に登録した(第3表)。出土遺物については、水洗、接合の後に種類・器種・数量・特徴等を調書としてまとめ、

遺構・層の年代を示す遺物や特徴的な遺物 101 点を抽出して登録番号を付した。登録番号は、土器・瓦・石製品・金属製品・近世の陶磁器については R1～R101 を使用し、施釉陶磁器については『多賀城施釉陶磁器』の登録方法にならない、R 番号に加えて灰釉陶磁器に 95- 1、白磁に No.331 を付した。

撮影した写真についてはデジタル写真台帳に登録して管理している。登録番号は、遺構写真が Z 9184～9363、空中写真が Z 9364～9392、遺物写真が Z 9393～9457、その他の写真（調査の様子など）が Z 9458～9473 である。本書に掲載した遺構写真については、登録番号を掲載写真の右下に記載し、遺物写真については掲載写真との対応関係を第 7 表に示した。

番号	記号	種類	次数	本文	平面図	断面図	番号	記号	種類	次数	本文	平面図	断面図
3415	SB	竪立柱建物	94・95	17p	図版 8・12・15	図版 17・18	3446	SK	土坑	95	33p	図版 8・10	図版 26
3416			欠番 (SB3415 に統一)				3447	SK	土坑	95	33p	図版 8・10	図版 26
3417			欠番 (SB3415 に統一)				3448	SK	土坑	95	33p	図版 8・10	図版 26
3418	SI	竪穴建物	94・95	32p	図版 8・12	—	3449	SD	溝	95	36p	図版 8・12	図版 28
3419			欠番 (SD3438 に統一)				3450	SB	竪立柱建物	95	29p	図版 8・10・22	図版 22
3424	SD	自然流路	94・95	40p	図版 8・12	図版 27	3451	SD	溝	95	37p	図版 8・12	図版 29
3425	SD	自然流路	94・95	41p	図版 8・12	図版 27	3452	SD	溝	95	39p	図版 8・12	—
3426	SD	溝	94・95	33p	図版 8・12	図版 27	3453	SD	溝	95	39p	図版 8・12	図版 29
3429	SD	溝	94・95	35p	図版 8・12	—	3454	SD	溝	95	39p	図版 8・12	—
3430	SK	土坑	94・95	—	図版 8・12	—	3455	SD	自然流路	95	41p	図版 8・12	図版 29
3431	SK	土坑	94・95	—	図版 8・12	—	3456	SD	溝	95	39p	図版 8・12	—
3432	SD	溝	94・95	—	図版 8	—	3457	SD	溝	95	40p	図版 8・12	—
3433	SD	溝	94・95	—	図版 8	—	3458	SD	溝	95	40p	図版 8・12	—
3438	SD	溝	94・95	36p	図版 8・12	—	3459	SD	溝	95	40p	図版 8・12	—

第 3 表 第 95 次調査 検出遺構・登録遺構番号一覧



全景（上が北）

[Z9374]

図版 6 調査区全景写真

2. 調査成果

(1) 調査区の地形と層序

1) 地形

第95次調査区が位置する政庁地区北方の地形は、外郭東門付近から西に延び、六月坂地区で南方方向に分岐して政庁と城前官衙へ至る丘陵尾根と、政庁の北側を東から西方へ入り込む深い沢状地形で構成されている(図版1・2・3)。この丘陵尾根は、東面する沢状地形と政庁西側を南から北方方向に入り込む沢状地形により幅が狭くなっている(図版2)。第95次調査区は、この丘陵尾根と沢状地形の西端に位置し、現地形は市道市川線や宅地造成の際の切土と盛土により平坦面となっているが、旧地形は、東端が西から東に、それ以外が北西から南東方向に標高を下げながら緩やかに傾斜する緩斜面である(図版9)。

現況での標高は、最も高い北区北東部で36.5m、最も低い南区南東部で34.4m、高低差は2.1mである。一方、地山面の標高は、最も高い北区北西部で36.0m、最も低い南区南東部で33.6m、高低差は2.4mである。

2) 層序

基本層序については、沢状地形の堆積層を中心に8層に大別した。北・南区東部を中心に認められ、特に南区では多くの層が検出された(図版8)。これらの層の分布は、主に調査区の東側から西方方向に入り込む沢状地形の範囲を表し、特に多くの層が認められたW42より東で、N99～111の範囲が沢状地形の「沢筋」にあたと推定される(図版9)。基本層序と遺構確認面との模式図を図版7に、第95次調査と第94次調査との基本層序の対応関係を第4表に示した。なお、第94次調査の第Ⅲ層である灰白色火山灰層については、今回の調査で確認できなかったため基本層序には含まれていない。

第94次	第95次	備考
I	I	表土
II		
SK3421大別1層	II	
	III	
	IV	
	V	
III		灰白色火山灰
	VI	
	VII	
IV	VIII	地山

第4表 第94次と第95次の層序の対応

第Ⅰ層：現代の表土・盛土である。調査区内は地山ブロックを多く含む土や山砂で広く盛土整地されており、その下に黒褐色の盛土以前の表土も認められた。いずれの層も現代の瓦、ガラス・プラスチック片などを含むため、すべて現代の層と判断した。また、第94次調査の近代以降と推定した「第Ⅱ層」についても、今回の調査によりビニール片が出土したことから第Ⅰ層に含めることとした。厚さは北区東壁で現地表面から最大約1.1mである(図版10i-i')。複数の層に細分できるが、今回はまとめてⅠ層と表示する。

第Ⅱ層：第Ⅲ層を覆う堆積層で、南区北東部に分布する(図版8)。第Ⅱa～c層に細分した(図版13j-j')。第Ⅱa層は灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト層で、厚さは北壁で最大0.2m、第Ⅱb層はにぶい黄褐色(10YR5/3)シルト層で、厚さは南区東壁で最大約0.4m、



図版7 基本層序模式図

第II c層は暗褐色（10YR3/3）シルト層で、厚さは南区北壁で最大0.2 mである。第II b層から磁器が出土しており近世以降と推定される。

第III層：黒褐色（10YR3/2）粘土質シルト層で、炭化物片と須恵系土器小片を多く含む。南区東部に広く分布し（図版8）、厚さは東壁で最大約0.2 mである（図版13j-j'）。上面でSD3438・3453・3454溝、SD3455自然流路を検出した。第III層に類似するものに、第94次調査のSK3421土坑の堆積土とした大別1層がある（『年報2020』）。SK3421大別1層は、SK3421大別4層を掘り込み大別1層に覆われるSK3422土坑の存在から、SK3421の堆積土というよりはそれら全体を覆う基本層のような堆積状況である。両者は、色調や須恵系土器を多く含むこと、須恵系土器の特徴が類似することから対応するとみられる。

第IV層：第V層を覆う堆積層で、第IV a・b層に細分した。両者は直接の重複関係はないが、層序や色調の類似からまとめて第IV層とした。ともに南区北東隅に分布する（図版8）。第IV a層はにぶい黄褐色（10YR4/3）粘土質シルト層で、明黄褐色（10YR6/6）シルト小ブロックを非常に多く含み、厚さは南区東壁で最大約0.1 mである（図版13j-j'）。第IV b層は灰黄褐色（10YR4/2）シルト層で炭化物片を少量含み、厚さは南区北壁で最大約0.1 mである（図版13k-k'）。

第V層：黒褐色（10YR3/1）粘土質シルト層で、炭化物片と土器小片を多く含む。南区東壁沿いの深掘り部分で検出した（図版8）。南区北東隅周辺に分布し、厚さは東壁で最大約0.2 mである（図版13j-j'）。上面でSD3449溝を検出した。

第VI層：第VII層を覆う堆積層で、第VI a～c層に細分した。このうち、第VI a層と第VI b・c層は、分布範囲が異なり直接の重複関係はないが、堆積土から古代の遺物が出土すること、上面で古代の遺構が検出されていることから、これらをまとめて第VI層とした。なお、第VI a層と第VI b・c層の新旧関係は不明であり、両者の細分層名は便宜的なものである。

第VI a層はにぶい黄褐色（10YR4/3）シルト層で、地山の岩盤粒・小礫を含む。南区北半の中央部分に分布し（図版8）、厚さは最大約0.1 mである（図版17m'-m''）。第VI b層は暗褐色（10YR3/4）シルト層で、北区北東隅から南区北東隅の広範囲に分布する（図版8）。厚さは北区南東部で最大約0.3 mである（図版10h-h'）。第VI c層はにぶい黄褐色（10YR4/3）シルト層で、にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト小ブロック

を多く、炭化物片を少量含む。南区北東部から東部中央の広範囲に分布し（図版8）、厚さは東壁で最大約0.2mである（図版13j-j'）。第VI a層上面でSB3415掘立柱建物、SD3457溝、第VI b層上面でSB3450掘立柱建物、SK3446・3447土坑、第VI c層上面でSD3452溝、第VI a・c層上面でSD3451溝を検出した（図版8）。

第VII層：第VI層直下で、混入物が多く含まれる堆積層である。第VII a～e層に細分した。このうち、第VII a～d層と第VII e層は、分布範囲が異なり直接の重複関係はないが、第VI層より下位にあること、部分的な確認のものが多く詳細が不明であることから、今回はこれらをまとめて第VII層とした。なお、第VII a～d層と第VII e層の新旧関係は不明で、両者の細分層名は便宜的なものである。

第VII a層は暗褐色（10YR3/3）シルト層で、にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト小ブロックを多く、炭化物片をわずかに含む。第VII b層は褐色（10YR4/4）シルト層で、地山ブロック、岩盤小礫を多く含む。第VII c層はにぶい黄褐色（10YR5/4）シルト層で、黄褐色（10YR5/6）粘土質シルト小ブロックを非常に多く含む。第VII d層は黄褐色（10YR5/6）粘土質シルト層で、炭化物片を少量含む。第VII a～d層は、N 102以北の南区東壁沿いの深掘り部分で検出したが（図版8・12・13j-j'・29）、調査範囲が狭く平面的な分布範囲は不明である。厚さはいずれも南区東壁で、第VII a層が最大約0.2m、第VII b層が0.1m以上、第VII c層が約0.2m、第VII d層が0.2m以上である。第VII e層は灰黄褐色（10YR5/2）粘土質シルト層で、灰黄褐色（10YR6/2）粘土質シルト粒を含む。南区北半の中央部分に分布し（図版8）、厚さは最大約0.1mである。

第VIII層：地山である。地点によって様相が異なり、北区西半と南区西部は黄色の凝灰岩の岩盤で、北区東半は褐色シルト、南区の中央から東部は黄褐色の粘土質シルトである。

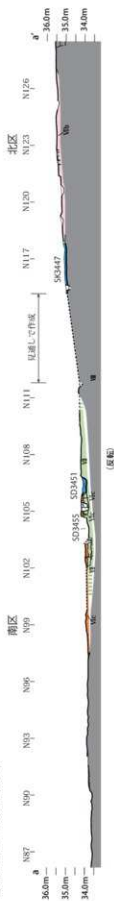
（2）発見遺構と出土遺物

掘立柱建物2棟、竪穴建物1棟、土坑5基、溝14条、自然流路3条、柱穴を検出した（図版8、第3表）。このうち、第95次調査で新たに検出したのは掘立柱建物1棟、土坑3基、溝9条、自然流路1条である。出土遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、白磁、灰釉陶器、瓦、転用砥、土製品、石製品、鉄製品、鉄滓で、この他に中世陶器、近世以降の陶磁器・瓦質土器・土師質土器・銅銭がある。

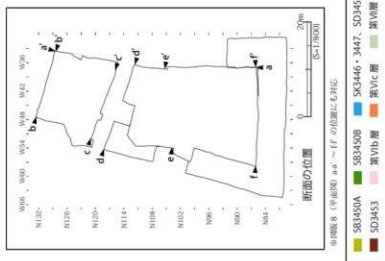
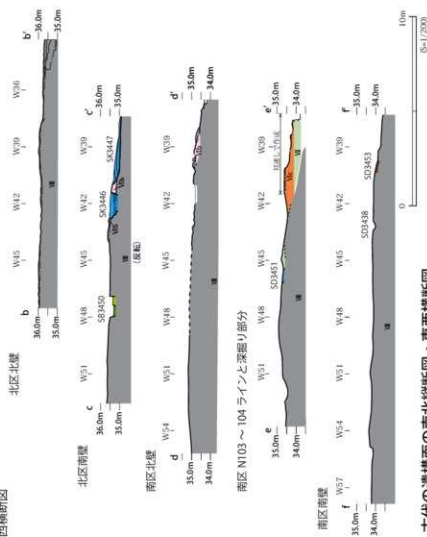
以下、第95次調査で検出した遺構の記述を行うが、この中で第94次調査でも検出し『年報2020』で報告した遺構で、断ち割りを行っておらず新たな情報を得ていないSK3430・3431土坑、現代の遺構であることが判明したSD3432・3433溝については記述を省略する。また、SB3415掘立柱建物と同一の遺構と判断したSB3416掘立柱建物・SA3417柱列、SD3438溝と同一の遺構と判断したSD3419溝については、遺構登録を取り消した（第3表）。なお、遺構が少量であることから北区と南区を分けずに、遺構の種類ごとに記述し、遺構以外から出土した遺物については、特筆すべきものに限って報告する。



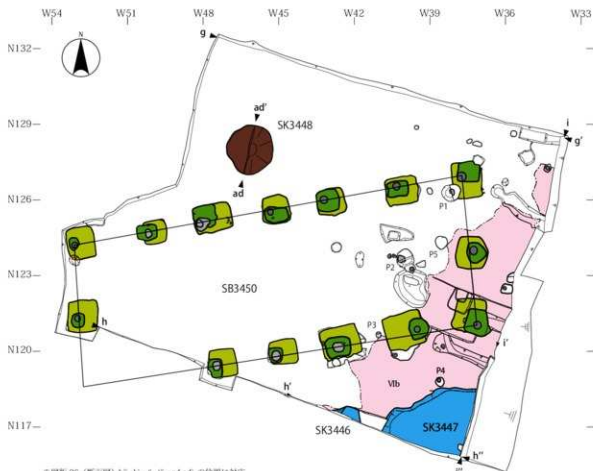
南北縦断面 (調査区東壁)



東西横断面



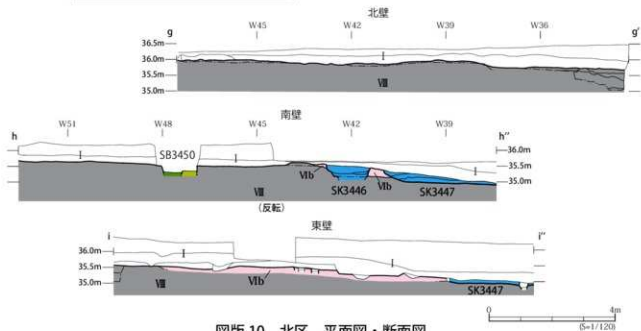
図版 9 古代の遺構面の南北縦断面・東西横断面



※図版 26 (断面図) h''・h'・f'・f''・ad・ad'' の位置に対応



※赤い道境線は重複する遺構を
振りあけて後出したもの



図版 10 北区 平面図・断面図



全景（上が北）

[Z9375]

図版 11 北区 全景写真

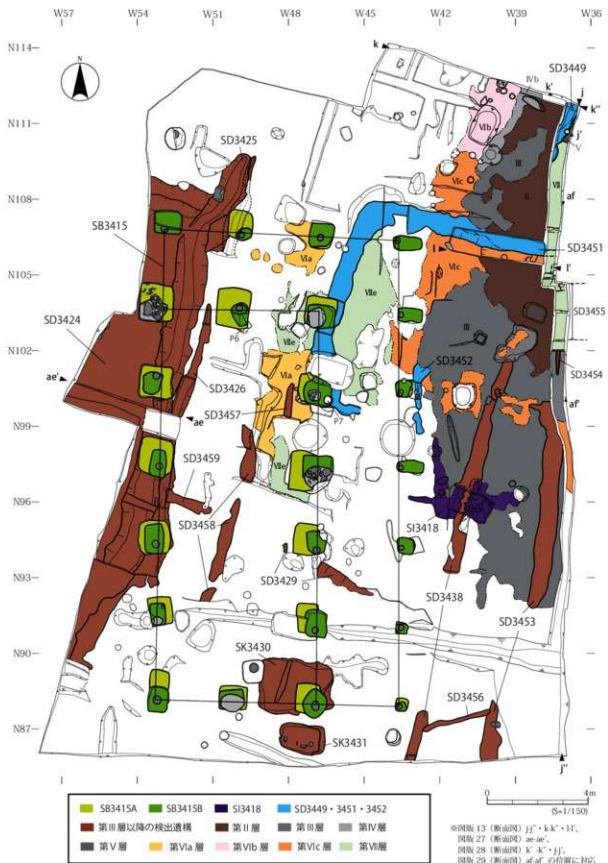
1) 掘立柱建物

【SB3415 掘立柱建物】（平面図：図版 15、断面図：図版 17・18、遺物：図版 21）

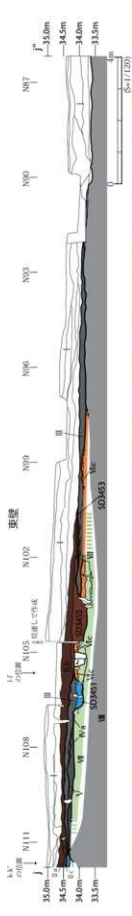
【概要】南区に位置し、遺構確認面は北半の中央部が第Ⅵa・Ⅶe層、それ以外は第Ⅷ層である（図版 15）。第94次調査でSB3415・3416掘立柱建物、SA3417柱列としたもので、第95次調査でこれらを再検出するとともに、その遺構間で複数の柱穴を確認した。これらの柱穴の規模が類似することや、柱穴が一定の間隔で規則的に配置されることから、新たに検出した柱穴とSB3415・3416、SA3417は1棟の建物と考えられ、これをSB3415とした。

SB3415は、桁行6間、梁行3間で東と北に廂が付く南北棟である。西側柱列はW 53～54、東側柱列はW 43～44、北側柱列はN 106～107、南側柱列はN 88の座標線上に位置する。同位置で1度建て替えられている（A→B）。24個すべての柱穴を検出し、身舎6個、廂5個（北廂2個、東廂3個）の計11個で半截を行った（図版 15）。なお、東廂の北端で北廂の東端の柱穴については、平面形と規模が東廂の柱穴と類似することから、東廂として扱う。

【重複】SK3430土坑、SD3426・3429・3451・3452溝、SD3424・3425自然流路と重複し、これらより古い。



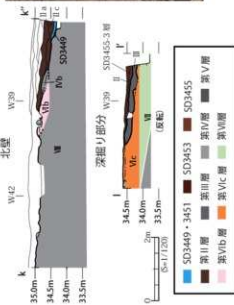
図版12 南区 平面図



東壁N111付近の断面（西から） [Z9256]

東壁N105～N107付近の断面（南西から） [Z9351]

東壁N102～N103付近の断面（西から） [Z9250]



北壁の断面（西から） [Z9235]

深掘り部分の断面（北東から） [Z9261]

図版 13 南区 断面図・断面写真

※図版 12（平面図）J・K・K'・L'E'の位置に対応



全景（上が北）

[Z9378]

図版 14 南区 全景写真

SB3415A

〔検出〕 22 個の柱穴を検出した。柱痕跡や柱抜取穴は認められず、A 柱抜取穴が B 掘方に利用されたと推定される。建物の規模、柱間、方向は不明だが、B 柱穴とほぼ同位置で重複することから、それらは B と同様と推定される。

〔身舎の柱穴〕 一辺 112～166cm の隅丸方形で（図版 15、第 5 表）、深さは身舎の北妻の柱穴（図版 19 ㉘～㉚）が 59～78cm、東側柱列の北から 3 個目の柱穴（㉜）が 56cm、南妻の柱穴（㉑・㉓）が 53～67cm、掘方底面の標高は、北妻の柱穴が 33.97～34.10 m、東側柱列の北から 3 個目の柱穴が 34.05 m、南妻の柱穴が 33.62～33.70 m である（図版 19）。南北方向では、身舎北半の柱穴の底面標高が約 34.0 m であるのに対して南妻は 33.6～33.7 m であり、両者には 30～40cm の高低差がある（図版 15m-m'）。一方、東西方向では、北妻は 13cm、南妻は 8cm の高低差があり、南北よりは大きな差がなく類似した値となる（図版 15n-n'・o-o'）。埋土は地山の岩盤粒・小礫・礫等の混入物を多量に含むシルト・粘土質シルト・シルト質粘土の互層である（図版 17・18）。

〔廂の柱穴〕 北廂の柱穴掘方のうち規模が判明したのは西から 2 個目の柱穴（図版 19 ㉒）で、一辺 120cm の隅丸方形である（図版 15、第 5 表）。深さは西から 3 個目の柱穴（図版 19 ㉓）が



図版15 SB3415 掘立柱建物 平面図・エレベーション図



全景1（東から）

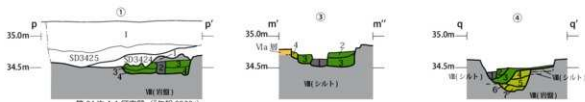
[Z9381]



全景2（東から）

[Z9387]

図版 16 SB3415 掘立柱建物 全景写真

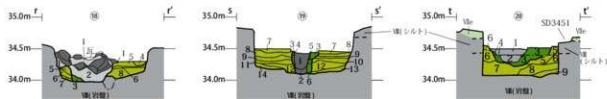


① ② ④ 参照図 15 (平面図) m・m'・p・p'→t・t'の位置に対応

層	土色	土性	含有物など
B 掘削穴	1 明黄褐色 (10YR6/9)	シルト質粘土	地山ブロックを多量に、原生動物をわずかに含む
B 掘方埋土	2 灰黄褐色 (10YR3/4)	粘土	地山粒、原生動物を少量含む
A 掘方埋土	3 黄褐色 (10YR5/6)	粘土	地山ブロックを多量に、原生動物を少量含む
	4 黄色 (2.7Y7/6)	シルト質粘土	地山ブロック主体

層	土色	土性	含有物など
B 柱基礎	1 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	灰白色火山灰粒・小ブロック、地山ブロックをやや多く含む、原生動物を少量含む
B 掘方埋土	2 灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	地山小ブロックを非常に多く含む、原生動物を少量含む
	3 灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山小ブロックをやや多く含む、原生動物を少量含む
A 掘方埋土	4 褐色 (10YR4/4)	シルト	地山小ブロックを非常に多く含む、原生動物を少量含む

層	土色	土性	含有物など
B 柱基礎	1 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	(8) 小ブロック、(13) 小ブロックをやや多く含む
B 掘方埋土	2 黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	(16) 小ブロックをやや多く含む
	3 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	(11)・(13) 粒・小ブロックを多量に含む
	4 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	(13) 粒・小ブロックを多量に含む
A 掘方埋土	5 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	(13) 粒・小ブロック、(11) 小ブロック・ブロックを多量に含む
	6 褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト	(4) 小ブロックを含む
	7 暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	(9) 小ブロックを含む



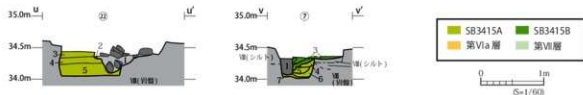
層	土色	土性	含有物など
B 掘削穴	1 にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘土質シルト	岩粒・小礫・礫を多量に含む
B 掘方埋土	2 灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土質シルト	岩粒・小礫を多量に、原生動物・片を含む
	3 灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土質シルト	岩粒・小礫を多量に含む
	4 暗褐色 (2.5Y3/2)	粘土質シルト	岩粒・小礫を含む
A 掘方埋土	5 黄褐色 (10YR7/6)	シルト	(18) 小ブロックを含む
	6 灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土質シルト	岩粒・小礫を多量に含む
	7 にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	(8) 粒・小ブロックを含む
	8 明黄褐色 (2.5Y7/6)	シルト	岩粒・小礫、(8) 小ブロック・ブロックを含む

層	土色	土性	含有物など
B 柱基礎	1 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	岩粒・小礫、(14) 粒・小ブロックを多量に含む
	2 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	岩粒・小礫を多量に、原生動物・片をわずかに含む
B 掘方埋土	3 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒・小ブロック・ブロック、岩粒・小礫、(11) 粒・小ブロック、(8) 小ブロックを多量に含む
	4 にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘土質シルト	岩粒・小礫、(8)・(16) 小ブロックを含む
	5 褐色 (7.5YR6/9)	粘土質シルト	岩粒・小礫、(8)・(16) 小ブロックをやや多く含む
	6 にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘土質シルト	地山粒・小ブロック、(8) 小ブロックを含む、原生動物・片をわずかに含む
	7 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒・小ブロック・ブロック、岩粒・小礫、(1) 粒・小ブロックを多量に、(8) 小ブロックをやや多く含む
	8 褐色 (7.5YR6/9)	粘土質シルト	岩粒・小礫を多量に、(8)・(16) 小ブロックを含む
	9 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山小ブロック、岩粒・小礫、(1)・(8) 小ブロックを含む
A 掘方埋土	10 にぶい黄褐色 (10YR6/3)	粘土質シルト	地山小ブロック、岩粒・小礫・小礫、(1)・(8) 小ブロックを多量に含む
	11 暗褐色 (10YR3/3)	シルト	岩粒・小礫を多量に含む
	12 褐色 (7.5YR6/9)	粘土質シルト	岩粒・小礫、(3) 粒・小ブロックを多量に含む
	13 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	岩粒・小礫を多量に含む
	14 にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘土質シルト	岩粒・小礫を非常に多く含む

層	土色	土性	含有物など
B 掘削穴	1 灰黄褐色 (10YR6/2)	粘土質シルト	岩粒・小礫、(5) 粒・小ブロック、(16) 小ブロックを多量に含む
B 掘方埋土	2 灰黄褐色 (10YR6/2)	粘土質シルト	岩粒・小礫、(16) 小ブロックを多量に、(5) 粒・小ブロックを含む
	3 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	岩粒・小礫、(5)・(7) 粒・小ブロックを多量に含む
	4 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	岩粒・小礫、(5)・(7) 粒・小ブロックを多量に含む
	5 暗褐色 (10YR3/3)	シルト	岩粒・小礫を多量に、(5)・(7) 小ブロックをやや多く含む
A 掘方埋土	6 浅黄色 (5Y7/4)	粘土質シルト	岩粒・小礫を多量に、(5)・(7)・(13) 小ブロックをやや多く含む
	7 浅黄色 (5Y7/4)	粘土質シルト	岩粒・小礫、(5) 小ブロックを多量に、(7)・(16) 小ブロックを含む
	8 灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト質粘土	岩粒・小礫を多量に含む

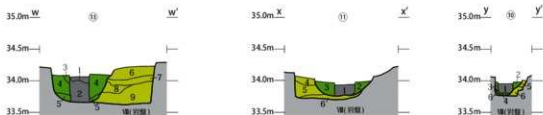
● SB3415A ● SB3145B ● 第Ⅴa層 ● 第Ⅴb層 ※土層は記載の含有物の類型の内容は図版 18 に掲載 0 1m (5=1/60)

図版 17 SB3415 掘立柱建物 断面図 (1)



層	土色	土性	含有物など
B 掘削①	1 灰黄褐色 (10YR6/2)	粘土質シルト	岩礫粒・小礫、礫、(12) 粒・小ブロック、(16) 小ブロックを多量に含む
B 掘方埋土	2 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	小礫、礫、(7)・(12) 粒・小ブロックを多量に含む
	3 灰黄褐色 (10YR6/2)	粘土質シルト	岩礫粒・小礫、(12) 粒・小ブロックを多量に、(16) 粒・小ブロックをやや多く含む
A 掘方埋土	4 灰黄褐色 (10YR6/2)	粘土質シルト	岩礫粒・小礫、(12)・(16) 粒・小ブロックを多量に含む
	5 黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	岩礫粒・小礫、(7) 粒・小ブロックを多量に含む

層	土色	土性	含有物など
B 柱基礎	1 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	(7) 小ブロックをやや多く、岩礫粒・小礫を含む
B 掘方埋土	2 黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	岩礫粒・小礫、(7) 小ブロックをやや多く、(16) 小ブロックを含む
	3 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	岩礫粒・小礫、(7)・(12) 小ブロックをやや多く含む
A 掘方埋土	4 黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	岩礫粒・小礫、(7)・(16) 小ブロックをやや多く含む
	5 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	(7)・(12) 小ブロックを含む
	6 灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	(7)・(12) 小ブロックをやや多く含む
	7 暗褐色 (10YR4/1)	シルト質粘土	地山和・小ブロックを含む



層	土色	土性	含有物など
B 柱基礎	1 灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト質粘土	地山小ブロック、(8) 小ブロックを多量に含む
B 掘方埋土	2 褐色 (7.5YR6/8)	粘土	(15) 小ブロックを多量に、岩礫小礫を多量に含む
	3 褐色 (7.5YR6/8)	粘土	(8)・(10) 小ブロックを多量に、岩礫小礫を少量含む
B 掘方埋土	4 褐色 (7.5YR6/8)	粘土	(17)・(18) 小ブロックを多量に、(8)・(9) 粒・小ブロックを少量含む
	5 褐色 (7.5YR6/8)	粘土	(17)・(18) 小ブロックを多量に、(8)・(9) 粒・小ブロックを少量含む
A 掘方埋土	6 褐色 (7.5YR6/8)	粘土	岩礫粒・小礫、(17)・(18) 小ブロックを多量に含む
	7 明褐色 (7.5YR5/6)	粘土	(19) 小ブロックをやや多く含む
	8 明褐色 (7.5YR5/6)	粘土	(19) 小ブロックを多量に含む
	9 黄褐色 (2.5Y5/4)	粘土質シルト	岩礫小礫を多量に、(2)・(6)・(10) 小ブロックをやや多く含む

層	土色	土性	含有物など
B 柱基礎	1 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	(14) 小ブロックを多量に、岩礫粒小礫をやや多く含む
B 掘方埋土	2 明褐色 (7.5YR5/6)	粘土	(8)・(10) 小ブロックを多量に、岩礫小礫をやや多く含む
	3 褐色 (10YR4/6)	シルト質粘土	(8)・(10) 小ブロックを多量に、岩礫小礫をやや多く含む
A 掘方埋土	4 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	岩礫粒、小礫、(14) 小ブロックを多量に含む
	5 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	岩礫粒、小礫を多量に、(14) 小ブロックを含む
	6 にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト質粘土	岩礫粒、小礫を多量に、(8) 小ブロックをやや多く含む

層	土色	土性	含有物など
B 柱基礎	1 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	(8)・(9) 小ブロックを多量に、灰化物粒を少量含む
B 掘方埋土	2 褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト	(8) 小ブロックを多量に含む
	3 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山小ブロック、灰化物粒を少量、(8) 小ブロックを含む
A 掘方埋土	4 灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト質粘土	地山和を少量含む
	5 灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土質シルト	地山和・小ブロック、岩礫小礫を多量に含む
6 灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土質シルト	地山和・小ブロック、岩礫小礫をやや多く含む	

SB3415 土層注記表の含有物の類型

観号	土色・土性	観号	土色・土性	観号	土色・土性
(1)	褐色 (7.5YR6/8) 粘土質シルト	(8)	灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト	(14)	褐色 (10YR4/6) 粘土質シルト・シルト質粘土
(2)	明褐色 (7.5YR5/6) 粘土	(9)	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト・シルト質粘土	(15)	暗褐色 (10YR3/3) シルト
(3)	にぶい黄褐色 (10YR7/2) 粘土質シルト	(10)	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト質粘土	(16)	暗褐色 (10YR3/4) シルト・粘土質シルト
(4)	にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘土質シルト	(11)	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	(17)	灰褐色 (2.5Y7/4) 粘土質シルト
(5)	明黄褐色 (10YR6/6) 粘土質シルト	(12)	黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト	(18)	にぶい黄褐色 (2.5Y6/3) シルト
(6)	暗褐色 (10YR4/1) シルト質粘土	(13)	黄褐色 (10YR5/8) 粘土質シルト	(19)	灰褐色 (5Y7/2) 粘土
(7)	灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト				

※観号 15 (平面図) u-u'-y-y' の位置に対応

図版 18 SB3415 掘立柱建物 断面図 (2)

22cmで、その底面標高は34.64 mである。東廂の柱穴掘方のうち判明したものは一辺49～70 cmで、形状はB掘方に壊されており不明である(図版15、第5表)。深さは北端の柱穴(④)が38cm、北から4個目の柱穴(⑦)が50cm、南端の柱穴(⑩)が33cm、底面標高は、北端が34.12 m、北から4番目が34.01 m、南端が33.76 mである(図版19)。北廂の底面標高が高く、東廂は身舎と類似した値となる。埋土は、地山粒・小ブロック、岩盤粒・小礫等を含むシルト・粘土質シルト・シルト質粘土である(図版17・18)。

【出土遺物】掘方埋土から土師器環・甕、須恵器環(図版21-1)・瓶・甕、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅡA・ⅡB類、鉄滓が出土した。平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ1(2)がある。また、丸瓦ⅡB類(図版32-3)や平瓦には焼瓦が認められる。

SB3415B

【検出】24個の柱穴のうち17個で柱痕跡、7個で柱抜取穴を確認した。柱穴の平面や半載した断面にAの柱痕跡や柱抜取穴が認められないことから、B掘方は、A柱抜取穴を利用したものと推定される。

【規模】桁行は西側柱列で総長18.6 m、柱間は北から約3.1 m(廂)、約2.7 m、3.5 m、3.1 m、約3.1 m、約3.1 m、梁行は南妻で総長9.6 m、柱間は西から約3.0 m、約3.3 m、3.3 m(廂)である(図版19)。

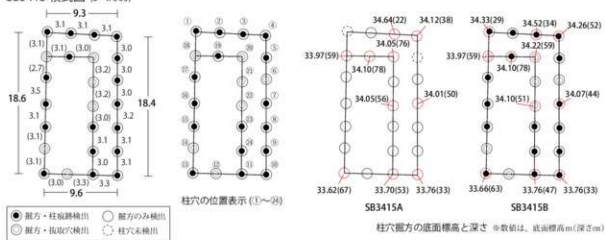
【方向】西側柱列は南北基準線より北で東へ1°、南側柱列は東西基準線より東で南に2°偏る。

【身舎の柱穴】柱穴掘方は一辺ないし長径90～123cmの隅丸方形、楕円形で(図版15、第5表)、深さは身舎の北妻の柱穴(図版19 ⑩～⑫)が59～78cm、東側柱列の北から3個目の柱穴(⑫)が51cm、南妻の柱穴(⑪・⑬)が47～63cm、掘方底面の標高は、北妻の柱穴が33.97～34.22 m、東側柱列の北から3個目の柱穴が34.10 m、南妻の柱穴が33.66～33.76 mである(図版19)。身舎北半の柱穴の底面標高が約34.0～34.2 mであるのに対して南妻は33.70 m前後であり、Aと同様に南北で30～50cmの高低差がある(図版15m-m')。一方、東西方向では、北妻は25cm、南妻は10cmの高低差があり、南妻にはAと同様に大きな差は認められないが、北妻ではAよりも差が大きくなる(図版15n-n'・o-o')埋土は地山の岩盤粒・小礫等の混入物を多量に含むシルト・粘土質シルト・粘土の互層である(図版17・18)。

柱痕跡は径27～33cmの円形で、埋土には岩盤粒・小礫など混入物が多く含まれる。柱抜取穴の埋土は岩盤粒・小礫・礫等の混入物を多量に含む粘土質シルトで、人為的に埋め戻されている。

【廂の柱穴】北廂の柱穴掘方は一辺ないし長径65～111cmの隅丸方形、楕円形で(図版15、第5表)、深さは西端の柱穴(図版19 ①)が29cm、西から3個目の柱穴(③)が34cm、底面標高は西端が34.33 m、西から3個目が34.52 mである(図版19)。東廂の柱穴掘方は一辺47～117cmの隅丸方形で、深さは北端の柱穴(④)が52cm、北から4個目の柱穴(⑦)が44cm、南端の柱穴(⑩)が33cm、底面標高は、北端が34.26 m、北から4個目が34.07 m、南端が33.76 mである(図版19)。Aと同じく北廂の底面標高が高く、東廂は身舎と類似した値となる。埋土は、地山粒・小ブロック、岩盤粒・小礫等の混入物を含むシルト・粘土質シルト・シルト

SB3415 模式図 (S=1/500)



図版 19 SB3415 掘立柱建物 模式図

SB3415A

柱穴	形状		長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (m)	出土物	柱穴跡	柱穴跡径 (cm)	出土遺物	
	形状	長さ (cm)								
北端	①	不明	—	—	34.7	—	—	—	—	
	②	圓丸方形	120	100	—	34.9	—	—	—	
	③	不明	74 以上	70 以上	22	34.9	34.64	—	—	
東端	④	不明	51 以上	—	38	34.6	34.12	—	—	
	⑤	不明	—	—	—	34.6	—	—	—	
	⑥	不明	70	24 以上	—	34.6	—	—	—	
	⑦	不明	51 以上	—	50	34.5	34.01	—	—	
	⑧	不明	49 以上	33 以上	—	34.4	—	—	—	
	⑨	不明	49	43 以上	—	34.1	—	—	—	
	⑩	圓丸方形	51	43 以上	33	34.1	33.76	—	—	
	西端	⑪	圓丸方形	122	98	53	34.2	33.70	—	—
		⑫	圓丸方形	112	97	—	34.2	—	—	—
⑬		圓丸方形	80 以上	80	67	34.3	33.62	—	甎方：平瓦ⅠA	
⑭		圓丸方形	114	92	—	34.4	—	—	—	
⑮		圓丸方形	135	130	—	34.5	—	—	—	
⑯		圓丸方形	148	140	—	34.7	—	—	甎方：平瓦ⅡB	
⑰		圓丸方形	140	133	—	34.5	—	—	甎方：土師器腰	
⑱		圓丸方形	153	135	59	34.6	33.97	—	甎方：平瓦ⅠA・ⅠAa・ⅡB a1	
⑲		圓丸方形	166	135	78	34.9	34.10	—	甎方：須恵器腰・平瓦ⅡB・平瓦ⅠB	
⑳		圓丸方形	123	117	76	34.8	34.05	—	甎方：丸瓦Ⅱ・ⅡB・平瓦ⅠA・ⅡA・ⅡB・ⅡB a1・平瓦	
㉑		不明	117	57 以上	(34)	34.7	(34.3)	—	甎方：須恵器腰・ⅡB or ⅡB・平瓦 (焼)	
㉒		圓丸方形	162	110	56	34.7	34.05	—	甎方：須恵器腰・丸瓦Ⅱ	
㉓		圓丸方形	125	100	—	34.5	—	—	甎方：土師器腰・須恵器腰・丸瓦Ⅱ	
㉔		圓丸方形	118	90	—	34.3	—	—	甎方：土師器腰・丸瓦Ⅱ (焼)	

SB3415B

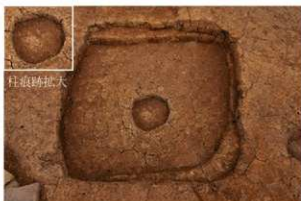
柱穴	形状		長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (m)	出土物	柱穴跡	柱穴跡径 (cm)	出土遺物		
	形状	長さ (cm)									
北端	①	圓丸方形	111	93	29	34.7	34.33	34.34	27	甎方：平瓦ⅠA	
	②	楕円形	65	47	—	34.9	—	—	25	柱穴跡：土師器腰	
	③	圓丸方形	102	95	34	34.9	34.52	34.52	27	甎方：須恵器腰・ⅡB・平瓦ⅠB 柱穴跡：須恵器腰	
東端	④	圓丸方形	117	60	52	34.6	34.26	34.32	23 × 18	甎方：平瓦ⅠA 柱穴跡：丸瓦Ⅱ・平瓦ⅠA	
	⑤	圓丸方形	100	59	—	34.6	—	—	24 × 19	柱穴跡：須恵器腰・平瓦ⅠA	
	⑥	圓丸方形	60	49	—	34.6	—	—	—	甎方：平瓦ⅡB	
	⑦	圓丸方形	110	52	44	34.5	34.07	34.07	20	甎方：須恵器腰・丸瓦Ⅱ	
	⑧	圓丸方形	70	70	—	34.4	—	—	21 × 18	—	
	⑨	不明な圓丸方形	50	40	—	34.1	—	—	23	—	
	⑩	圓丸方形	47	38	33	34.1	33.76	33.80	24	—	
	西端	⑪	楕円形	115	95	47	34.2	33.76	33.60	33	—
		⑫	圓丸方形	100	84	—	34.2	—	—	—	甎方：平瓦ⅡB
⑬		圓丸方形	100	85	63	34.3	33.66	33.66	33 × 30	—	
⑭		圓丸方形	92	60	—	34.4	—	—	—	甎方：須恵器腰	
⑮		圓丸方形	120	75	—	34.5	—	—	30	—	
⑯		圓丸方形	109	65	—	34.7	—	—	28	甎方：須恵器腰・ⅡB	
南端		⑰	楕円形	90	76	—	34.5	—	—	29 × 27	甎方：土師器腰・須恵器腰・丸瓦Ⅱ・平瓦ⅡB・柱穴跡：平瓦Ⅰ
		⑱	不明	110	100	59	34.6	33.97	—	—	焼取穴：須恵器腰・ⅡB・ⅡB a1・丸瓦Ⅱ・平瓦ⅠA・ⅡA・ⅡA・ⅡB・ⅡB a2・平瓦・平瓦Ⅱ (焼)
		㉑	楕円形	90	70	78	34.9	34.10	34.10	28	甎方：須恵器腰・丸瓦Ⅱ・平瓦ⅡB・柱穴跡：須恵器腰
		㉒	圓丸方形	110	95	59	34.8	34.22	—	—	甎方：須恵器腰・ⅡB・平瓦ⅠB・ⅡA・ⅡA・ⅡA・ⅡB・ⅡB a1・平瓦ⅡB・平瓦
		㉓	圓丸方形	123	(113)	(53)	34.7	(34.10)	—	—	甎方：平瓦ⅡB・須恵器腰・丸瓦Ⅱ
		㉔	圓丸方形	(113)	120	51	34.7	34.10	—	—	甎方：須恵器腰・ⅡB・ⅡB a1・平瓦ⅠB・平瓦ⅠB・ⅡA・ⅡA・ⅡA・ⅡB・ⅡB a1・平瓦
		㉕	圓丸方形	93	80	—	34.5	—	—	29	甎方：須恵器腰 or ⅡB・ⅡB・丸瓦Ⅱ・平瓦ⅡB
		㉖	圓丸方形	100	92	—	34.3	—	—	27 × 24	甎方：土師器腰・丸瓦Ⅱ・平瓦ⅠA・平瓦ⅠA・柱穴跡：土師器腰・丸瓦Ⅱ

※①～⑬は図版 19 の模式図の柱穴①～⑬に対応。

第 5 表 SB3415 掘立柱建物の柱穴の属性



柱穴①断面（北から） [Z9265]



柱穴③検出（南から） [Z9269・9270]



柱穴③断面（東から） [Z9272]



柱穴④断面（南から） [Z9274]



柱穴⑧断面（東から） [Z9301]



柱穴⑨断面（西から） [Z9306]



柱穴⑩断面（南から） [Z9311]



柱穴⑫断面（南から） [Z9318]

図版 20 SB3415 掘立柱建物 断面写真（1）



柱穴⑦断面（南から） [Z9279]



柱穴⑧断面（東から） [Z9289]

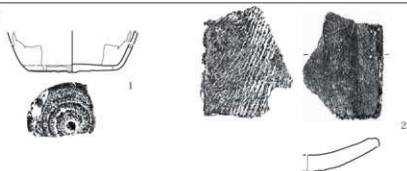


柱穴⑨断面（南から） [Z9286]

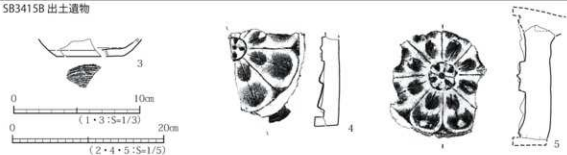


柱穴⑩断面（南から） [Z9283]

SB3415A 出土遺物



SB3415B 出土遺物



（単位：cm）

No.	遺構・層	種類	形状	寸法	特徴	写真掲載	登録	面番号
1	第A層方埴土	須恵器 坏	体一部～底部 1/4	底径 (7.1)	外内：ロケロナデ 底：回転へつ切り→周縁部削いナデ	32-1	R11	B16135
2	第A層方埴土	平瓦	破片	長 (10.3) 幅 (11.7) 厚さ 2.2	平瓦非本類αタイプ1 凸面：輪甲巻 凹面：布目ツナデ 側縁付近ケズリ 側端・小口：ケズリ	32-2	R13	B16135
3	第B層方埴土	須恵器 坏	体一部～底部 1/6	底径 (5.3)	外内：ロケロナデ 底：回転へつ切り無調整	32-4	R16	B16135
4	第B層方埴土	軒丸瓦	瓦当部 1/4	瓦当径 (20.6) 厚さ 3.1 中径径 3.3 中径高さ 0.4	蓮弁蓮花文 121 側面：平行甲巻→ケズリ 瓦当裏：ナデ 小蓮弁付近に范無調整	32-5	R19	B16135
5	第B層後取穴	軒丸瓦	瓦当部 2/3	瓦当径 (18.3) 厚さ 5.1 中径径 4.1 中径高さ 0.9	蓮弁蓮花文 128 側面：ケズリ→ナデ 瓦当裏：ナデ→周縁部ケズリ 丸瓦端部凸面輪甲巻 丸瓦との接合部に角目配字	32-6	R20	B16135

図版 21 SB3415 掘立柱建物 断面写真 (2) ・出土遺物

質粘土である（図版 17・18）。

柱痕跡は北廂が径 25～27cmの円形、東廂が径 20～24cmの円形である。北廂の西から 3 個目の柱穴の柱痕跡には、灰白色火山灰粒・小ブロックがやや多く含まれる。

【出土遺物】掘方埋土から土師器環・甕、須恵器環（図版 21・3）・瓶または甕・甕、軒丸瓦（4）、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡB類、柱痕跡から土師器環、須恵器環・甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦Ⅰ・ⅠA類、柱抜取穴から土師器環・甕、須恵器環・瓶・甕、軒丸瓦（5）、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・Ⅱ・ⅡB類、鉄滓、遺構確認面から丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡC類が出土した。掘方埋土から出土した軒丸瓦には重弁蓮花文 121、柱抜取穴から出土した軒丸瓦には重弁蓮花文 128、平瓦ⅡB類には a タイプ 2 がある。

【SB3450 掘立柱建物】（平面図・断面図：図版 22、遺物：図版 24）

【検出】北区の N 119～128・W 36～54 の範囲に位置し、遺構確認面は南東部が第Ⅵb層、それ以外が第Ⅷ層である（図版 22）。桁行 6 間、梁行 2 間の東西棟で、同位置で 1 度建て替えられている（A→B）。南西部以外の 14 個の柱穴を検出し、北西・北東・南東隅の柱穴と南側柱列の東から 5 個目の柱穴の計 4 個を半載した。

【重複】北東隅の柱穴が P1 と重複し、これより古い。

SB3450A

【検出】14 個の柱穴のうち、北東隅と南東隅の柱穴 2 個において、B 掘方の下面で柱痕跡を確認した。建物の規模、柱間、方向は不明だが、B 柱穴とほぼ同位置で重複することから、それらは B と同様と推定される。

【柱穴】柱穴掘方は一辺 95～156cmの隅丸方形で（図版 22、第 6 表）、深さは北西隅の柱穴（図版 23 ①）が 53cm、北東隅の柱穴（⑦）が 85cm、南側柱列東から 5 個目の柱穴（⑬）が 41cm、南東隅の柱穴（⑨）が 64cm、掘方底面の標高は、北西隅が 35.23 m、北東隅が 34.90 m、南側柱列東から 5 個目が 35.26 m、南東隅が 34.64 m である（図版 23）。底面の標高では、建物西半が類似した値となるが、北東隅はそれらより約 30cm、南東隅は約 60cm低い（図版 22・23）。埋土は地山の岩盤粒・小礫・礫等の混入物を多量に含む粘土質シルト・シルト質粘土の互層である。

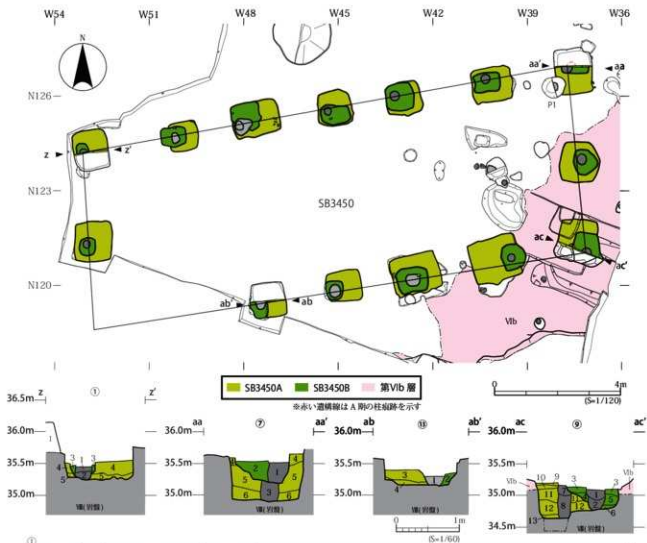
柱痕跡は径 20～27cmの円形と推定される。埋土は岩盤粒・小礫等を含む粘土質シルトで、B 柱を据える前に埋め戻したものである。

【出土遺物】掘方埋土から土師器高台環（図版 24-1）・甕、須恵器環・瓶または甕・甕、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・ⅡB類、転用砥が出土した。丸瓦Ⅱ類と平瓦ⅡB類には焼瓦が含まれ、後者の凹面には刻印「丸」（「丸」Aカ）が認められる（図版 32-8）。

SB3450B

【検出】14 個の柱穴のうち、9 個で柱痕跡、5 個で柱抜取穴を確認した。

【規模】桁行は北側柱列で総長 15.7 m、柱間は西から約 3.0 m、約 2.0 m、約 2.9 m、2.2 m、

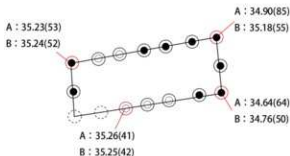
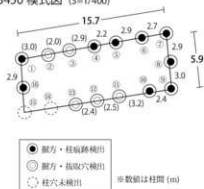


層	土色	土性	含有物など
B 柱基礎	1 暗褐色 (7.5YR4/4)	シルト	(3) 小ブロックを多量に、(8)・(10)粘・小ブロックをやや多く、炭化物をわずかに含む
	2 灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	(1) 小ブロック・ブロック、(2) 小ブロックを多量に含む
	3 におい・黄褐色 (10YR5/4)	シルト	(9)・(11)粘・小ブロックを多量に、炭化物をわずかに含む
	4 暗褐色 (7.5YR5/6)	粘土質シルト	(7)・(8) 小ブロック・ブロックを多量に、炭燧粒・小礫をやや多く含む
	5 暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	(10) 小ブロックを多量に、(3) 小ブロックを含む、炭化物・片を少量含む
A 柱基礎	1 暗褐色 (10YK3/4)	粘土質シルト	(5) 小ブロックを多量に、炭燧粒をやや多く含む
	2 暗褐色 (10YK3/4)	粘土質シルト	炭燧粒・小礫、(3) 小ブロックを多量に、炭化物・片を少量含む
	3 暗褐色 (10YK3/4)	粘土質シルト	炭燧粒・小礫をやや多く含む
	4 暗褐色 (10YK3/4)	粘土質シルト	(5) 小ブロック、炭燧粒をやや多く、炭化物・片を含む
	5 暗褐色 (10YK3/4)	粘土質シルト	(5) 小ブロックをやや多く、炭燧粒・小礫を含む、炭化物・片を少量含む
	6 暗褐色 (10YK3/3)	粘土質シルト	(5) 小ブロックをやや多く、炭燧粒・小礫を含む、炭化物・片を少量含む
A 柱基礎	1 暗褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	炭燧粒、(3) 小ブロックを多量に、炭化物・片を含む
	2 におい・黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	炭燧粒・小礫、(3) 小ブロックを多量に、炭化物・片を含む
	3 におい・黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	炭燧粒・小礫・塊、(10) 小ブロックを多量に含む
	4 暗褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	炭燧粒・小礫を多量に含む
A 柱基礎	1 暗褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	炭燧粒・小礫、(4) 小ブロック、(7) 粘・小ブロックを多量に、炭化物をわずかに含む
	2 暗褐色 (10YK3/4)	粘土質シルト	炭燧粒・小礫、(4) 小ブロック、(7) 粘を多量に含む
	3 灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	炭燧粒・小礫、(7) 粘、(8) 小ブロックを多量に含む
	4 暗褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	炭燧粒、(4) 小ブロックを多量に含む
	5 暗褐色 (10YK3/3)	粘土質シルト	(4)・(8) 小ブロックをやや多く、炭燧粒・小礫を含む
	6 暗褐色 (10YK3/3)	粘土質シルト	(4)・(8) 小ブロックを多量に、炭燧粒・小礫を含む
	7 におい・黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	炭燧粒、(9) 小ブロックをやや多く、炭化物をわずかに含む
	8 暗褐色 (10YK3/3)	粘土質シルト	炭燧粒・小礫、(4) 小ブロックをやや多く、炭化物・片を少量含む
	9 暗褐色 (10YK3/4)	粘土質シルト	炭燧粒・小礫、(4) 小ブロックを多量に含む
	10 におい・黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	炭燧粒・小礫、(9) 粘を多量に含む
	11 暗褐色 (10YK3/3)	粘土質シルト	炭燧粒・小礫、(5) 小ブロックをやや多く、(8) 粘・小ブロックを含む
	12 暗褐色 (10YK3/3)	シルト質粘土	炭燧粒・小礫、(5) 小ブロック、(8) 粘・小ブロックを含む、炭化物・片をわずかに含む
	13 暗褐色 (10YK3/4)	粘土質シルト	炭燧粒、(5) 小ブロック、(8) 粘を多量に含む

※上層に記述の含有物の検出：(1) におい・黄褐色 (10YR5/4) シルト、(2) 明黄褐色 (10YR6/4) 粘土質シルト、(3) 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト、(4) 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト、(5) におい・黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト、(6) 黄褐色 (10YR5/3) 粘土質シルト、(7) 暗褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト、(8) 暗褐色 (10YR4/4) シルト・粘土質シルト、(9) 暗褐色 (10YK3/3) シルト・粘土質シルト、(10) 暗褐色 (7.5YR5/6) 粘土質シルト

図版 22 SB3450 掘立柱建物 平面図・断面図

SB3450 模式図 (S=1/400)



柱穴掘方の底面標高と深さ ※数値は、底面標高m(深さcm)

図版 23 SB3450 掘立柱建物 模式図

SB3450A

柱穴	掘方			深さ (cm)	標高 (m)		柱間距離 (cm)	柱間距離 (cm)	出土遺物
	形状	長さ (cm)	幅 (cm)		輸出	底面			
①	圓丸方形	130	113	53	35.8	35.23	—	—	—
②	圓丸方形	95	94	—	35.8	—	—	—	—
③	圓丸方形	151	113	—	35.8	—	—	—	—
④	圓丸方形	118	116	—	35.7	—	—	—	—
⑤	圓丸方形	114	108	—	35.8	—	—	—	—
⑥	圓丸方形	135	111	—	35.8	—	—	—	—
⑦	圓丸方形	145	120	85	35.7	34.90	34.90	(27)	掘方：土師器壺、転用瓦、丸瓦Ⅱ・Ⅲ B
⑧	圓丸方形	130	130	—	35.6	—	—	—	掘方：須恵器壺、平瓦Ⅰ A
⑨	圓丸方形	138	127	64	35.4	34.64	34.64	(20)	掘方：丸瓦Ⅱ、平瓦Ⅲ B(横)
⑩	圓丸方形	156	150	—	35.6	—	—	—	掘方：須恵器片、須恵器坪、丸瓦Ⅱ・Ⅲ(横)、平瓦
⑪	圓丸方形	156	130	—	35.6	—	—	—	—
⑫	圓丸方形	114	100	—	35.6	—	—	—	—
⑬	圓丸方形	112	110	41	35.6	35.26	—	—	掘方：土師器高台坪
⑭	圓丸方形	130	124	—	35.7	—	—	—	掘方：須恵器壺or 壺・甕、丸瓦Ⅱ・Ⅲ(横)、平瓦Ⅲ B

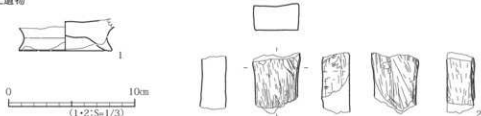
SB3450B

柱穴	掘方			深さ (cm)	標高 (m)		柱間距離 (cm)	柱間距離 (cm)	出土遺物
	形状	長さ (cm)	幅 (cm)		輸出	底面			
①	楕円形	50	40	52	35.8	35.24	35.24	30	柱礎跡：砥石
②	圓丸方形	80	65	—	35.8	—	—	—	掘方：軒平瓦
③	圓丸方形	93	90	—	35.8	—	—	—	掘取穴：平瓦Ⅲ B
④	圓丸方形	98	62	—	35.7	—	—	25 × 21	—
⑤	圓丸方形	90	90	—	35.8	—	—	30	—
⑥	圓丸方形	83	60	—	35.8	—	—	28	柱礎跡：須恵器壺、丸瓦Ⅱ
⑦	圓丸方形	90	83	55	35.7	35.18	35.18	36	掘方：平瓦、柱礎跡：丸瓦Ⅱ
⑧	楕円形	80	76	—	35.6	—	—	34 × 30	柱礎跡：土師器坪、須恵器壺
⑨	圓丸方形	110	108	50	35.4	34.76	34.76	30	柱礎跡：須恵器坪、丸瓦Ⅱ B、平瓦Ⅰ A、鉄押
⑩	圓丸方形	80	75	—	35.6	—	—	24	柱礎跡：丸瓦Ⅱ、平瓦Ⅰ A
⑪	圓丸方形	100	80	—	35.6	—	—	—	掘取穴：須恵器坪、須恵器土器坪
⑫	圓丸方形	60	57	—	35.6	—	—	—	掘方：須恵器壺、掘取穴：土師器坪、須恵器壺、平瓦
⑬	圓丸方形	75	56	42	35.6	35.25	35.25	—	掘取穴：土師器坪、丸瓦Ⅱ、平瓦Ⅲ B、平瓦
⑭	楕円形	57	52	—	35.7	—	—	24	—

※①～⑭は図版 23 の模式図の柱穴①～⑭に対応

第 6 表 SB3450 掘立柱建物の柱穴の属性

SB3450 出土遺物



(単位: cm)

No.	遺物・量	種類	保存	法量・特徴	写真/図版	登録	報告書
1	① A 掘方壁土	土師器 高台坪	一部 3/4	底縁(右) 外: ロウロキ子午 内: 面整不明→黒色処理	32-7	R1	R16135
2	① B 柱礎跡	砥石	一部	径(4.8) 幅(0.2) 厚さ 2.1 砥面 4面 端削り部 輪郭 重量 53.5g	32-9	R5	R16135

図版 24 SB3450 掘立柱建物 出土遺物



柱穴①断面（南から） [Z9206]



柱穴⑦断面（北から） [Z9199]



柱穴⑬断面（北から） [Z9215]



柱穴⑨断面（南西から） [Z9210]

図版 25 SB3450 掘立柱建物 断面写真

2.9 m、2.7 m、梁行は東妻で総長 5.9 m、柱間は北から 2.9 m、3.0 m である（図版 23）。

【方向】北側柱列は東西基準線より東で北へ 10°、東側柱列は南北基準線より北で西に 6° 偏る。

【柱穴】柱穴掘方は一辺ないし長径 50～110cm の隅丸方形、楕円形で（図版 22、第 6 表）、深さは北西隅の柱穴（図版 23 ①）が 52cm、北東隅の柱穴（⑦）が 55cm、南側柱列東から 5 個目の柱穴（⑬）が 42cm、南東隅の柱穴（⑨）が 50cm、掘方底面の標高は、北西隅が 35.24 m、北東隅が 35.18 m、南側柱列東から 5 個目が 35.25 m、南東隅が 34.76 m である（図版 23）。底面の標高は、A と異なり建物西半と北半が同様の値となるが、南東隅はそれらより約 40～50cm 低い（図版 22・23）。埋土は地山の岩盤粒・小礫・礫等の混入物を多量に含むシルト・粘土質シルトである。

柱痕跡は径 24～36cm の円形で、埋土は岩盤粒・小礫等の混入物を多量に含むシルト・粘土質シルトである。

【出土遺物】掘方埋土から須恵器甕、軒平瓦、平瓦、柱痕跡から土師器環、須恵器環・甕、丸瓦Ⅱ・ⅡB 類、平瓦ⅠA 類、砥石（図版 24-2）、鉄滓、柱抜取穴から土師器環、須恵器環・甕、須恵系土器環、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡB 類、遺構確認面から須恵器瓶または甕・甕が出土した。掘方埋土から出土した軒平瓦は単弧文 640a1 タイプである。

2) 竪穴建物

【SI3418 竪穴建物】（平面図：図版 12）

【検出】南区東部中央の N 96・W 42 付近に位置する。南西隅と西辺・南辺の一部、西辺から

西方向に延びるカマド煙道を検出した。遺構確認面は第Ⅷ層で、北・東側は第Ⅲ層に覆われている。遺構検出のみ行った。

〔重複〕 SD3438 溝と重複し、これより古い。

〔規模〕 東西・南北ともに 3.4 m 以上で、西辺南部から幅 0.2 m、長さ 1.0 m の煙道が延びる。

〔堆積土〕 平面検出のみだが、地山小ブロックを多く含むにふい黄褐色（10YR4/3）シルトである。カマド燃焼部から煙道付近には焼土粒・炭化物粒が含まれる。

〔出土遺物〕 堆積土から平瓦Ⅱ A・Ⅱ B 類が出土した。なお、カマド北側壁とみられる部分に瓦 2 点が埋まっているが、今回の調査では取上げていない。

3) 土坑

〔SK3446 土坑〕（平面図：図版 10、断面図：図版 26）

〔検出〕 北区南東部の N 117・W 42 付近に位置し、北端部を検出した。遺構確認面は第Ⅵ b 層である。遺物は出土していない。

〔規模〕 平面・断面形は不明で、規模は北西-南東 123cm 以上、北東-南西 42cm 以上、深さは 37cm 以上である。

〔埋土〕 3 層確認し、人為的に埋め戻されている。

〔SK3447 土坑〕（平面図：図版 10、断面図・遺物：図版 26）

〔検出〕 北区南東隅の N 117・W 39 付近に位置し、一部を検出した。遺構確認面は第Ⅵ b 層である。

〔規模〕 平面形は不明で、規模は東西 3.8 m 以上、南北 2.7 m 以上、深さは 29cm である。断面形は浅い「U」字状である。

〔堆積土〕 3 層確認し、自然堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から、土師器甕・須恵器坏・長頸瓶・甕、須恵系土器、白磁壺（図版 26）、軒丸瓦（型番不明）、丸瓦Ⅱ類、平瓦Ⅰ A・Ⅱ B 類が出土した。平瓦Ⅱ B 類には b タイプがある。

〔SK3448 土坑〕（平面図：図版 10、断面図：図版 26）

〔検出〕 北区の N 128・W 46 付近に位置する。遺構確認面は第Ⅷ層である。

〔規模〕 平面は円形で、規模は東西 186cm、南北 196cm、深さは 72cm である。断面は逆台形である。

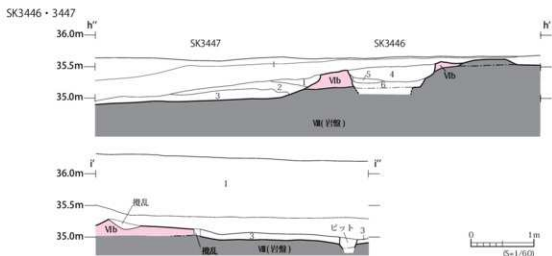
〔堆積土〕 9 層確認し、自然堆積である。

〔出土遺物〕 9 層から須恵器甕、堆積土から平瓦Ⅰ A・Ⅱ B・Ⅱ C 類が出土した。

4) 溝

〔SD3426 溝〕（平面図：図版 8・12、断面図：図版 27）

〔検出〕 南区西部の N 95～110・W 49～54 に位置する。北東-南西方向の溝で、南側延長を新たに検出した。遺構確認面は第Ⅷ層である。SB3415 掘立柱建物と重複する範囲を底面まで掘り下げた。



層	土色	土性	含有物など	備考	
SK3447	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト小ブロックをやや多く含む、炭化物片を少量含む	自然
	2	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土質シルト	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト小ブロック、炭化物、塵埃、塵埃マシゴシを含む	
	3	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粘土質シルト	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト小ブロック、炭化物、塵埃マシゴシを含む	
SK3446	4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	岩盤粒・小礫・礫をやや多く、灰黄褐色 (10YR4/2) シルト粒・小ブロック、炭化物粒・片を含む	人為
	5	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	岩盤粒・小礫、暗褐色 (10YR3/4) シルト粒・小ブロックを含む	
	6	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト粒・小ブロックを多量に、岩盤粒・小礫を含む	

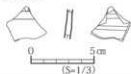


SK3446 断面 (北東から) [Z9217]



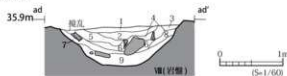
SK3447 断面 (北西から) [Z9224]

SK3447 出土遺物



遺物・層	種類	残存	特徴	写真No	登録	品番
SK3447・埋	白磁 壺	胴部一部	外内: ロクロナデ 太宰府市分館Ⅱ-V1	32-10	No.331	B14314

SK3448



層	土色	土性	含有物など	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	岩盤粒を少量含む	自然
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土	岩盤粒をわずかに含む	
3	灰黄褐色 (10YR5/2)	シルト	岩盤粒をやや多く含む	
4	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト質粘土	岩盤粒を含む	
5	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土	下部に細砂層を含む	
6	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土	岩盤粒を少量含む	
7	黒褐色 (10YR3/2)	粘土	岩盤粒を少量含む	
8	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	岩盤粒を多量に含む	
9	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	岩盤粒を多量に含む、暗褐色 (10YR4/1) 粘土と互層になる	



SK3448 断面 (東から) [Z9225]

※図版 10 (平面図) h'・h'・f'・f'・ad・ad の位置に対応

図版 26 SK3446・3447・3448 土坑 断面・出土遺物

SD3424・3425・3426



層	土色	土性	含有物など	備考
SD3426 1	にじみ、黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山小ブロックを少量含む	自然
SD3425 2	にじみ、黄褐色 (10YR4/3)	砂	粗砂・細砂が互層となる	
SD3424 3	地灰黄色 (2.5Y3/2)	シルト質砂	地山砂、細砂を含む	



SD3424・3425・3426 断面 (北東から)

※断面図の位置は図版 12 (平面図) ae-ae' に対応

[Z9340]

SD3425 出土遺物



種類	特徴	写真番号	登録	調査号
黄褐色土器 二足土器	胎地 オサエークズ リ一部ナゲ 中実 風化著しい	32-11	R23	B16135

SD3438



SD3438 検出状況 1 (東から) [年報 2020] 図版 17-1

[Z8784]



SD3438 検出状況 2 (東から) [Z8784(拡大)]

図版 27 SD3426・3438 溝、SD3424・3425 自然流路 断面・出土遺物

〔重複〕 SB3415 掘立柱建物、SD3424・3425 自然流路と重複し、これらより新しい。

〔方向〕 南北基準線より北で東へ 15° 偏する。

〔規模〕 検出長は 7.5 m で、第 94 次調査で検出した部分を加えると約 14.5 m になる。上幅は最大 60cm、深さは 18cm で、断面形は浅い「U」字状である。

〔堆積土〕 1 層確認し、自然堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器杯・甕、須恵器杯・瓶または壺・甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦Ⅰ・ⅠA・ⅡB 類、鉄滓が出土した。平瓦ⅠA 類には a タイプがあり、ⅡB 類には焼瓦が認められる。

〔SD3429 溝〕 (平面図：図版 8・12)

〔検出〕 南区中央南寄りの N 90～95・W 42～49 に位置する。「T」字形の溝で、北西-南東方向部分の東・西側延長を新たに検出した。遺構確認面は第Ⅷ層である。SB3415 掘立柱建物と重複する範囲のみ底面まで掘り下げた。

〔重複〕 SB3415 掘立柱建物と重複し、これより新しい。

〔方向〕 東西基準線より東で南へ約 10° 偏る。

〔規模〕 検出長は 6.7 m で、第 94 次調査で検出した北西-南東方向部分を加えると約 18 m になる。深さは最大 20cm で、断面形は浅い「U」字状である。

〔堆積土〕 地山粒・小ブロックを少量含む灰黄褐色（10YR4/2）シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から須恵器甕、軒丸瓦（型番不明）、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA類・ⅡB類、近世以降の陶器が出土した。

〔SD3438 溝〕（平面図：図版 8・12・27）

〔検出〕 南区東部中央から南東部の N 86～102・W 39～44 に位置する。北東-南西方向の溝で、南端は第 94 次調査区、北端は調査区外へ延びる。遺構確認面は第Ⅲ層である。遺構検出のみ行った。遺物は出土していない。

SD3438 は第 94 次調査 A-2 区南で確認した溝で、同じく第 94 次調査の SD3419 溝とは、位置や方向からは同一の溝の可能性のあるものの年代の相違から異なる溝としていた。しかし、第 95 次調査で SD3419 の断ち割り部分を再検出し、その北側で一部途切れるが、方向や堆積土の特徴から一連のものと考えられる溝を検出したこと、この溝は第Ⅲ層上面を遺構確認面とすること、後述する第Ⅲ層の年代から、第Ⅲ層と第 94 次調査の SD3438 の遺構確認面である SK3421 土坑大別 1 層が対応するとみられること、第 94 次調査では SD3419 は SK3421 よりも重複関係から古いとしたが、両遺構の重複部分の検出写真を再検討した結果、SD3419 が SK3421 より新しく、SD3432 溝まで延びることが確認できたことから（図版 27）、SD3438 と SD3419 は同一の溝で、今回検出した溝も SD3438 の北側延長として扱うこととした。

〔重複〕 SI3418 竪穴建物、SD3456 溝と重複し、SI3418 より新しく SD3456 より古い。

〔方向〕 南北基準線より北で東へ 12° 偏る。

〔規模〕 検出長は 16.3 m で、第 94 次調査で検出した部分を加えると 22.5 m になる。上幅は最大 73cm である。

〔堆積土〕 炭化物粒・片を含む灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルトで、自然堆積である。

〔SD3449 溝〕（平面図：図版 12、断面図・遺物：図版 28）

〔検出〕 南区北東隅の N 109～112・W 36～38 に位置し、東壁沿いの深掘り部分で検出した北東-南西方向の溝である。遺構確認面は第Ⅴ層で、南端は第Ⅱ・Ⅲ層に覆われる。北端は調査区外へ、南端は調査区の第Ⅱ・Ⅲ層下に延びるとみられる。検出した範囲については底面まで掘り下げた。

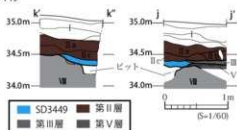
〔重複〕 ビットと重複し、これより新しい。

〔方向〕 南北基準線より北で東に 25° 偏る。

〔規模〕 検出長は 2.5 m、上幅は最大 50cm、深さは 20cm である。断面形は浅い「U」字状である。

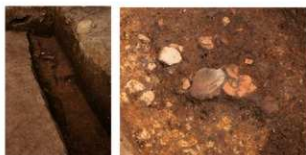
〔堆積土〕 1 層確認し、自然堆積である。

SD3449

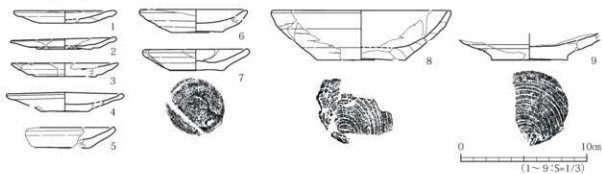


層	土色	土性	含有物など	備考
I	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	管壁小礫、炭化物片を少量含む	自然

※断面図の位置は図版 12 (平面図) k'・k''・j・j' に対応

検出(南から)
[Z9343]遺物出土状況(南から)
[Z9345]

SD3449 出土遺物



(単位: cm)

No.	層	種類	形状	口径	底径	高さ	特徴	写真図版	層位	調査日
1	堆積土	須恵系土器 小皿	□1/3～底部1/4	(8.2)	(4.0)	1.0	外: ロクロナデ 内: コチナデ 底: 回転糸切り無調整	32-12	K33	B16136
2	堆積土	須恵系土器 小皿	□～底部3/4	8.4	4.2	1.2	外: ロクロナデ 内: コチナデ 底: 回転糸切り無調整	32-13	K32	B16136
3	堆積土	須恵系土器 小皿	□1/6～底部1/4	(8.5)	(4.8)	1.1	外: ロクロナデ 内: コチナデ 底: 回転糸切り無調整	32-14	K35	B16136
4	堆積土	須恵系土器 小皿	□1/3～底部1/2	(9.4)	(3.8)	1.6	外: ロクロナデ 内: コチナデ 底: 不明 器形の歪みが大きい 器面風化 底部中央厚0.5cm	32-16	K31	B16136
5	堆積土	須恵系土器 小皿	□1/6～底部一部	—	—	1.6	外: ロクロナデ 内: コチナデ 底: 不明	32-15	K36	B16136
6	堆積土	須恵系土器 小皿	□1/6～底部3/4	(8.5)	4.2	1.8	外: ロクロナデ 内: コチナデ 底: 回転糸切り無調整 器面風化 底部中央厚0.6cm	32-17	K30	B16136
7	堆積土	須恵系土器 小皿	□3/4～底部1/1	8.5	4.4	1.8	外: ロクロナデ 内: コチナデ 底: 回転糸切り無調整 器面風化 底部中央厚0.7cm	32-18	K29	B16136
8	堆積土	須恵系土器 環	□～底部1/3	(14.3)	(7.0)	4.0	外: ロクロナデ 内: コチナデ 底: 回転糸切り無調整 粘土組織 1/3が切欠 器形の歪みが大きい	32-19	K40	B16136
9	堆積土	須恵系土器 環	体一部～底部1/2	—	6.0	—	外: ロクロナデ 内: コチナデ 底: 回転糸切り無調整	32-20	K41	B16136

図版 28 SD3449 溝 断面・写真・出土遺物

〔出土遺物〕 堆積土から土師器環・甕、須恵系土器小皿 (図版 28・1～7)・環 (8・9)・環または皿・鉢、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA類が出土した。

〔SD3451 溝〕 (平面図: 図版 12、断面図: 図版 29)

〔検出〕 南区北部の N 99～108・W 37～48 に位置する。「コ」字状の溝で、溝の東端は調査区外へ延びる。遺構確認面は北東部が第Ⅵc 層、西南部が第Ⅵa 層で、東端は第Ⅱ・Ⅲ層に覆われる。南区東壁と SB3415 掘立柱建物と重複する位置の 3 箇所ですり割りを行った。

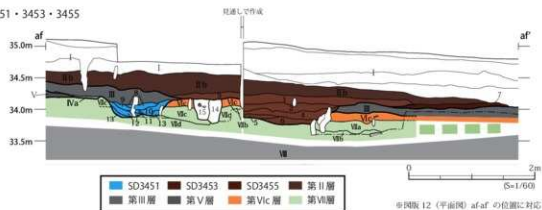
〔重複〕 SB3415 掘立柱建物と重複し、これより新しい。

〔方向〕 東西方向は、東西基準線より東で南に 14°、南北方向は南北基準線より北で東に 22° 偏る。

〔規模〕 検出長は東西方向が北部 7.5 m、南部 2.0 m、南北方向が 7.0 m である。上幅は最大 100 cm、深さは 27 cm で、断面は逆台形である。

〔堆積土〕 6 層確認し、いずれも自然堆積である。

SD3451・3453・3455



◎図版12 (平面図) af, af' の位置に対応

層	土色	土性	含有物など	備考
SD3455	1 灰黄褐色 (10YR4/2)	砂質シルト	炭化物片、土器片をわずかに含む	自然
	2 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	砂	炭分を多く含む	
	3 暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	炭化物片、微細な土器片を少量含む	
	4 黒褐色 (10YR3/2)	シルト	にぶい黄褐色 (10YR4/3)・暗褐色 (7.5YR3/3) 砂を部分的に含む	
	5 暗褐色 (7.5YR3/3)	粗砂	黒褐色 (10YR3/2) シルトブロックを少量含む	
	6 黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	暗褐色 (7.5YR3/3) 粗砂を多く含む	
SD3453	7 暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	粗砂を含む	自然
SD3451	8 にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	礫山小ブロックを多量に含む	自然
	9 黒褐色 (10YR3/1)	シルト	礫山小ブロック、炭化物片を少量含む	
	10 黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物片・土器片を少量、礫山小ブロックをわずかに含む	
	11 黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	炭化物片をわずかに含む	
	12 暗褐色 (10YR3/3)	シルト	明黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む	
	13 灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	明黄褐色シルト小ブロックを多量に含む	
柱穴	14 暗褐色 (10YR3/4)	シルト	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト小ブロック・ブロックを多量に、炭化物片をやや多く含む	柱軸跡
	15 暗褐色 (10YR3/3)	シルト	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト小ブロック、炭化物片をやや多く含む	掘方遺土



SD3451 断面 (西から) (Z9352)

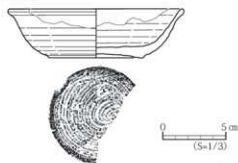


SD3455 断面 (南西から) (Z9356)



SD3453 断面 (西から) (Z9249)

SD3455 出土遺物



(単位: cm)

種類	残存・法相・特徴	写真図版	図録	調査番号
須恵高	口一部・底部 3/4 口縁 (14.0 底径 7.5 器高 3.9 外内: ロクロナデ 底: 回転糸切り無調整)	33-1	R46	B16136

図版 29 SD3451・3453 溝、SD3455 自然流路 断面・出土遺物

〔出土遺物〕 堆積土から土師器坏・甕、須恵器鉢・甕、須恵系土器小皿・坏・坏または皿・高台坏、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅠC・ⅡB類が出土した。平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅠC類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプⅠがある。また、平瓦ⅡB類には焼瓦が認められる。

〔SD3452 溝〕 (平面図：図版 12)

〔検出〕 南区中央東寄りのN 98～102・W 42～43に位置する。南北方向の溝で、溝の北端は第Ⅲ層に覆われる。遺構確認面は第Ⅵc層である。SB3415 掘立柱建物と重複する位置で断ち割りを行った。遺物は出土していない。

〔重複〕 SB3415 掘立柱建物と重複し、これより新しい。

〔方向〕 概ね南北基準線に平行する。

〔規模〕 検出長は2.8 m、上幅は最大68cm、深さは14cmである。断面形は「U」字状である。

〔堆積土〕 1層確認し、地山小ブロック、炭化物粒・片、焼土小ブロックを含むにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトで、自然堆積である。

〔SD3453 溝〕 (平面図：図版 12、断面図：図版 29)

〔検出〕 南区東部中央から南東部のN 86～101・W 37～41に位置する。北東-南西方向の溝で、溝の北端は調査区外へ延びる。遺構確認面は第Ⅲ層である。南区東壁の深掘り部分で断ち割りを行った。

〔重複〕 SD3456 溝、SD3455 自然流路と重複し、これらより古い。

〔方向〕 南北基準線より北で東へ5～14°偏る。

〔規模〕 検出長は26.6 m、上幅は最大80cm、深さは9cmで、断面形は浅い「U」字状とみられる。

〔堆積土〕 1層確認し、自然堆積である。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器坏・甕、須恵器甕、須恵系土器坏、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡB類が出土した。

〔SD3454 溝〕 (平面図：図版 12)

〔検出〕 南区中央東端のN 101～102・W 37～38に位置する。南北方向の溝で、遺構確認面は第Ⅲ層である。東壁沿いの深掘り部分で一部を検出し、底面まで掘り下げた。遺物は出土していない。

〔方向〕 南北基準線に平行する。

〔規模〕 検出長は0.97 m、上幅は最大15cm、深さは8cm、断面形は「U」字状である。

〔堆積土〕 炭化物粒を含む黒褐色(10YR2/2)シルトで、自然堆積である。

〔SD3456 溝〕 (平面図：図版 12)

〔検出〕 南区南東部のN 87～88・W 40～43に位置する。北東-南西方向の溝で、遺構確認面は第Ⅷ層である。遺構検出のみ行った。遺物は出土していない。

〔重複〕 SD3438・3453 溝と重複し、これらより新しい。

〔方向〕 東西基準線より東で北へ15°偏る。

〔規模〕 検出長は2.8 m、上幅は最大20cmである。

〔堆積土〕 炭化物粒をわずかに含む黒褐色（10YR3/2）シルトで、自然堆積である。

〔SD3457 溝〕（平面図：図版12）

〔検出〕 南区中央のN 99～101・W 48に位置する。北東-南西方向の溝で、遺構確認面は第Ⅵa層である。遺構検出のみ行った。遺物は出土していない。

〔方向〕 南北基準線より北で東に9°偏る。

〔規模〕 検出長は1.3 m、上幅は最大28cmである。

〔堆積土〕 1層確認し、炭化物粒を含む灰黄褐色（10YR4/2）シルトで、自然堆積である。

〔SD3458 溝〕（平面図：図版12）

〔検出〕 南区中央西寄りのN 92～99・W 49～52に位置する。北東-南西方向の溝で、遺構確認面は第Ⅷ層である。遺構検出のみ行った。遺物は出土していない。

〔方向〕 北端は南北基準線より北で西に20°、それ以南は南北基準線より北で東に18°偏る。

〔規模〕 検出長は7.3 m、上幅は最大60cmである。

〔堆積土〕 岩盤小礫を含む灰黄褐色（10YR4/2）シルトで、自然堆積である。

〔SD3459 溝〕（平面図：図版12）

〔検出〕 南区西部中央のN 95～97・W 51～53に位置する。北西-南東方向の溝で、遺構確認面は第Ⅷ層である。遺構検出のみ行った。遺物は出土していない。

〔重複〕 SD3426 溝、SD3424 自然流路と重複し、これらより新しい。

〔方向〕 東西基準線より東で南へ22°偏る。

〔規模〕 検出長は1.95 m、上幅は最大50cmである。

〔堆積土〕 地山粒を含む灰黄褐色（10YR4/2）シルトで、自然堆積である。

5) 自然流路

平面形や断面形に凹凸が多く人為的な掘り込みとは考えにくいもので、堆積土に水成堆積層とみられる細砂が多く含まれるものを自然流路とした。

〔SD3424 自然流路〕（平面図：図版8・12、断面図：図版27）

〔検出〕 南区西部のN 89～109・W 50～57に位置する。北東-南西方向で、遺構確認面は第Ⅷ層である。SB3415と重複する範囲を底面まで掘り下げた。

〔重複〕 SB3415 掘立柱建物、SD3426・3459 溝、SD3425 自然流路と重複し、SB3415より新しく、SD3425・3426・3459より古い。

〔規模〕 検出長は14.0 mで、第94次調査で検出した部分を加えると約30 mになる。上幅は3.4 m以上、深さは26cm、断面形は浅い「U」字状で、底面には凹凸がある。

【堆積土】 1層で、水成堆積層である。

【出土遺物】 堆積土から土師器甕、須恵器杯・瓶または甕・甕、須恵系土器、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅠC・ⅠD・ⅡB・ⅡC類、転用砥、鉄滓が出土した。平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅠC類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ2がある。その他、丸瓦・平瓦には焼瓦が認められる。

【SD3425 自然流路】（平面図：図版8・12、断面図・遺物：図版27）

【検出】 南区西部のN 89～111・W 49～56に位置する。北東-南西方向で、遺構確認面は第Ⅷ層である。第94次調査では溝としたが、第95次調査で南延長部分を検出し、自然流路であるSD3424とほぼ同位置にあり平面が東西に蛇行すること、堆積土が水成堆積層であることから、自然流路として扱うこととした。SB3415掘立柱建物と重複する範囲を底面まで掘り下げた。

【重複】 SB3415掘立柱建物、SD3426溝、SD3424自然流路と重複し、SB3415・SD3424より新しく、SD3426より古い。

【規模】 検出長は21.3m、上幅は最大54cm、深さは22cmで、断面形は「U」字状である。第94次調査A-2区西の東壁断面図ではSD3425の堆積土を認識していなかったが、平面的な位置や、検出面と底面の標高値の検討から、『年報2020』図版10のSD3424-5層としたものがSD3425の堆積土と推定される。

【堆積土】 1層で、粗砂・細砂が互層となる水成堆積層である。

【出土遺物】 堆積土から土師器甕、須恵器杯・長頸瓶・甕、須恵系土器三足土器（図版27）、軒平瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦Ⅰ・ⅠA・ⅠB・ⅡB類、転用砥が出土した。軒平瓦は頸部小破片で、二重弧文511とみられる。平瓦ⅠA類にはaタイプがあり、平瓦ⅡB類には焼瓦が認められる。

【SD3455 自然流路】（平面図：図版12、断面図・遺物：図版29）

【検出】 南区東部中央のN 103～106・W 37～40に位置する。遺構確認面は第Ⅲ層である。東壁と東西方向の深掘り部分の断面で確認した。沢状地形の沢筋に位置し東西方向とみられること、堆積土が水成堆積層とみられることから、自然流路と推定した。

【重複】 SD3453溝と重複し、これより新しい。

【規模】 検出長は2.5m以上、幅は252cm、深さは46cm、断面形は逆台形状で、北壁は緩やかに立ち上がる。

【堆積土】 6層確認し、砂・粗砂等からなる水成堆積層である。

【出土遺物】 堆積土から土師器杯・高台杯・甕、須恵器杯（図版29）・蓋・瓶・甕、須恵系土器小皿・杯・杯または皿・高台杯・高台杯または高台皿、軒平瓦、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡA・ⅡB類が出土した。軒平瓦は二重弧文とみられるが型番は不明である。平瓦ⅠA類にはaタイプがある。

6) 基本層出土遺物（図版30・31）

【北区】 第Ⅵb層から須恵器杯・甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA類が出土した。

第Ⅰ層から土師器杯・甕、須恵器杯・長頸瓶・甕、須恵系土器杯、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦ⅠA・

ⅠC・ⅡB類、転用砥、鉄製品が出土した。平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅠC類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ1とaタイプ3がある。この他、近世以降の陶磁器・瓦質土器が出土した。

〔南区〕 第Ⅶb層から須恵器甕、第Ⅵc層から土師器坏、須恵器高台坏・甕、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅡB類が出土した。

第Ⅵa層から軒平瓦（図版30-1）、丸瓦Ⅱ・ⅡA類（2）、平瓦ⅠA類・ⅡB類が出土した。軒平瓦は二重弧文511aタイプである。平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ1・aタイプ2があり、ⅡB類aタイプ1には凹面に刻印「物」A（図版31-1）が施されたものがある。また、平瓦ⅡB類（図版33-5）には焼瓦が認められる。

第Ⅴ層から土師器坏・甕、須恵器甕、須恵系土器小皿・坏または皿・高台皿、平瓦が出土した。

第Ⅲ層から土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・高台坏・瓶・甕、須恵系土器小皿（図版31-2）・坏（3）・坏または皿・高台坏・高台坏または高台皿・鉢、灰釉陶器壺（図版33-8）、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦Ⅰ・ⅠA・ⅡB類、転用砥、鉄製品が出土した。平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ1があり、丸瓦Ⅱ類には凸面に刻印「伊」が施されたものがある（図版31-4）。

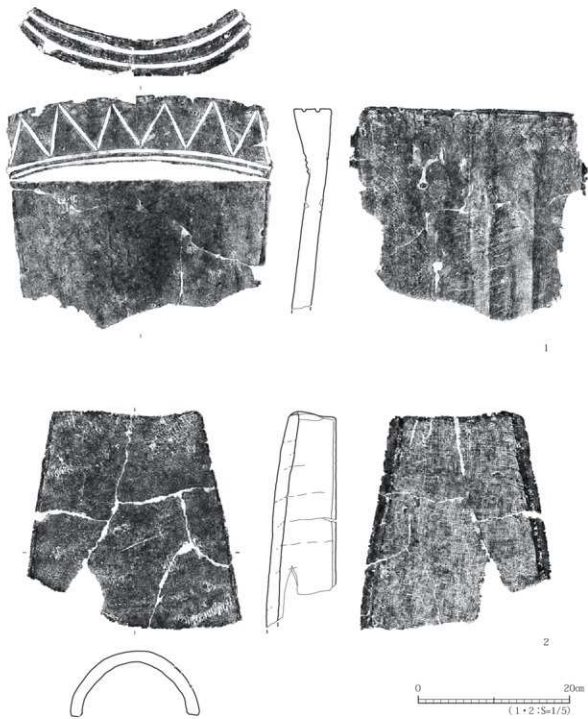
第Ⅱc層から土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・瓶・甕、須恵系土器坏、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡB類が出土した。平瓦ⅡB類には焼瓦が認められる。

第Ⅱb層から土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・瓶・瓶または壺・甕、須恵系土器小皿・坏・坏または皿、丸瓦Ⅱ類、平瓦ⅠA・ⅡB類、近世以降の磁器が出土した。

第Ⅰ層から土師器坏・高台坏・高台坏・短頸壺・甕、須恵器坏（図版31-5）・高台坏・瓶・瓶または壺・甕、須恵系土器坏・坏または皿・高台坏・高台坏または高台皿・台付鉢、軒丸瓦、丸瓦Ⅱ・ⅡB類、平瓦Ⅰ・ⅠA・ⅠB・ⅠC・ⅠD・ⅡA・ⅡB・ⅡC類、転用砥、鉄製品、鉄滓、中世陶器（6）、近世以降の陶磁器（図版34-5～7）・土師質土器・銅銭が出土した。軒丸瓦には細弁蓮花文310と型番不明のものがある。丸瓦ⅡB類にはbタイプ（図版31-7）、平瓦ⅠA類にはaタイプ、ⅠC類にはaタイプ、ⅡB類にはaタイプ1・2およびbタイプがある。平瓦ⅠD類は3点出土しており、いずれも凸面に平行叩きが施されたもので、このうち2点は小口面にも平行叩きが施される（8）。近世の陶磁器には肥前の皿（図版34-6）・仏花瓶（5）、瀬戸美濃の皿（7）がある（註1）。

図版	登録番号	図版	登録番号	図版	登録番号	図版	登録番号	図版	登録番号	図版	登録番号
32	1 Z9393	32	8 左 Z9404	32	13 Z9415	33	2 左 Z9426	33	8 左 Z9437	34	4 左 Z9448
	2 左 Z9394		8 右 Z9405		14 Z9416		2 右 Z9427		8 右 Z9438		4 右 Z9449
	2 右 Z9395		8 拡大 Z9406		15 Z9417		3 左 Z9428		9 左 Z9439		5 左 Z9450
	3 左 Z9396		9 表 Z9407		16 Z9418		3 右 Z9429		9 右 Z9440		5 右 Z9451
	3 右 Z9397		9 右側面 Z9408		17 Z9419		4 右 Z9430		9 拡大 Z9441		6 左 Z9452
	4 Z9398		9 裏 Z9409		18 Z9420		4 左 Z9431	34	1 Z9442		6 右 Z9453
	5 左 Z9399		9 左側面 Z9410		19 Z9421		4 拡大 Z9432		2 左 Z9443		7 左 Z9454
	5 右 Z9400		10 左 Z9411		20 左 Z9422		5 左 Z9433		2 右 Z9444		7 右 Z9455
	6 左 Z9401		10 右 Z9412		20 右 Z9423		5 右 Z9434		3 上 Z9445		
	6 右 Z9402		11 Z9413	33	1 Z9424		6 Z9435		3 左 Z9446		
	7 Z9403		12 Z9414		2 上 Z9425		7 Z9436		3 右 Z9447		

第7表 遺物写真の登録番号一覧

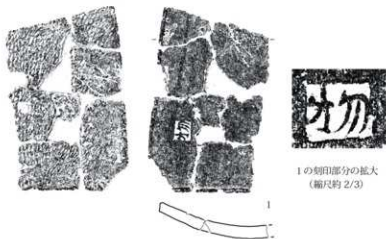


(単位: cm)

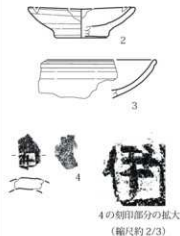
No.	種類	現存	法量	特徴	写真回数	登録	箱番号
1	軒平瓦	1/2	長(28.8) 広縁幅(29.1) 瓦当部厚さ5.0 平瓦部厚さ2.5	二重弧文511a 彫面ナデ→彫面文・直線文(2条) 平瓦部凸面: 縄甲老→ナデ 凸面: 横脊幅・布目→ナデ 彫面: ケ文付	33.2	R52	B16137
2	丸瓦	4/5	長(29.7) 幅(17.5) 厚さ1.7	丸瓦B A類 凸面: 縄甲老→ナデ 彫面: 粘土網縞幅・布目 小N: ナデ	33.3	R56	B16138

図版30 第VIa層出土遺物

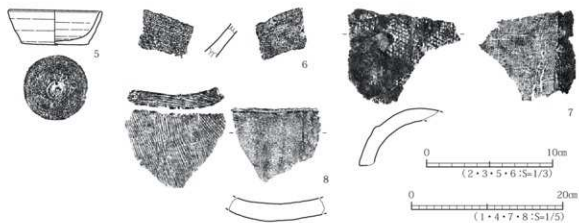
第Ⅴa層



第Ⅲ層

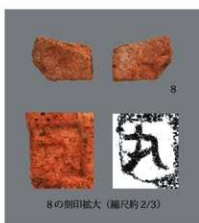


第Ⅰ層



No.	層	種類	残存	法量	特徴	写真枚数	登録	箱番号
1	第Ⅴa層	平瓦	1/4	長(24.7) 幅(15.8) 厚さ1.6	平瓦B形aタイプ1 凸部:陽向き 凹部:布目→ナデ 側面・小口:ケズリ 凹部左端に刻印「物」A	33-4	R55	B16138
2	第Ⅲ層	瓦形瓦土器 小皿	口1/6～底面1/2	口径(8.5) 底径(4.2) 器高2.5	外:ロクロナデ 内:コナナデ? 底:回転糸切り? 底部厚0.9	33-6	R59	B16136
3	第Ⅲ層	瓦形瓦土器 杯	口～体部1/8	—	外:ロクロナデ 内:コナナデ	33-7	R58	B16136
4	第Ⅲ層	丸瓦	破片	長(5.7) 幅(4.0) 厚さ1.5	凸部:ナデ 凹部:布目 凸部に刻印「伊」	33-9	R67	B16136
5	第Ⅰ層	瓦形瓦土器 杯	完整	口径7.5 底径5.3 器高2.8	外内:ロクロナデ 底:回転糸切り→ 手掛ケズリ→ナデ	34-1	R49	B16136
6	第Ⅰ層	中凹陶器 罐	胴部一部	—	外:ナデ 自然釉付着 内:ナデ 雲道模か	34-4	R74	B16136
7	第Ⅰ層	丸瓦	破片	長(13.2) 幅(11.0) 厚さ2.1	丸瓦B形bタイプ 凸部:格子印キ→ナデ 凹部:粘土結核模・布目 側面:ケズリ	34-2	R81	B16136
8	第Ⅰ層	平瓦	破片	長(11.0) 幅(13.2) 厚さ2.4	凸部・小口:甲印キ 凹部:ナデ	34-3	R82	B16136

図版31 第Ⅰ～Ⅴa層出土遺物



8の泉田拡大(縮尺約2/3)



1～6：SB3415、7～9：SB3450、10：SK3447、
11：SD3425、12～20：SD3449

(1・4・7・9・10～20：S=1/3、2・3・5・6・8：S=1/5)

図版 32 第 95 次調査出土遺物写真 (1)



図版33 第95次調査出土遺物写真(2)



1～7：第1層

(1・4～7：S=1/3, 2・3：S=1/5)

図版 34 第 95 次調査出土遺物写真 (3)

土器など

区	遺構・層・遺物	土師器				須恵器				須恵系土器	土器	白磁器	灰釉陶器類	中央陶器	石製品	転用砥	土製品	鉄滓	近世以降					計		
		供膳具	貯蔵具	煮沸具	不明	供膳具	貯蔵具	不明	供膳具										土師質土器	土師質土器	瓦葺土器	銅銭				
北区	SB3450 A	掘方埋土	1	2	1	1	3								1									9		
	SB3450 B	掘方埋土					1																		1	
		柱痕跡	1				1	2							1										6	
		柱状取穴	2				1	1		2															6	
		確認面					4			1															5	
	SB3450	確認面	1	1	1	1	1																		4	
	SK3447	堆		1	2	10			1	1															15	
	SK3448	9層					1																		1	
	P1	掘方埋土					1																			1
		柱痕跡															1									1
	P2	掘方埋土					1																			1
		柱痕跡					1																			1
		柱状取穴							1																	1
	P3				13																					13
	P4						1																			1
P5							1																		1	
第Ⅴb層						1	1																		2	
第Ⅰ層		3	5	2	4	1								1	1	1	11	19							48	
小計		8	22	1	12	31	4	1	1					1	2	1	1	1	11	19			1	117		
南区	SB3415 A	掘方埋土	1	1	1	7			1									4							15	
	SB3415 B	掘方埋土	2	1	1	5	17																			26
		柱痕跡	2				1	2																		5
		柱状取穴	1	1	5	10																				18
	SB3415	確認面		3	3	11		2												1						20
	SD3424	堆		3	3	7	60	3							1					1					78	
	SD3425	堆		2	1	2	12	1							1										19	
	SD3426	堆	1	1	2	5	11													1					21	
	SD3424～3426	堆					1																		1	
	SD3425・3426	確認面					1										1			1					4	
	SD3429	堆					1														1				2	
	SD3433	堆																				1			1	
	SD3449	堆	3		1					40																44
	SD3451	堆	4	4	1		6	6																	21	
	SD3453	堆	3	1		2	2																		8	
	SD3455	堆	8	2	8	2	16	1	34																	71
	P7		1						4												1					6
	第Ⅴb層						4																			4
	第Ⅴc層		1			1	1	1	1																	5
	第Ⅴ層		1	1	4		1		8																	15
第Ⅳ層		29	18		11	49		117					1		1		1								227	
第Ⅱc層		7	7		1	14		1																	30	
第Ⅱb層		6	3	11	5	12	3	30														1			71	
第Ⅱb・Ⅱc層		1				4		1																	6	
第Ⅰ層		30	1	39		16	78	90	1				1	3		10	1	52	45	13			2		382	
小計		101	1	88	32	65	320	5	339	2	1	1	6	12	10	55	47	13	2	1,100						
計		109	1	110	33	77	351	5	343	3	1	1	1	1	8	1	13	11	66	66	13	1	2	1,217		

※横ね長さ 2cm以上のものを集計の対象とした

※「土器」は小破片のため土師器か須恵系土器か区別がつかなかったもの

※供膳具：小皿、皿、高台皿、杯、高台杯、高杯、碗、台付鉢、蓋、三足土器

貯蔵具：土師器鉢、須恵器鉢・短頸壺・長頸瓶・甕

煮沸具：土師器甕

第8表 第95次調査出土遺物の破片集計

3. 総括

(1) 遺物

北区・南区から、土器（土師器、須恵器、須恵系土器）、施釉陶磁器（白磁、灰釉陶器）、瓦（軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦）、転用磁、土製品（羽口）、石製品（砥石）、鉄製品、鉄滓、この他に中世陶器、近世以降の陶磁器・土師質土器・瓦質土器・銅銭が出土した（第8～10表）。主体を占めるのは古代の土器・瓦である。

以下では古代の遺物について大まかな出土傾向を述べた上で、主にSD3449出土土器の年代について検討する。併せて、今回の調査で出土した特徴的な遺物についても記述するが、その他年代を推定し得る一部の遺物については、次項で遺構の年代を検討する際に個別に言及する。

1) 出土傾向

調査区との関係では、土器・瓦ともに南区から多く出土している。これは南区の調査面積が北区に比べて広いことに加え、遺物を多く含むSD3424・3449・3455や基本層第Ⅲ層といった遺構・自然流路・堆積層が南区に分布していることによる。

個別の遺物について大まかな傾向をみると、瓦類は軒丸・軒平瓦が10点（重量13.88kg）、丸・平瓦が923点（重量121.134kg）出土している。その多くは第Ⅰ層や第Ⅲ層からの出土であるが、SB3415やSB3450の掘方埋土・柱抜取穴、遺構検出面である第Ⅵ層からも出土している。SB3415A・SB3450A掘方埋土や第Ⅵa層には刻印瓦や焼瓦が含まれる（図版32-3・8、図版33-5）。また、土師器・須恵器も瓦類とほぼ同様の出土傾向といえる。

一方、須恵系土器は、SD3449やこれを覆う第Ⅲ層、第Ⅲ層上面で検出したSD3455からの出土が顕著であり、特にSD3449では、須恵系土器の小皿や坏がまとめて出土した。

2) SD3449 出土土器

須恵系土器の小皿・坏を主体とする土器群である。これらの他、須恵系土器鉢、土師器坏・甕の破片が少量出土している。

器形のわかるものでみると、小皿は口径が9cm前後、器高が1.0～1.8cm程度と、小型で扁平な器形を呈する（図版28-1～7）。これらには底部が薄いもの（1・2）とやや厚いもの（3～7）があるが、後者でも底部中央厚が1.0cmを超えるものはない。また、内面の調整はコテナデである。坏（8）は口径約14.3cm、器高4.0cmで、器形がやや扁平な逆台形状を呈する。

これらの特徴と類似するものに、第32次調査の政庁地区北方SE1066井戸出土土器（『年報1978』）がある。SE1066出土土器は多賀城跡出土土器編年（以下、多賀城編年とする）のG群土器（『年報2006』）に比定され、年代は11世紀後半に位置づけられている（『補遺編』）。したがって、SD3449出土土器の年代もこれと同様に11世紀後半と考えられる。

3) 施釉陶磁器

第94次調査に続き第95次調査でも白磁・灰釉陶器が出土した。白磁壺はSK3447堆積土から出土したもので、太宰府市分類（太宰府市2000）Ⅱ～Ⅵ類に該当する（図版26）。年代は11世紀後半～12世紀前半に位置づけられる（註2）。灰釉陶器は第Ⅲ層から出土したもので、胎土が緻密でハケ塗りにより施釉される（図版33-8）。産地は東濃窯産（『施釉陶磁器』）と推定される。これまでの出土例を含めて、政庁地区北方周辺において施釉陶磁器が使用されていた可能性が改めて示唆されたといえる（『年報2005』）。

4) 平瓦ⅠD類について

平瓦ⅠD類は「桶巻き作りによる平瓦円筒を分割した後、凹面にナデ調整したもの」で、叩き締め用いられる叩き目はすべて格子叩き目とされている（『本文編』p.164）。第95次調査で出土した平瓦には同様の製作技法でありながら、凸面に平行叩き目が認められるものが3点ある。いずれも南区第Ⅰ層からの出土である。この内2点は小口面にも平行叩きが施されている（図版31-8）。こうした特徴はこれまでの多賀城跡における平瓦の分類には厳密には当てはまらないが、出土点数が少ないこと、桶巻き作りで凸面に叩き目、凹面にナデ調整が認められることを考慮し、現段階では広義のⅠD類に含めておきたい（註3）。

(2) 遺構

発見した遺構は掘立柱建物、竪穴建物、土坑、溝、自然流路、柱穴である。以下では、遺構の年代と個別の遺構について検討を行う。

1) 遺構の年代

遺構の重複関係と遺物の特徴から各遺構の年代を検討する。

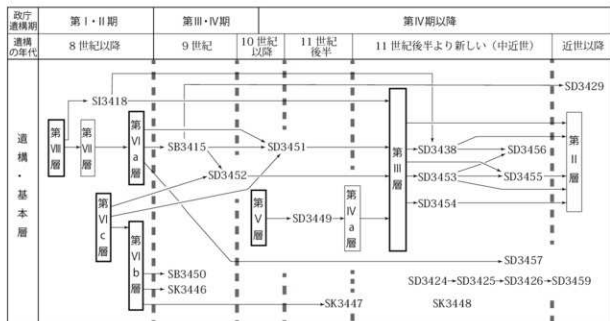
①重複関係（図版35）

遺構は、基本層序との関係から、a：第Ⅵ～Ⅷ層を掘り込み面とし第Ⅲ層に覆われる遺構（SB3415、SI3418、SD3451・3452）、b：第Ⅴ層を掘り込み面とし第Ⅲ層に覆われる遺構（SD3449）、c：第Ⅲ層を掘り込み面とし第Ⅱb層に覆われる遺構（SD3438・3453～3455）、d：第Ⅵ・Ⅷ層で検出し第Ⅰ層に覆われる遺構（SB3450、SK3446～3448、SD3424～3426・3429・3456～3459）の4種類に分けられ、このうち、aではSB3415からSD3451・3452の順に、cではSD3453からSD3455の順に変遷する。これらは概ねa→b→cの順に変遷する。

②年代

【a：SB3415、SI3418、SD3451・3452】

SB3415については、A掘方埋土から須恵器坏（図版21-1）と第Ⅱ期の平瓦ⅡB類aタイプ1（図版21-2）が出土している。須恵器坏は底部から体部にかけて外傾しながら立ち上がる器形で、底径約7.1cm、底部の切り離しは回転ヘラ切りであり、この特徴は多賀城編年のC群土器（白鳥1980、『本文編』）である城前官衛南西Ⅱ層出土土器（『南面Ⅰ』）と類似する。南西Ⅱ



図版 35 遺構の重複関係

層出土土器の年代は9世紀中葉頃から第3四半期頃に位置づけられている。また、B掘方埋土から底径約5.3cm、底部の切り離しが回転糸切り無調整の須恵系環(図版21-3)が出土しており、この特徴は多賀城編年のD群土器である五万崎地区のSK2272土坑出土土器(『年報1994』)や、大畑地区のSK2321土坑第4～7層出土土器(『年報1995』)と類似する。前者の年代は9世紀第3四半期頃、後者の年代は9世紀第4四半期頃に位置づけられている。柱痕跡や柱抜取穴から須恵系土器が出土していないことから、SB3415の年代は、10世紀以前の9世紀中葉から後半頃と推定される。なお、北廂の柱穴の柱痕跡に、10世紀前葉に降下したと考えられている灰白色火山灰粒・小ブロックが含まれており(図版20柱穴③)、SB3415の廃絶した年代がこの頃になる可能性もあるが、出土遺物の年代観とは異なることから、灰白色火山灰の扱いは保留としておく。

SI3418は、平面検出のみであるため詳細な年代は不明だが、堆積土から平瓦が出土していることから8世紀以降の古代と考えられる。

SD3451はSB3415より新しく、堆積土から須恵系土器小皿が出土している。小破片のため数量や器形は不明だが、須恵系土器小皿は多賀城編年のF群土器に比定され、10世紀後半以降に認められることから(『年報2006』、『補遺編』)、SD3451の年代は10世紀後半以降で、後述する第Ⅲ層の年代から11世紀後半以前と推定される。

SD3452は出土遺物がないが、SB3415より新しいことから、9世紀後半以降と推定される。

【b : SD3449】

前述した出土土器の年代から11世紀後半と考えられる。

【c : SD3438・3453～3455】

SD3438・3453～3455から年代を検討できる遺物が出土していないが、後述する第Ⅲ層の

年代が 11 世紀後半より新しく近世以前頃と推定されることから、これらも第Ⅲ層と同様に、11 世紀後半より新しく近世以前の年代のものと考えらえる。

【d : SB3450、SK3446 ~ 3448、SD3424 ~ 3426・3429・3456 ~ 3459】

SB3450 の年代は、A 掘方埋土からロクロ整形の土師器高台環（図版 24- 1）と、第Ⅱ期の刻印瓦で焼瓦（図版 32- 8）が出土していることから、第Ⅲ期以降の 9 世紀代と推定される。なお、B 柱抜取穴（図版 23 ㉑）から須恵系土器が出土しており、廃絶した年代を示す可能性があるが、一段下げの際の出土であること、量が僅かであった小破片であり混入したものの可能性もあることから、この扱いは保留しておきたい。

SK3446 は出土遺物がなく、後述する第Ⅵ b 層の年代から 8 世紀以降と推定される。埋土の特徴が SB3450 に類似することから古代の可能性もある。

SK3447 は堆積土から出土した白磁壺の年代から 11 世紀後半以降、SK3448 は堆積土から平瓦Ⅱ C 類が出土したことから第Ⅳ期以降と推定される。

SD3424 ~ 3426・3429 については、今回の調査で新たな情報の追加は無く、第 94 次調査で検討した年代と変更はない（『年報 2020』）。SD3424 ~ 3426 は 11 世紀後半以降、SD3429 は近世以降と考えられる。

SD3456 は SD3438・3453 より新しいことから 11 世紀後半より新しく、SD3457 ~ 3459 は出土遺物がなく詳細は不明である。

【基本層序】

第Ⅶ b 層は須恵器甕、第Ⅵ b・c 層は土師器や須恵器の小破片が出土していることから、これらは 8 世紀以降と推定され、第Ⅵ c 層は上面で SD3451 が検出されたことから、SD3451 の下限である 11 世紀後半まで遺構面として機能していた可能性がある。また、第Ⅵ b 層上面で検出した SB3450 の年代と、第Ⅵ c 層上面で検出した SD3451 の年代から、第Ⅵ b・c 層は遅くとも 9 世紀には併存し、同じ遺構面を形成していたと考えられる。第Ⅵ a 層は第Ⅰ期の軒平瓦（図版 30- 1）や第Ⅱ期の刻印瓦（図版 31- 1）が出土していることから、第Ⅱ期以降で 8 世紀後半以降に形成されたと考えられる。

第Ⅴ層は須恵系土器が出土し、上面で SD3449 が検出されたことから、10 世紀以降 11 世紀後半以前と考えられる。なお、第Ⅵ c 層と第Ⅴ層の年代が一部共通すること、平面・断面ともに両層の新旧関係を確認していないことから、両層は 10 世紀以降に併存し、第Ⅵ b 層とともに同じ遺構面を形成していた可能性がある。

第Ⅳ層は第Ⅴ層を覆うことから 11 世紀後半以降で、第Ⅲ層は 11 世紀後半と考えられる SD3449 を覆い、近世以降の磁器が出土した第Ⅱ b 層に覆われることから、11 世紀後半より新しく近世以前頃と考えられる。なお、第 94 次調査の SK3421 土坑大別Ⅰ層については、出土遺物から 11 世紀後半と推定したが（『年報 2020』）、この層が第 95 次調査の第Ⅲ層と対応するとみられることから、年代は第Ⅲ層と同様に 11 世紀後半より新しく近世以前頃と考えられる。第Ⅱ層は前述したとおり第Ⅱ b 層から近世以降の磁器が出土していることから近世以降と推定される。

2) 遺構の検討

SB3415・3450 掘立柱建物と、SD3426・3438・3453・3458 溝を対象とする。SB3415・3450 については、これまでの多賀城跡の調査で確認された廂付建物や桁行 6 間以上の建物との比較を行う。SD3426・3438・3453・3458 については、それらの特徴について検討する。

①掘立柱建物

位置、立地、規模、構造をまとめ、SB3415 については、その位置づけを検討する。

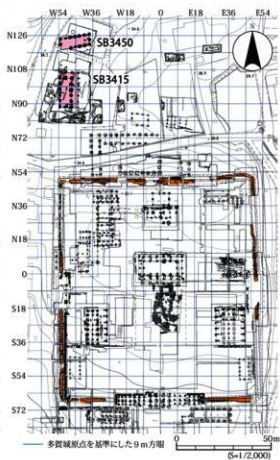
【SB3415 掘立柱建物】

【位置】SB3415 は政庁や政庁北方建物の北西側に所在し、SB3415 の南側柱列は政庁北辺築地塀から 37 m 北に、政庁北方建物の北側柱列から 15 m 北に位置する (図版 4)。

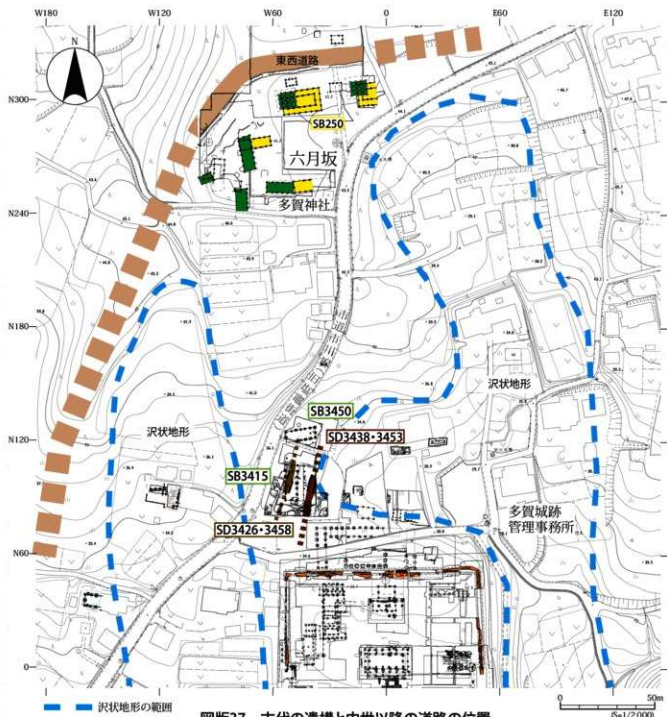
SB3415 は、政庁正殿と政庁南門の中心を結んだ線を南北基準線、正殿身舎南側柱列を東西基準線とする多賀城座標からみると、西側柱列が南北基準線から 53～54 m 西 (W 53～54) に、東側柱列が 43～44 m 西 (W 43～44) に、南側柱列が東西基準線から 88 m 北 (N 88) に、北側柱列が 106～107 m 北 (N 106～107) に位置する。第Ⅱ～Ⅳ期の政庁の建物は、東西・南北基準線によって形成される 9 m 方眼に揃えて計画的に配置されており (『本文編』)、SB3415 の西側柱列はこの 9 m 方眼上に位置し、東・北・南側柱列も 1～2 m の誤差はあるが方眼上付近に位置する (図版 36)。さらに、西側柱列は、政庁西辺築地塀の北側延長線上に位置しており、これらから、SB3415 の位置は、政庁の建物と同様の配置計画に依ったものと考えられる。

【立地】SB3415 は、東と西に位置する沢状地形により東西の幅が狭くなる丘陵尾根上の、南北方向は北西から南東に、東西方向は西から東に標高を下げながら傾斜する緩斜面上に立地する (図版 37)。特に、東西方向では、南区東壁に直交する N 105～107・W 38～42 の深掘り部分で、W 40・41 付近の第Ⅵ c 層上に傾斜変換点が認められ (平面図は図版 12、断面図は図版 131-1)、これは、東から西方向に入る沢状地形の沢筋の西端部分を示すものと考えられる。SB3415 は沢状地形よりも西側に所在し、北東隅の柱穴はこの傾斜変換点から約 3 m 西に位置する。したがって、SB3415 造営においては、傾斜があり地山までの堆積層が相対的に厚い沢状地形を避け、丘陵尾根部分のより安定した地盤を選地したと推定される。

沢状地形の傾斜変換点の範囲については、SB3415 の東側に分布する第Ⅲ層を精査し、古代の旧



図版36 SB3415掘立柱建物と9m方眼



図版37 古代の遺構と中世以降の道路の位置

地形や整地層の有無を明らかにした段階で再度検討するが、SB3415の位置は、建物の規模・構造と対象地の地形が考慮され、その上で、政庁の建物配置計画に基づいて決定されたと推定される。この点については、地形の制約により政庁の北西側に位置する政庁北方建物の特徴と共通する。

【平面形式・規模】平面形式は桁行6間、梁行3間の東と北に廂がつく南北棟で、棟方向と廂の位置から、沢状地形に面した東側を正面とする。規模は桁行総長が18.6m、梁行総長が9.6mで、柱間は3.0～3.1mを主体とし、身舎と廂の出の柱間にも大きな相違は無い。

多賀城跡の調査では、これまで300棟以上の建物が確認されているが、その中で古代の廂付建物は72棟と少なく、さらに建物の2面以上に廂が付くものは35棟と極めて少数である。

SB3415と同様に平入側と妻側に廂が付くものは、SB3415ABを含めると政庁の南門西前殿であるSB187C、北西部建物であるSB567（註4）、城前官衙のSB2454AB・2524AB、大畑地区のSB2205の9棟がある（第11表）。年代はいずれも第Ⅲ期以降で、規模はSB3415が最大である（註5）。また、廂付建物全体での規模は、第Ⅰ～Ⅳ期では13番目、第Ⅲ期以降では10番目、さらに第Ⅲ期以降の政庁以外では六月坂地区の四面廂建物であるSB250掘立柱建物（図版37）に次ぐ2番目となる。

したがって、SB3415は、平面形式と規模の面で城内でも上位に位置づけられる建物と考えられる。

【構造】廂には東廂と北廂があるが、両者は柱穴掘方の規模や深さ・底面標高に相違が認められる。東廂においては掘方の規模は小さいが、底面標高は身舎の柱穴と類似し、一方、北廂においては東廂よりも掘方の規模が大きく、底面標高が身舎や東廂よりも高い。両者の相違は建物の構造に関係する可能性がある。

建物の床については、床束や整地層を確認できず詳細は不明である。

【位置づけ】政庁と近接し、地形を考慮しつつ政庁の建物配置計画に基づいた位置にあること、北・東に廂が付く大型の建物で、平面形式・規模の面では城内官衙の主屋に相当することから、政庁北方建物と同様に、政庁と空間的な一体性を持ち、密接な関係を有した建物と考えられる。

【SB3450 掘立柱建物】

【位置】SB3450はSB3415の北側に所在し、SB3450の南側柱列はSB3415の北側柱列から約12m北に、政庁北辺築地塀から69m北に、政庁北方建物から45m北に位置する（図版4）。建物の方向が東で北に偏るため、東西・南北基準線との位置関係は明瞭ではないが、西側柱列はSB3415西側柱列と同様に、政庁西辺築地塀の北側延長であるW53上に位置する。

【立地】SB3415と同じく、丘陵根根上の緩斜面に立地する。SB3450の南東部には沢状地形の堆積層である第Ⅵb層が分布しており、地形的に低くなる。建物の棟方向が等高線と平行するとみられ、地形に合わせた立地と考えられる。なお、方向は、六月坂地区の建物群に類似する（図版37）。

【平面形式・規模】平面形式は桁行6間、梁行2間の東西棟である。規模は桁行総長が15.7m、梁行総長が5.9m、柱間は梁行が2.9・3.0mと一定であるのに対して、桁行が2.0～3.0mと不規則である。

多賀城跡で検出された廂が付かない掘立柱建物のうち、桁行6間以上のものは27棟確認でき（第12表）、このうちSB3450と同じ桁行6間、梁行2間のものは、城前官衙SB2849、六月坂地区SB424・434、大畑地区SB711・807・2354・2355と、同じく大畑地区のSB2296・2353も同様と推定され、SB3450ABを含めて11棟認められる。年代はすべて第Ⅲ期以降である。規模は、判明した8棟の中では6番目である。多賀城跡で検出された掘立柱建物の中でも桁行6間以上のものは少なく、SB3450は多賀城内で数少ない長大な建物の一つである。

【SB3415とSB3450、政庁北方建物について】

SB3415とSB3450は、柱間や建物の方向が異なるが、一方で、柱穴掘方の規模や形状、西側

地区	次数	遺構	時期	報告書	棟方向	平面形式	桁行 間		梁行 間		柱穴幅 (m)	柱幅 (m)	備考
							幅	間	幅	間			
政庁	—	SB127	I	補遺編	南北	7 × 2	17.9	2.56	5.6	2.8	1.2-1.4	30	協助
		SB175	I	補遺編	南北	7 × 2	17.92	2.4-2.7	5.66	2.7-2.8	1.2-1.4	35	協助
		SB023	I	本文編	東西	7 × 2	20.37	2.75-3.07	5.99	2.95-3.02	1.5	35-40	前説
		SB187A	I	本文編	東西	7 × 2	20.7	2.93-3.19	5.93	2.95-2.98	1.5-2.0	30-40	前説
		SB1149	IV 3a	本文編	南北	6 × 1	15.1	2.4-2.6	4.2	—	0.5	20	北西部建物
		SB373	IV 3d	本文編	南北	7 × 2	15.35	1.9-2.5	5.07	2.2-2.7	0.5-0.7	20	北西部建物
		SB051A	IV 2	補遺編	東西	7 × 3	21.0	3.0	9.0	3.0	1.7	45	北方建物
		SB051B	IV 2	補遺編	東西	7 × 3	21.0	3.0	9.0	3.0	1.0	30	北方建物
		SB53A	IV 2	補遺編	南北	7 × 1	21.0	3.0	4.36	—	1.5	25	北方建物
		SB53B	IV 2	補遺編	南北	7 × 1	21.0	3.0	4.36	—	0.7-0.9	30	北方建物
		SB1050A	IV 2	補遺編	南北	7 × 1	21.0	3.0	4.5	—	1.4	—	北方建物
		SB1050B	IV 2	補遺編	南北	7 × 1	21.0	3.0	4.5	—	1.0	—	北方建物
		SB1013A	IV 2	補遺編	東西	12 × 1	36.0	3.0	4.5	—	1.4	30	北方建物
		SB1013B	IV 2	補遺編	東西	12 × 1	36.0	3.0	4.5	—	0.8-1.0	30	北方建物
		政庁北方	95	SB0450A	III	年報 2021	東西	6 × 2	—	—	—	0.95 ~ 1.56	20 ~ 27
SB3450B	III			年報 2021	東西	6 × 2	15.7	2.0 ~ 3.0	5.9	2.9 ~ 3.0	0.5 ~ 1.1	24 ~ 36	
墓前	—	SB2849	III	前記	南北	6 × 2	14.2	2.2-2.6	4.8	2.4	0.7-1.0	20	
		SB434	IV	年報 1972	南北	6 × 2	18.0	2.68-3.3	6.0	3.0	1.1-1.8	29	
六角版	18	SB424	III	年報 1972	東西	6 × 2	16.7	2.7-2.9	5.0	2.5	0.8-1.3	29	
		SB062	III	年報 1977	南北	7 以上 × 2	15 以上	2.3-2.5	5.4	2.7	0.85-1.5	30	
大堀	—	SB711	III	年報 1974	南北	6 × 2	18.6	3.1	6.0	3.0	1.0-1.7	—	
		SB807	III	年報 1993	南北	6 × 2	17.73	2.75-3.12	6.02	2.91-3.11	1.3	27	
		SB2296	III	年報 1995	南北	6 × 1 以上	18.0	2.91-3.1	不明	不明	0.85-1.3	27-36	
		SB2353	III	年報 1996	南北	6 × 1 以上	17.89	2.78-3.16	不明	不明	1.1-1.3	24	
		SB2354	III	年報 1996	東西	6 × 2	17.68	2.82-3.04	5.95	2.94-3.0	0.9-0.95	24	
		SB2355	III	年報 1996	南北	6 × 2	18.15	2.88-3.11	6.52	2.98-3.34	1.0-1.2	25	
		SB2411	IV	年報 1997	南北	8 × 1 以上	18.81	2.15-2.53	2.99 以上	—	0.75-1.1	27	

第 12 表 多賀城跡で確認された廂の付かない桁行 6 間以上の掘立柱建物

柱列がW 53 上に位置する点には共通性が認められる。両者とも出土遺物から推定した年代は第Ⅲ期以降であり、同時期になる可能性はある。また、両建物は第Ⅳ期の政庁北方建物とも同時期になる可能性もあるが、これらの年代的な関係については、来年度、遺構面と推定される第Ⅵc 層を含めた調査を行う予定であり、その検討を行った上で再度言及したい。

②溝

SD3426・3438・3453・3458 について特徴をまとめ、位置づけを検討する。

【位置】南区の東部と西部に分布し（図版8）、前者はSD3438・3453、後者はSD3426・3458である。

【方向】部分的に屈曲する箇所はあるが、主に北東-南西方向で、東部のSD3438・3453は南北基準線に対して北が東に12～14°、西部のSD3426・3458は15～18°偏り、それぞれ平行する。これらの方向は、等高線に平行するとみられ、地形に合わせたものと推定される。

【規模】東部のSD3438は検出長が22.5m、上幅が73cm、SD3453は検出長が26.6m、上幅が80cm、深さ9cmで、上幅の規模が類似し、両溝間の距離は心々で3.0～3.5mである。

西部のSD3426は検出長が第94次調査分を合わせて約14.5m、上幅が60cm、深さ18cm、SD3458は検出長が7.3m、上幅が60cmで、検出長に相違はあるが、上幅は共通する。両溝間の距離は心々で3.0mである。

【位置づけ】方向や規模の共通性、2条の溝が平行することから、東部のSD3438・3453と西部のSD3426・3458は道路で、これらの溝は東西の道路側溝の可能性はある。方向は、地形に合わせたもので、旧塩竈街道である現在の市道市川線とも類似し、位置も市道市川線に近接する（図版37）。両者の新旧関係は不明だが、どちらも年代が11世紀後半より新しい中近世であることから、古代の多賀城の外郭東門と西門を接続する東西道路の後継となる道路で、近世の

塩竈街道の前身となる道路、あるいは塩竈街道そのものの可能性がある。なお、北区でこれらの延長を検出していないのは、現代の削平により消滅したためと考えられる。

(3) まとめ

第95次調査の目的は、第94次調査A区の未調査範囲を中心に遺構の分布や構成を確認すること、状況地形の範囲など旧地形を把握し、地形と遺構の分布との関連性を確認することであった。

調査の結果、以下の成果を得た。

- ①掘立柱建物2棟、竪穴建物1棟、土坑5基、溝14条、自然流路3条、柱穴を検出した。古代の遺構は掘立柱建物、竪穴建物、古代末から中世の遺構は土坑、溝、中世以降が溝と自然流路である。
- ②掘立柱建物は2棟あり、SB3415は北・東に廂が付く大型の建物で、年代は第Ⅲ期以降と推定される。政庁と近接し、その位置は第Ⅱ～Ⅳ期の政庁の建物配置計画に基づいている。平面形式、規模、配置の計画性から政庁と密接な関係を持った建物と考えられる。SB3450は第Ⅲ期以降の建物で、政庁以外で検出した掘立柱建物の中では大規模なものである。
- ③中近世以降の溝を9条検出した。このうち、SD3426とSD3458、SD3438とSD3453はそれぞれ平行し、規模も類似することから2条の道路の可能性はある。
- ④出土遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、白磁、灰釉陶器、瓦、転用砥、土製品、石製品、鉄製品、鉄滓、中世陶器、近世以降の陶磁器・瓦質土器・土師質土器・銅銭である。古代が主体で、その中でも瓦の割合が高い。土器では、溝から11世紀後半の須恵系土器がまとめて出土した。

註

- 註1：近世以降の陶磁器の産地や年代観については、宮城県教育庁文化財課の齋藤和機氏にご教示いただいた。
- 註2：白磁と灰釉陶器の産地や分類・年代観については、宮城県教育庁文化財課の古川一明氏、高橋透氏にご教示いただいた。
- 註3：これらの平瓦については、今回は第9・10表の集計表においてもⅠD類に含めている。また、この内1点は胎土に海綿骨針が含まれている。なお、凸面平行叩きのⅠD類は亀岡遺跡に出土例がある（『関連29』）。今後の資料の増加に期したい。
- 註4：SB567は、「東西4間、南北3間の東西棟で、南および西廂付の掘立柱建物」で、「身倉部分のみ2時期重複しているが、廂はA・Bいずれかに付されたか不明である」（『本文編』p.109）。したがって、ここでは1棟として数える。
- 註5：規模については、桁行総長と梁行総長から求めた面積の値に基づいている。

引用文献

- 白鳥良一 1980『多賀城跡出土土器の変遷』『研究紀要』Ⅶ pp.1-38 宮城県多賀城跡調査研究所
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集

Ⅲ. 鉄製品と瓦の追加報告

多賀城跡調査研究所では、『年報』等の刊行後に修正・補足、新たに注目される事実が判明した資料については、『年報』で追加報告している。今回は、第94次調査で出土した鉄製品と、多賀城廃寺跡出土瓦について報告する。

1. 第94次調査出土鉄製品

令和2年度の第94次調査で出土した鉄製品6点について報告を行う(註1)。これらは、昨年度刊行した『年報2020』には鏽落とし作業の工程上掲載できなかったが、出土例が多くはなく特徴的なものである。発掘調査の概要及び出土遺構・層については『年報2020』で詳述しているため、ここではそれらの記載を省略し、遺物の特徴のみ記述する。

図版38-1はA-2区南SK3421土坑大別3～8層から出土した曲刃鎌である。着柄部は角度150度前後の鈍角柄である。着柄部の角度が110度を超えるものは、刈り取り用ではなく工具に近い「鉞鎌」とされる(古瀬1991)。

2はSK3421大別1層から出土した獣脚である。爪の表現は不明瞭であるが、5枚あるものと考えられる。爪の上部には指の表現が見られず、関節を模したと考えられる横線が接する。関節より上部に文様は施されていない。多賀城内での出土は第67次調査SI2378竅穴建物出土例(『年報1996』)に次ぐ2例目である。

古代の鋳造遺跡としては、近隣では福島県新地町向田A遺跡(安田1989)、同相馬市山田A・猪倉B遺跡(小暮1997)が挙げられる。向田A遺跡では8世紀後葉から鋳造が開始され、9世紀前葉から中葉にかけて最盛期を迎えるとされている。山田A遺跡では9世紀前半頃から、猪倉B遺跡では9世紀後半頃から鋳造が開始される。いずれからも器物・獣脚・梵鐘などの鋳型が多数出土している。向田A・猪倉B遺跡出土の鋳型は分類整理されているが(安田1989、能登谷1997)、2に該当する分類は見当たらない。

獣脚出土例としては、東京都落川遺跡、埼玉県台耕地遺跡、千葉県佐原上ノ台遺跡が挙げられ、いずれも10世紀後半に位置づけられている(能登谷1997)。2の年代・製作地は明らかにしないが、出土したSK3421大別1層は11世紀後半以降と考えられ、伝世した可能性もある。

3はB-1区SX3440整地層から出土した鉄鎌である。長頸鎌の頸部～茎部にかけての破片で、関節は四面に段をもつ四面台状(段)関である。多賀城内出土の四面台状関をもつ長頸鎌のうち第44次調査SD1413A石組暗渠出土例の年代は、共伴する木簡の検討から、神亀元年(724)4月～神亀2年(725)末頃とみられている(『南面Ⅲ』)。また、これまでの研究では四面台状関をもつ長頸鎌は、7世紀後葉～8世紀前半に出現することが明らかにされている(内山2003)。以上のことから、3の年代は7世紀後葉～8世紀前半以降と考えられる。

4はB-1区の第Ⅱa層から出土した馬具の兵庫鎖で、5連の円環からなる。轡の鏡板ないし鐙の鎖紐受穴に取り付けていたものと考えられる。上下の別は不明である。①・②の円環は連

結しておらず、③の円環とそれぞれ連結している。①・⑤の円環の先端には途切れた痕跡が確認でき、両側から先端を合わせて成形したことがわかる。

5はB-1区の第Ⅱa層から出土した板鏝の無窓鏝である。内孔径から推定すると小型の刀身に装着されていたものと考えられる。これまでの研究では、鏝の平面形は丸みの強い倒卵形から次第に縦長の形状に変化し、倒卵形を呈する鏝は7世紀後葉に消滅するとされている(菊地2010)。5の平面形は小判形を呈し、倒卵形から崩れていることから、5の年代は7世紀後葉以降と考えられる。

6はB-2区の第Ⅲa層から出土した釘である。頭部は鉞頭状を呈する。多賀城内での類例は第66次調査SI2300工房出土の5点が挙げられ、櫃に用いられたものと考えられている(『年報1995』)。類似する特徴をもつ6も櫃に用いられていた可能性がある。

註

註1：馬具の兵庫鎖、板鏝の器種同定には宮城県文化財課の廣谷和也氏にご教示いただいた。

引用文献

内山敏行 2003「古墳時代終末期の長頸鏝—東日本における棘間長頸鏝鉄鏝の評価—」『武器生産と流通の諸問題』

7世紀研究会シンポジウム pp.27-42

菊地芳朗 2010『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会

小暮伸之 1997「第3節 相馬地域の鑄造」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅴ 本文2』 福島県文化財調査報告書第333集
福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・地域振興整備公団 pp.403-414

能登谷宜康 1997「第5節 猪倉B遺跡の平安時代の遺物について」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅴ 本文2』

福島県文化財調査報告書第333集 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・地域振興整備公団
pp.426-460

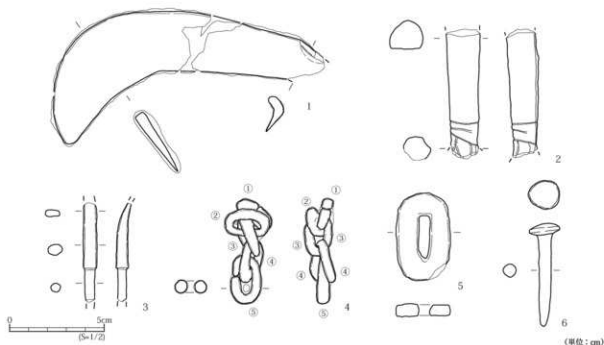
古瀬清秀 1991「4 農工具」『古墳時代の研究』8古墳Ⅱ副葬品 雄山閣 pp.71-91

安田稔 1989「第4節 鑄型」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ 本文2』 福島県文化財調査報告書第215集

福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター・地域振興整備公団 pp.50-95

図版		登録番号	図版		登録番号
39	1	Z9474	39	4左	Z9479
	2左	Z9475		4右	Z9480
	2右	Z9476		5	Z9481
	3左	Z9477		6	Z9482
	3右	Z9478			

第13表 鉄製品の写真の登録番号一覧



No.	遺構・層	種類	現存	法量	特徴	写真図版	登録	箱番号
1	SK3421・ 大第3-a層	曲刀鏃	ほぼ完形	長：(15.2) 刃部幅：3.2 刃部背厚：0.5 基部幅：(1.7) 基部厚：0.5	着柄部の角度150度前後の鈍角柄 片刃か両刃かは不明	39-1	R102	B16081
2	SK3421・ 大第1層	鉄釧	一部	長：(6.6) 幅1.8 厚さ：1.5	爪は5枚の爪の上部に圓面を視した縞縞の断面半円形	39-2	R172	B16081
3	SX3440・ 埋	鉄釧	柄～基部	長：(5.2) 頸部幅：0.7 頸部厚：0.2～0.5 基部径：0.5	長距離 四面台状(段)溝	39-3	R251	B16081
4	B-1区 第Ⅱa層	馬具兵庫釧	一部	5連 長(5.5) 幅：1.6 巻締径：0.6	5点の内蔵(①-⑤)が連結 巻の縞縞なし縞の縞射受穴に取り付くもの	39-4	R270	B16081
5	B-1区 第Ⅱa層	鐙	ほぼ完形	長径：4.6 短径：2.9 厚さ：0.6	小判形 板鐙の無窓鐙	39-5	R272	B16081
6	B-2区 第Ⅲa層	釘	完形	長：5.4 頭部径：1.7 体部径：0.7	頭部は鋭歯状 体部断面円形	39-6	R359	B16081

図版 38 第94次調査出土鉄製品



1・2：A-2区南SK3421，3：B-1区SX3440，4・5：B-1区第Ⅱa層，6：B-2区第Ⅲa層

(1～6：S=1/2)

図版 39 第94次調査出土鉄製品 写真

2. 多賀城廃寺跡出土軒丸・軒平瓦、鬼板

多賀城廃寺跡出土の瓦については、『多賀城跡調査報告Ⅰ—多賀城廃寺跡—』（宮城県・多賀城町 1970）で主なものを報告しているほか、『図録編』、『年報 1975』でも補足的に報告している。これらは、基本的に多賀城政庁跡出土瓦を検討した『本文編』の分類・型番に当てはめることが可能である。今回は、対応する型番のうち未報告の6点（軒丸・軒平瓦と鬼板）について報告する。一部は『年報 1970』で瓦当部の拓本のみ掲載しているが、ここでは断面や瓦当以外の情報も含めて報告する。なお、各型番の基本的な文様構成については、『本文編』に記載されているため、ここでは省略する。

図版 40-1 は重弁蓮花文軒丸瓦 130 である。瓦当部の破片で、厚さ 3.2～4.6cm とやや厚手である。丸瓦との接合面に布目が転写されている。丸瓦と接合した際に付加された粘土が、瓦当裏面の下端付近まで及ぶ点は、『図録編』PL.67-6 と共通する。

2 は細弁蓮花文軒丸瓦 311 である。瓦当部の破片で、厚さは 1.8～3.3cm、色調はやや赤みを帯びた灰色である。

3 は宝相花文軒丸瓦 425 である。『年報 1970』の第 9 図に瓦当部の拓本のみ掲載したもので、『図録編』PL.74-3 より残りが良い。瓦当直径は 19.3cm、厚さは 1.5～3.0cm で、上部から左周縁部にかけて、范からずれた粘土がはみ出した状態で残る。また、裏面と側面に縄叩き目を残す。丸瓦はⅡ類で、凸面に縄叩き目を残す。

図版 41-4 は二重弧文軒平瓦 511 で、平瓦ⅠC類 a タイプを用いた 511-c タイプである。瓦当部は一端が欠損しており、厚さは 4.8cm である。顎面の長さは 8.5～9.4cm で、顎面には直線文 2 本と鋸歯文を施文する。平瓦部には縄叩き→矢羽根状叩きの痕跡が認められる。

5 は三重弧文軒平瓦 514 で、『年報 1970』の第 10 図にも瓦当部と顎面の拓本を掲載している。瓦当部の破片で、幅 32.2cm、厚さ 4.2～4.7cm である。顎面に深い直線文と、やや丸みを帯びた鋸歯文が施され、左端ではこれらを描き直した痕跡がある。顎面下端が直線文もしくは段差の途中で割れている。平瓦の種類は不明だが、顎面の接合面が剥離した部分では、格子叩きの痕跡が明瞭に残る。なお、政庁跡では軒平瓦 514 が 1 点のみ出土しており（『図録編』PL.77-1）、顎面の直線文は 2 本で、平瓦はⅠC類 a タイプを用いている。

図版 42-6 は重弁蓮花文鬼板 950 A である。両下端部と中房の上半部などを欠くが、現状は完形に復元している。鬼板 950 B になると、左下部にある蓮花の蕾文様の左下に、范による闕出文字「小田建万呂」が追加される（『廃寺跡』図版 49-1・2）。本資料では左下部が欠損しているものの、950 B で「小田」の文字があるところに明瞭な木目が観察されることから、文字が追加される前の 950 A と判断した。6 の裏面は全体に賣の子状の圧痕があり、一部に格子叩きの痕跡が残る。950 B では賣の子状の圧痕しか確認されないため、格子叩きは 950 A に特徴的な技法と考えられる。

引用文献

宮城県教育委員会・多賀城町 1970『多賀城跡調査報告Ⅰ—多賀城廃寺跡—』

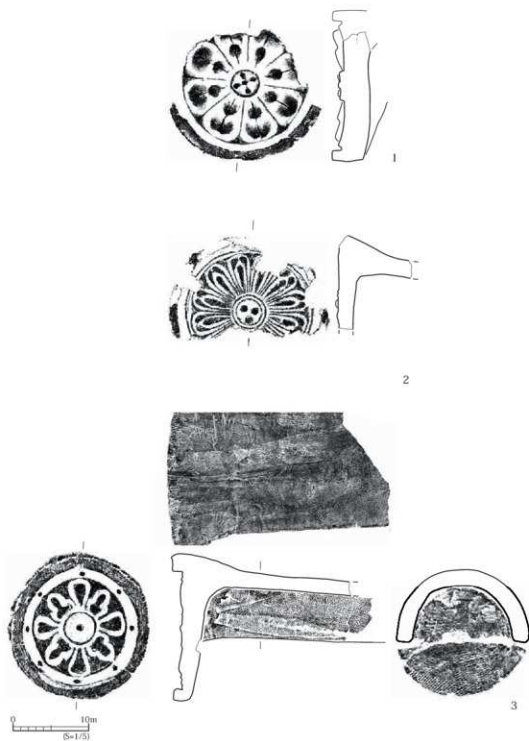
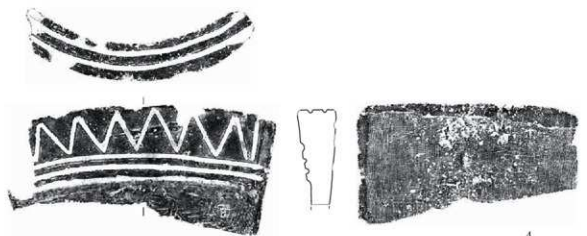


図	出土位置	種類	残存	法量(残存) cm	特徴	写真
1	廃寺跡	軒丸瓦	瓦当片	瓦当径(19.7) 厚 3.2-4.6 中径径 4.0	重存蓮花文 130、丸瓦との接合面に布目転写	43-1
2	廃寺跡	軒丸瓦	瓦当片	瓦当径(20.5) 厚 1.8-3.3 全長(10.4)	細存蓮花文 311、瓦当裏面ナシ、丸瓦部凹面布目	43-2
3	廃寺跡 溝壁	軒丸瓦	2/3	瓦当径 19.3 厚 1.5-3.0 全長(29.5) 丸瓦厚 1.8-2.2	宝相花文 425、范ずれあり、瓦当裏面と周面凹面布目、丸瓦部凹面、凸面凹面	43-3

図版 40 多賀城廃寺跡出土瓦 (1)



4



5



図	出土位置	種類	残存	法量(残存)cm	特徴	写真
4	廃寺跡 塔北	軒平瓦	1/3	瓦当幅 29.5 厚 4.8 額面長 8.5-9.4 全長 (15.8) 平瓦厚 1.9-2.6	二重弧文 511-c、額面縦曲文・直線文 2 本、赤彩わずかに残存。平瓦部 1 C 類 (凸面脚甲き→矢羽根甲き、凹面布目)	43-4
5	廃寺跡 塔南	軒平瓦	瓦当片	瓦当幅 32.2 厚 4.2-4.7 額面長 8.5	三重弧文 514、額面縦曲文・直線文 2 本、赤彩わずかに残存。接合面に格子甲きの痕跡、凹面布目	43-5

図版 41 多賀城廃寺跡出土瓦 (2)

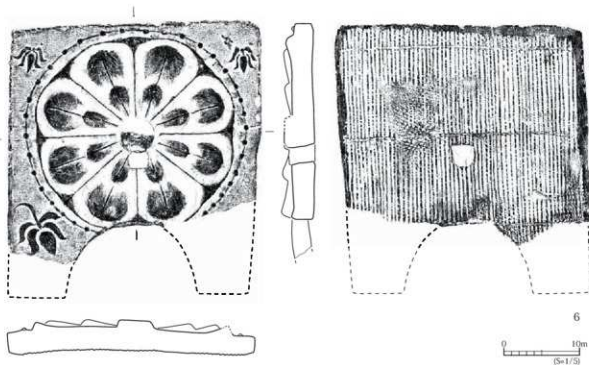


図	出土位置	種類	残存	法量(残存)cm	特徴	写真
6	廃寺跡	瓦板	4/5 (石膏で復元)	幅 32.8 全長(31.5) 蓮花文径 26.3 中開径 5.0 厚 2.1-4.2	重弁蓮花文 950A。中央下部に方形の釘穴(一辺 2.2~2.5cm)。裏面格子印き→裏の子状の狂痕	44-6

図版 42 多賀城廃寺跡出土瓦 (3)



図版 43 多賀城廃寺跡出土瓦 写真(1)



図版 44 多賀城廃寺跡出土瓦 写真（2）

図版	登録番号	図版	登録番号	図版	登録番号			
43	1	Z9491	43	4a	Z9499	44	6a	Z9511
	2a	Z9493		4b	Z9500		6b	Z9512
	2b	Z9494		4c	Z9501			
	3a	Z9495		5a	Z9502			
	3b	Z9496		5b	Z9503			
	3c	Z9497	5c	Z9504				

第 14 表 多賀城廃寺跡出土瓦の写真の登録番号一覧

IV. 付 章

1. 関連研究・普及活動

(1) 多賀城跡環境整備事業

多賀城跡環境整備事業は昭和45年度から5カ年計画を積み重ねる形で実施してきており、平成27年度を初年次とする第10次5カ年計画からは、政庁南面地区を対象に整備工事を進めている(第15表)。これは政庁の南面に位置する政庁南大路や城前官衙の遺構表示を中心としたものであり、多賀城創建1300年の記念の年に当たる令和6年の供用開始をめざしている。

令和3年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により事業を繰り越していた令和元年度整備工事、令和元年度災害復旧工事、令和2年度整備工事と、本年度事業として令和3年度整備工事を実施し、そのうち令和元年度の一般事業と災害復旧事業は令和3年11月30日に完了した。

令和2年度および令和3年度の整備工事は、依然事態が好転しない新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、令和4年度へ繰り越すこととなった。なお、今年度完了した令和元年度の工事概要は『年報2019』にて報告している。令和2、3年度の工事の内容については、事業完了後に報告することとした。

なお、令和元年度事業である政庁南大路の復元が完了したため、供用開始にあたり地元住民への周知と公開を目的として令和3年10月16日に開通式を開催し、来賓や地区住民33名が参加した。

	年 度	整備地区	計画内容	対象面積
第10次5カ年計画	平成 27 (2015)	政庁南面地区	政庁南大路復元舗装、総合解説広場補修	24,000㎡
	平成 28 (2016)		政庁南大路復元舗装、地形測量	
	平成 29 (2017)		基盤整備工、実施設計	
	平成 30 (2018)		造成工、法面工、擁壁工、雨水排水工	
令和 元 (2019)	雨水排水工、災害復旧 政庁南大路石垣復元・路面復元舗装、大路開通遺構表示			
第11次5カ年計画	令和 2 (2020)	政庁南面地区	政庁南大路復元舗装、城前官衙床張建物表示、建物構造復元	
	令和 3 (2021)		城前官衙床張建物表示、土間建物表示、竪立柱脚表示	
	令和 4 (2022)		城前官衙土間建物表示、竪立柱脚表示	
	令和 5 (2023)		説明板、弧芝、便益施設	
	令和 6 (2024)		空堀露出展示、説明板、緑化修景	
		作賀地区		

第15表 多賀城跡環境整備事業第10・11次5カ年計画(令和元年度委員会承認)

(2) 特別史跡多賀城跡附寺跡の現状変更

特別史跡内の現状を変更する際には、現状変更の申請者及び関係機関と遺跡保護のために慎重な協議を行い、遺跡に影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査や、工事に際する立会を行っている。令和3年度に扱った現状変更は、昨年度の申請で工事が未着手であった繰り越しの1件(第16表1)と、今年度に申請があった3件(2~4)である。

昨年度の繰り越しである1は、環境省が実施している「みちのく潮風トレイル」の誘導用標

識を設置するものである。当初、令和2年12月14日に申請し令和3年1月14日付で文化庁から許可がおりたが、『年報2020』第13表)、工事期間の変更が生じたため令和3年3月18日に再度申請がなされた。多賀城跡7地点、多賀城廃寺跡4地点の設置工事に立会い、いずれも遺構・遺物は認められなかった。

今年度の申請3件のうち、2は多賀城市が事業主体である多賀城外郭南門周辺の地形修復工事に伴うものである。南門北側の盛土造成工事を行うにあたり、工事車両の入口の進入幅を確保するために一部切土が必要になることから立会を行い、その結果、掘削が表土内に収まることを確認した。遺物は出土していない。3・4は現時点で許可がおりていないため、未実施である。

番号	変更事項	申請者	変更箇所	申請	文化庁許可	対応
1	誘導標識設置	東北地方環境事務所長	多賀城市市川字六月坂39番1ほか	令和3年3月18日	3受文庁第4号の3 令和3年4月27日	工事立会 令和3年6月15日
2	南門復元工事 (地形修復)	多賀城市長	多賀城市市川字坂下19-1ほか	令和3年10月7日	3文庁第1640号 令和3年11月19日	工事立会(南門北側造成) 令和4年1月14日
3	土留擁壁の設置等	個人	多賀城市市川字坂下66-1	令和3年11月4日		工事立会
4	板倉補修	個人	多賀城市市川字城前77	令和3年11月17日		工事立会

第16表 令和3年度現状変更一覧

(3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業

当研究所は、多賀城に関連する宮城県内の城柵及び官衙遺跡や生産遺跡について計画的な調査と研究を継続している。平成21年度からは多賀城創建期の窯跡群の発掘調査を実施し、造瓦体制とその社会的背景の解明を主目的とした多賀城関連遺跡発掘調査事業第8次5ヵ年計画を進めていた。平成23年度以降は、東日本大震災による復旧・復興事業に伴う発掘調査の支援を優先したため事業を休止していたが、集中復興期間が令和2年度で終了したため、令和3年度から事業を再開した。今年度は、第8次5ヵ年計画の3年次目として、大崎市教育委員会の共催を得て大崎大古山瓦窯跡の第1次調査を実施した。発掘調査面積は約145㎡で、総事業費は2,824千円(50%国庫補助)である。

大古山瓦窯跡は昭和40年代に発見され、多賀城創建期の瓦窯跡として昭和51年に国史跡に指定されたが、これまで発掘調査が実施されていなかった。今回は遺構分布の把握を主目的として、測量と発掘調査を実施した結果、窯8基を検出するなど大きな成果を挙げることができ、その詳細を多賀城関連遺跡発掘調査報告書第37冊として刊行した。今後は窯の新旧関係や構造等を具体的に把握する必要があるが、そのためにはあと2ヵ年の調査が必要と判断し、多賀城跡調査研究委員会で承認を得た。

(4) 遺構調査研究事業

本事業は、多賀城跡及び関連遺跡の発掘調査で検出した諸遺構の保存と活用を目的として、

他遺跡の類例と比較検討しながら基礎的研究を行うものである。本年度は新型コロナウイルス感染症予防対策のため県外への調査は自粛したが、県内の城柵官衙関連遺跡の調査として、栗原市源光遺跡、利府町羽黒前遺跡、東松島市赤井官衙遺跡、岩沼市原遺跡に赴き、担当者と意見交換しながら多賀城との関係や調査方法等についての基礎資料を得た。

(5) 公開講座の開催

当研究所の研究員がそれぞれの専門分野の視点から、これまでの調査研究の蓄積を踏まえて、多賀城跡や古代東北地方に関する一般向けの講座を開催した。会場は東北歴史博物館の3階講堂を使用し、毎回約60名の参加者を得た。

- | | | | |
|-----|-----------|-------------|----------------------------------|
| 第1回 | 11月6日(土) | 13:30～15:00 | 多賀城の瓦 入門編(初鹿野博之) |
| 第2回 | 11月13日(土) | 13:30～15:00 | 多賀城の変遷—政庁から外郭南門までを中心に—
(村上裕次) |
| 第3回 | 11月20日(土) | 13:30～15:00 | 桃生城を復元する(白崎恵介) |

(6) その他

1) 現地説明会の開催、見学会などへの対応

発掘調査の成果を一般に公開するため、調査の進捗状況をホームページで公開するとともに、下記の現地説明会を行った。

大古山瓦窯跡第1次発掘調査現地説明会	初鹿野博之・矢内雅之	令和3年7月20～22日
多賀城跡第95次発掘調査現地説明会	村上裕次・矢内雅之	令和3年10月23日

また、以下の団体の史跡見学等に関して説明を行った。

東北歴史博物館友の会 四季を愛でる会	白崎恵介	令和3年 6月18日
宮城県史跡整備市町村協議会連絡会議現地視察	白崎恵介	令和3年 8月 3日
熊本県益城町・嘉島町現地視察	白崎恵介	令和3年10月18日
南相馬市泉官衙遺跡愛護会現地視察	白崎恵介	令和3年12月 5日
塩竈市立浦戸小学校6年生社会科校外学習	村上裕次	令和3年12月 9日
福井県一乗谷朝倉氏遺跡資料館現地視察	白崎恵介	令和3年12月15日

2) 資料の閲覧・貸出などに関する協力

以下の機関・団体等への資料の閲覧・貸出などに際し、準備・説明等をした。

会津美里町教育委員会、石巻市立桃生小学校、戎光祥出版(株)、及川謙作、大崎市古川東大崎地区公民館、(株)河合出版、(株)童夢、(株)山川出版社、北上市立博物館、九州歴史資料館、杏名貴彦、斎宮活性化実行委員会、駿台文庫(株)、仙台放送、多賀城市、多賀城市教育委員会、多賀城・七ヶ浜市民活動団体等連絡協議会、高橋透、館内魁生、日本放送協会仙台拠点放送局、藤木海、谷津愛奈、(有)青青編集、涌谷町教育委員会

3) 各機関・委員会などへの協力

- 高橋栄一 秋田市秋田城跡環境整備委員会委員、秋田県弘田柵跡環境整備審議会委員、多賀城南門等復元整備検討委員会議、特別史跡多賀城跡附寺跡保存活用計画策定委員会委員、多賀城市文化財保護委員会委員、栗原市史跡伊治城跡調査整備指導委員会委員、岩沼市原遺跡調査検討会委員、多賀城創建 1300 年記念事業実行委員会幹事会幹事、古代城柵官衙遺跡検討会世話人代表
- 白崎恵介 釜石市橋野高戸跡史跡整備検討委員会委員、多賀城南門等復元整備検討委員会議、特別史跡多賀城跡附寺跡保存活用計画策定委員会協力、松島町文化財保護委員会委員、松島町景観審議会委員、亘理町三十三間堂遺跡整備委員会委員、塩竈市文化財保護審議会委員、多賀城創建 1300 年記念事業実行委員会幹事会幹事
- 初鹿野博之 多賀城南門等復元工事屋根瓦復元協力、東京大学総合研究博物館研究事業協力員

4) 講演会・研究会などへの協力・執筆

- 高橋栄一「宮城県の復興調査—実施状況と調査成果の公開—」『月刊文化財』第 691 号 令和3年4月1日
- 白崎恵介「多賀城跡政庁南面地区の整備について」令和3年度宮城県史跡整備市町村協議会連絡会議事例報告
多賀城市市民活動サポートセンター 令和3年8月3日
- 高橋栄一「東日本大震災からの復旧・復興事業の今～宮城県の事例～」
令和3年度埋蔵文化財担当職員等講習会第1回 令和3年8月25・26日 第2回 令和4年2月2・3日
- 高橋栄一「震災から10年—宮城県の復興調査といま—」『考古学研究』第68巻第2号 令和3年9月30日
- 白崎恵介「多賀城って?」段ブロックで多賀城南門をつくろう (一般社団法人宮城県建築士会青年部主催) 講師
東北歴史博物館 令和3年11月21日
- 白崎恵介「復元という遺産」2021年度日本遺跡学会大会パネルディスカッションコーディネーター
奈良文化財研究所 令和3年11月28日
- 矢内雅之「多賀城跡第95次調査」令和3年度宮城県遺跡調査成果発表会報告 涌谷公民館 令和3年12月11日
- 白崎恵介「多賀城創建 1300 年を記念する史跡整備について」『遺跡学研究』第18号
日本遺跡学会 令和3年12月13日
- 村上裕次「多賀城跡と城下の方格地割」公開講座 多賀城と伊勢斎宮 東北歴史博物館 令和4年2月20日
- 白崎恵介「遺跡・建造物など不動産資料への対応」歴史文化資料保全コーディネーター講座講師
東北大学学術資源研究公開センター総合学術博物館 令和4年3月7日

5) 連携大学院

東北大学大学院文学研究科長と宮城県教育委員会教育長の協定に基づき、文学研究科文化財科学専攻の大学院生の研究と指導にあたった。

高橋 栄一 (客員教授)

文化財科学研究演習

高橋 栄一 (客員教授)・白崎 恵介 (客員准教授)

文化財科学研究実習 I

2. 組織と職員

〈宮城県教育委員会行政組織規則（抄）〉

（昭和 41 年 4 月 26 日教育委員会規則第 4 号 最終改正平成 31 年 4 月教育委員会第 1 号）

第 13 条の五 文化財課の分掌事務は、次のとおりとする。

四 多賀城跡調査研究所及び歴史博物館に関すること。

第 21 条 特別史跡多賀城附寺跡（これに関連する遺跡を含む。以下同じ）の発掘、調査及び研究を行うため、地方機関として多賀城跡調査研究所を設置する。

2 多賀城跡調査研究所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
宮城県多賀城跡調査研究所	多賀城市

3 多賀城跡調査研究所の所掌事務は、次のとおりとする。

- 一 特別史跡多賀城附寺跡の発掘に関すること。
- 二 特別史跡多賀城附寺跡の出土品の調査及び研究に関すること。
- 三 特別史跡多賀城附寺跡の環境整備に関すること。
- 四 庶務に関すること。

第 24 条 必要と認めるときは、多賀城跡調査研究所に次の表の上欄に掲げる職を置き、その職務は、当該下欄に定めるとおりとする。

職	職 務
上席主任研究員	上司の命を受け、重要かつ高度な調査研究に従事し、主任研究員、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、副主任研究員及び研究員の業務を整理する。
副主任研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事し、研究員の業務を整理する。
研究員	上司の命を受け、重要又は高度な調査研究に従事する。

2 上席主任研究員、主任研究員、副主任研究員及び研究員は、技術職員をもつて充てる。

〈職員〉

所 長 高橋 栄一	（兼博物館 管理部長） 鈴木 端彦	（兼博物館 副参事兼総括次長） 日地谷 聡	《研究班》	
			上席主任研究員（班長）	白崎 恵介
			副主任研究員（副班長）	村上 裕次
			研究員	初鹿野 博之
			技 師	鈴木 貴生
			技 師	矢内 雅之
			《（兼東北歴史博物館管理班）》	
			（兼博物館次長（班長））	佐々木 美幸
			（兼博物館主任主査（副班長））	阿部 美歩
			（兼博物館主事）	四野見 聡
			（兼博物館主事）	菅原 皓平

3. 沿革と実績

(1) 宮城県多賀城跡調査研究所の沿革

年 月	事 項
大正 11.10	多賀城跡が史蹟名勝天然記念物保存法により史蹟指定（大正 11. 10. 12）。指定名称「多賀城跡附寺跡」
昭和 35	県教委が「多賀城跡発掘調査委員会」を組織し、5カ年計画による多賀城跡の発掘調査の初年度事業として多賀城跡と多賀城廃寺跡の地形図を作成
36. 8	多賀城廃寺跡第1次発掘調査実施（県教委主体、多賀城町と河北文化事業団共催。調査団長は伊東信雄東北大学教授）
37. 8	多賀城廃寺跡第2次発掘調査実施。主要伽藍配置が判明
38. 8	多賀城跡政庁地区発掘調査（第1次）開始。以後40年8月（第3次）まで実施。政庁地区の祠堂院的な建物配置が判明
41. 4	多賀城跡附寺跡特別史跡に昇格指定（昭和41. 4. 11）
43.11	多賀城町が多賀城跡政庁地区の発掘調査（第4次）を再開
44. 4	宮城県多賀城跡調査研究所設立
44. 7	多賀城跡調査研究指導委員会設置（委員長伊東信雄）。研究所による多賀城跡調査研究事業開始
44.10	色麻村日の出山遺跡の発掘調査実施
45. 3	『多賀城跡調査報告1－多賀城廃寺跡－』刊行
45. 4	研究所による多賀城跡環境整備事業開始
48.10	金堀地区を対象とした第21次調査で計帳様文書断簡を発見
49. 2	外郭西辺地区の追加指定が官報告示（昭和49. 2. 18）
49. 4	多賀城関連遺跡発掘調査事業開始
49. 8	桃生城跡の発掘調査に着手（昭和50年度まで継続）
49. 8	プレハブ庁舎から東北歴史資料館の建物に移転
52. 7	伊治城跡の発掘調査に着手（昭和54年度まで継続）
53. 4	研究第一科・同第二科の2科制となる。遺構調査研究事業開始
53. 6	漆紙文書の発見を報道発表。これにより研究所が山本壮一郎知事から表彰を受ける
54. 3	多賀城跡調査研究所資料1『多賀城漆紙文書』刊行
55. 3	『多賀城跡 政庁跡 図録編』刊行
55. 3	館前遺跡の追加指定が官報告示（昭和55. 3. 24）
55. 7	名生館遺跡の発掘調査に着手（昭和60年度まで継続）。初年度の調査で8世紀初頃の官衙中核部を検出
57. 3	『多賀城跡 政庁跡 本文編』刊行
58.11	第43・44次調査で政庁南前面の道路遺構発見
59. 3	多賀城跡南面地域の追加指定が官報告示（昭和59. 3. 27）
60. 9	名生館遺跡関連戦原瓦窯跡発掘調査実施
61. 8	薬山遺跡の発掘調査に着手（平成4年度まで継続）
62. 8	名生館官衙遺跡の史跡指定が官報告示
62.11	第53次調査で奈良時代の外郭東門を発見
平成 2. 6	柏木遺跡の追加指定が官報告示（平成2. 6. 28）
2.11	多賀城跡調査研究指導委員会に南門－政庁調整備活用専門部会を設置
4.11	日本最古の「かな」漆紙文書について報道発表
5. 8	下伊場野窯跡群の調査を実施し、3基の多賀城創建瓦窯跡を発見

年月	事項
5. 9	山王遺跡千利田地区の追加指定が官報告示（平成 5. 9. 22）
6. 8	桃生城跡の発掘調査を再開（平成 13 年度まで継続）。政庁の全貌を解明
7. 6	第 31 回指導委員会において南門一政庁間整備活用計画案承認
9.11	多賀城碑覆屋の解体修理および碑地下部分の発掘調査を実施
10. 6	多賀城跡の重要文化財（古文書）指定が官報告示（平成 10. 6. 30）
11. 1	東山官衙遺跡の史跡指定が官報告示
11. 4	2 科制が廃され、研究班となる
11. 4	東北歴史博物館の建物に移転
14. 1	「多賀城跡等の発掘調査を通して東北古代史の解明に尽くした功績」により第 51 回河北文化賞を受賞
14. 8	亀岡遺跡の発掘調査に着手（平成 15 年度まで継続）
15. 3	「多賀城跡一発掘のあゆみ一」刊行
15. 6	伊治城跡の史跡指定が官報告示
16. 4	多賀城政庁跡の再整備に先立ち、政庁地区の調査に着手（平成 20 年度まで継続）
16. 5	木戸京跡群の発掘調査に着手（平成 18 年度まで継続）
17. 4	多賀城跡調査研究指導委員会を廃し、宮城県条例第 13 号により多賀城跡調査研究委員会を設置
19. 8	日の出山京跡群の発掘調査に着手（平成 22 年度まで継続）
20. 4	多賀城政庁跡の再整備に着手（平成 26 年度まで継続予定）
22. 3	「多賀城跡 政庁跡 補遺編」刊行
22. 9	多賀城跡発掘調査 50 周年記念事業を開催
22.10	「多賀城跡一発掘のあゆみ 2010 一」刊行
22.11	第 82 次調査で第 1 期の外郭東門を新たに発見
23. 3	多賀城跡調査研究所資料Ⅱ『多賀城跡木簡Ⅰ』刊行
24. 5	東日本大震災の復旧工事に伴い、政庁正殿跡を調査。宝亀 11（780）年の火災による焼失と建替えを確認
25. 3	多賀城跡調査研究所資料Ⅲ『多賀城跡木簡Ⅱ』刊行
26. 2	多賀城跡出土木簡と多賀城跡出土漆紙文書の県指定有形文化財（古文書）指定が公報告示（平成 26. 2. 25）
26. 3	多賀城跡調査研究所資料Ⅳ『多賀城跡木簡Ⅲ』刊行
28. 2	鎮守府符の文書面について報道発表
28. 2	特別史跡多賀城跡附寺跡整備基本計画を策定
29. 3	「多賀城跡 外郭跡Ⅰ－南門地区一」刊行
30. 3	「多賀城跡 政庁南面地区一城前官衙遺構・遺物編一」刊行
31. 3	「多賀城跡 政庁南面地区Ⅱ一城前官衙礎石編一」刊行
令和 元	第 93 次調査で第Ⅲ期以降の外郭西北門を新たに発見
2. 3	多賀城跡調査研究所資料Ⅴ『多賀城跡輪陶磁器』刊行
2. 3	「多賀城跡調査研究所治史・設立 50 周年記念誌」刊行
2. 3	「多賀城跡一発掘のあゆみ 2020 一」刊行
3. 3	「多賀城跡 政庁南面地区Ⅲ一政庁南大路・南北大路一」刊行

(2) 事業実績

1) 多賀城跡発掘調査事業の実績

計画	年度	回数	発掘調査地区	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)	計画	年度	回数	発掘調査地区	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)		
昭和三十九年度計画	昭和44	5次	政庁地区(南東部)	1,980	9,000	昭和三十九年度計画	平成元	56次	大畑地区北平部	1,550	29,000		
		6次	政庁地区北東部	2,079				57次	外郭東辺南平部(西沢地区)	500			
		7次	外郭南辺中央部(多賀城跡付近)	264				58次	大畑地区中央部	1,470			
	昭和45	8次	外郭南辺中央部	350	12,000		平成2	59次	大畑地区中央部東側	900	30,000		
		9次	政庁地区南西部	2,046				60次	大畑地区中央部	1,450			
		10次	外郭西辺中央部	495				61次	溝の池地区	150			
		11次	外郭東辺南部	660				平成3	62次	大畑地区南平部		1,100	35,000
		12次	外郭中央地区北部	3,795					63次	大畑地区北平部		1,700	
		昭和46	13次	外郭東辺東門付近				1,600	12,000	平成5		64次	大畑地区北部
	14次		外郭東地区北部	2,086	平成6		65次	外郭東門北部・現状変更に伴う調査			2,200	36,000	
	15次		溝の池西側	112	平成7		66次	大畑地区北西部			3,000	35,000	
	昭和47	16次	政庁地区北平部	1,320	13,000		平成8	67次	大畑地区西部	3,000	39,000		
		17次	外郭北東隅・北西隅	1,729				平成9	68次	大畑地区西部・多賀城跡		2,650	36,000
		18次	外郭中央地区北部	2,937				平成10	69次	城前地区南部		2,000	36,000
		昭和48	19次	政庁地区北西部				2,640	17,000	平成11		70次	城前地区南部
	20次		外郭南辺中央部	990	平成12		71次	城前地区南部			2,000	32,300	
	21次		城外西部地区中央部	1,485	平成13		72次	南門西側築地跡跡・南門一政庁間道跡			1,000	28,900	
	22次	城外西方(高平遺跡)	3,465	昭和三十九年度計画	平成14		73次	南門東側築地跡跡・南門一政庁間道跡	1,800	26,000			
昭和49	23次	外郭東地区北部(宇大堀)	3,300		17,000	平成15	74次	南門一政庁間道跡	1,000	25,220			
	24次	外郭南東隅	2,640				75次	外郭北辺中央部	500				
	25次	多賀城東寺跡南大門礎定地	2,310				平成16	76次	政庁東脇・西脇跡・後殿・北辺地区		1,640	24,463	
昭和50	26次	多賀城東寺跡中門前方地区	2,310		22,000	平成17	77次	政庁東脇・西脇跡・南側地区	970	23,730			
	27次	養社宮西隣山田大久保地区	660				平成18	78次	政庁地区・政庁南面地区・城前地区		2,700	16,610	
昭和51	28次	五万騎地区	2,310		22,000	平成19	79次	政庁一外郭南門間道跡・城前・溝池地区	1,350	14,168			
	29次	五万騎地区	2,310				平成20	80次	山屋場地区・政庁南西部地区		930	12,752	
昭和52	30次	五万騎地区	1,980		22,000	平成21	81次	溝の池地区・政庁南西部地区	900	12,064			
	31次	政庁北方隣接地区	1,980				平成22	82次	外郭東辺伊保石地区		580	11,460	
昭和53	32次	政庁北方隣接地区	1,000		22,000	平成23	83次	外郭南辺五万騎地区	960	11,447			
	33次	外郭西門地区	1,000				84次	外郭南辺五万騎地区	445		11,294		
昭和54	34次	素山地区南低層地	1,300		30,000	平成24	85次	政庁地区 正副跡	415	10,300			
	35次	溝の池南地区	900				平成25	86次	外郭南辺坂下地区		350		
昭和55	36次	外郭東地域中央部作貫地区	1,800		30,000	平成26	87次	外郭南辺山屋場・坂下地区	910	9,901			
	37次	多賀城外南地区(砂押川東岸)地区	700				88次	外郭南辺立石地区	390		9,424		
	38次	作貫南低層地(緊急調査)	50				89次	政庁南大路・城前地区	280				
	昭和56	39次	外郭東地域中央部作貫地区				2,500	35,000	平成28		90次	外郭南辺坂下地区	430
40次		外郭東築地東平中央部(立石地区・緊急)	80	平成29	91次	外郭南門山屋場地区(南北大路)	720			10,347			
昭和57	41次	外郭東辺南端部(山屋場東端地区)	1,200	32,000	平成30	92次	外郭南辺五万騎地区	200	9,255				
	42次	外郭東地域中央部(作貫地区)	500			令和元	93次	外郭西辺丸山地区		300	10,688		
昭和58	43次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	800	32,000	令和2	94次	政庁地区北方	600	10,629				
	44次	外郭中央地区中央部(政庁南方)	2,500			令和3	95次	政庁地区北方		700	8,902		
昭和59	45次	坂下地区	70	29,000	令和4	96次	政庁地区北方						
	46次	外郭西門地区	750			97次	外郭南辺坂下地区						
	47次	外郭西辺中央部	1,000			98次	政庁地区北方						
	48次	外郭南門地区	800										
昭和60	49次	外郭北門礎定地区	450	29,000									
	50次	政庁南地区	900										
昭和61	51次	外郭北東隅東地区	500	29,000									
	52次	大畑地区及び東辺外の地区	500										
昭和62	53次	外郭東門北東地区	1,000	29,000									
	54次	外郭東門東地区	1,000										
昭和63	55次	外郭東辺中央部(作貫地区)	500	29,000									

調査面積累計	119,673㎡
調査費用累計(千円)	1,180,919
指定地総面積	約1,070,000㎡
調査面積/総面積	約11%

2) 多賀城跡附寺跡環境整備事業の実績

計画	年度	対象地区	主な工事内容	事業費 (千円)	計画	年度	対象地区	主な工事内容	事業費 (千円)
第1次5カ年計画	昭和45	政庁地区	南門圓蓋・東脇殿表示	10,000	第2次5カ年計画	平成12	柏木遺跡	造成・排水・法面保護	14,400
	昭和46		正殿・染地南表示	20,000		平成13		法面・開路・植栽・排水	19,700
	昭和47		西脇殿・染地南表示	25,000		平成14		法面保護・開路	9,300
	昭和48		北西門・染地南表示	20,000		平成15		法面・遺構表示・開路・植栽	9,020
	昭和49	外郭東門地区	東門・聖穴住居表示	20,000		平成16		開路広場・排水・植栽・照明	8,266
第2次5カ年計画	昭和50	外郭東南側地区	木質遺構保存施設	20,000	平成17	案内板・標柱整備	案内板標柱・サイン再整備	15,738	
	昭和51	藩の池地区	湿地修景・開路	10,000	平成18	外郭北辺東北側 (本道再整備)	基礎整備・広場・自然育成	11,016	
	昭和52		南辺染地南表示	16,000	平成19		構造物撤去・法面・便益施設・自然育成	9,462	
	昭和53	南門地区	多賀城碑周辺修景	16,000	平成20	政庁南南面地区	染地類除去撤去	8,514	
	昭和54		南門・染地南保護	20,000	平成21		染地類除去撤去	8,500	
第3次5カ年計画	昭和55	南門地区	開路・便益施設・緑化修景	30,000	平成22		追加遺構表示(西脇殿・西棟)	8,084	
	昭和56	外郭南染地東半部	緑化修景	30,000	平成23		追加遺構表示(東脇殿・東棟)	8,104	
	昭和57	外郭南門地区東側部	開路	28,000	平成24		追加遺構表示(後棟)	7,956	
			遺構保護露土・緑化修景	30,000	平成25		敷地造成(北側)	7,560	
	昭和58	作貫地区	建物表示・便益施設・緑化修景	30,000	平成26		追加遺構表示(北側)	8,636	
昭和59	作貫地区	土塁及び空堀表示・便益施設	27,000	平成27		政庁南大路・説明板・休憩施設再整備	8,193		
昭和60		遺構露出提示・便益施設・緑化修景	27,000	平成28		政庁南大路開路・地形測量	13,000		
第4次5カ年計画	昭和61	政庁南地区	地形修復・道路復元・緑化修景	27,000	令和元	政庁南南面地区	構造物撤去・実施設計	15,000	
		作貫地区	便益施設		令和2		床張建物表示・建物構造復元	211,770	
	御山地区	緑化修景	令和3	床張建物表示・土間建物表示・掘立柱南表示	133,170				
	昭和62	作貫地区北部	開路・緑化修景・便益施設	27,000	令和4		土間建物表示・掘立柱南表示・便益施設	27,112	
		政庁地区	便益施設・開路・緑化修景		令和5		説明板・便益施設・園芝		
	昭和63	作貫地区北部・丘陵南西側部	便益施設・開路・緑化修景	27,000	令和6		作貫地区	遺構露出提示再整備・便益施設・緑化修景	
平成元	北辺地区南半部	便益施設・開路・緑化修景	27,112						
第5次5カ年計画	平成2		便益施設・開路・緑化修景	30,000	宮城県による整備面積(令和3年度末)				
	平成3	北辺地区北半部	便益施設・開路・緑化修景	30,000	多賀城跡 168,964 m²				
	平成4		便益施設	30,000	政庁地区	18,725 m ²			
			地形修復・開路・緑化修景		六月坂地区	9,335 m ²			
	平成5	東門・大堀地区東側部	建物表示・便益施設	35,000	南辺東地区	18,462 m ²			
平成6		便益施設	35,000	南門地区・南辺西地区	13,824 m ²				
平成7		道路復元・染地南表示・便益施設・緑化修景	30,000	作貫地区・東辺地区	27,934 m ²				
平成8	東門・大堀地区西側北半部	地形修復・道路復元・緑化修景	39,000	北辺地区	33,947 m ²				
平成9	南門地区	道路表示・便益施設	51,000	東門・大堀地区	25,299 m ²				
		多賀城碑覆屋解体修景		政庁南南面地区	21,438 m ²				
平成10	東門・大堀地区西側北半部	道路表示・排水・緑化修景	35,000	柏木遺跡	3,759 m ²				
平成11		建物表示・便益施設・緑化修景	31,500	整備事業費総計 1,579,542 千円					

3) 多賀城関連遺跡発掘調査事業の実績

計画	年度	遺跡名	事業	内容	発掘面積 (㎡)	経費 (千円)
第1次5カ年計画	昭和49	桃生城跡	地形図作成・第1次発掘調査	内郭地区・外郭の調査	500	2,500
	昭和50	桃生城跡	第2次発掘調査	同上	850	2,500
	昭和51	伊治城跡	地形図作成		1,020	1,500
	昭和52	伊治城跡	第1次発掘調査	外郭線・郭内の調査	438	3,000
	昭和53	伊治城跡	第2次発掘調査	郭内の調査	780	3,000
第2次5カ年計画	昭和54	伊治城跡	第3次発掘調査	同上	1,000	4,000
	昭和55	名生館遺跡	地形図作成・第1次発掘調査	城内地区の調査	1,650	7,000
	昭和56	名生館遺跡	第2次発掘調査	同上	1,960	7,000
	昭和57	名生館遺跡	第3次発掘調査	小船・内郭地区の調査	1,156	7,000
	昭和58	名生館遺跡	第4次発掘調査	小船地区の調査	1,020	7,000
第3次5カ年計画	昭和59	名生館遺跡	第5次発掘調査	城内地区の調査	1,800	6,300
	昭和60	名生館遺跡 合戦原跡	第6次発掘調査	範囲確認調査 関連築跡調査	1,300	6,300
	昭和61	東山遺跡	第1次発掘調査	遺構確認調査	1,100	7,800
	昭和62	東山遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	1,074	7,000
	昭和63	東山遺跡	第3次発掘調査	官衙中郭部の把握	1,200	7,000
第4次5カ年計画	平成元	東山遺跡	第4次発掘調査	同上	562	7,000
	平成2	東山遺跡	第5次発掘調査	同上	600	7,000
	平成3	東山遺跡	第6次発掘調査	同上	2,200	10,000
	平成4	東山遺跡	第7次発掘調査	同上	3,260	12,000
	平成5	下伊福野宮跡	地形図作成・発掘調査	多賀城創建期築跡調査	600	14,000
第5次5カ年計画	平成6	桃生城跡	第3次発掘調査	政庁地区と外郭線の調査	2,300	22,000
	平成7	桃生城跡	第4次発掘調査	同上	730	20,000
	平成8	桃生城跡	第5次発掘調査	外郭線の調査	800	17,000
	平成9	桃生城跡	第6次発掘調査	政庁西側官衙の調査	800	17,000
	平成10	桃生城跡	第7次発掘調査	同上	800	17,000
第6次5カ年計画	平成11	桃生城跡	第8次発掘調査	同上	1,200	15,300
	平成12	桃生城跡	第9次発掘調査	政庁西側丘陵上の調査	1,400	10,500
	平成13	桃生城跡	第10次発掘調査	同上	600	11,400
	平成14	龜岡遺跡	第1次発掘調査	遺跡の範囲確認調査	520	6,500
	平成15	龜岡遺跡	第2次発掘調査	遺構分布状況の把握	830	6,300
第7次5カ年計画	平成16	本戸塚跡群	第1次発掘調査	A地点西側丘陵の調査	620	6,115
	平成17	本戸塚跡群	第2次発掘調査	B・C地点の調査	300	5,932
	平成18	本戸塚跡群	第3次発掘調査	B・C地点の調査	1,300	4,152
	平成19	六月坂遺跡	発掘調査	横穴墓群の調査	1,000	
		日の出山宮跡群	試験調査	A地点北側の調査	200	3,520
平成20	日の出山宮跡群	第1次調査	F地点南側の調査	490	3,168	
第8次5カ年計画	平成21	日の出山宮跡群	第2次発掘調査	F地点西側の調査	620	2,994
	平成22	日の出山宮跡群	第3次発掘調査	F地点東側の調査	375	2,846
	平成23	大古山瓦葺跡	東日本大震災により中止		0	0
	平成24～令和2		事業休止		0	0
	令和3	大古山瓦葺跡	地形図作成・第1次発掘調査	遺構分布状況の把握	145	2,824
令和4	大古山瓦葺跡	第2次発掘調査				
令和5	大古山瓦葺跡	第3次発掘調査				

4) 研究成果等刊行物

①宮城県多賀城跡調査研究所年報

『年報 1969』(第 5・6・7 次調査)	昭和 45 年 3 月	『年報 1996』(第 67 次調査)	平成 9 年 3 月
『年報 1970』(第 8・9・10・11 次調査)	昭和 46 年 3 月	『年報 1997』(第 68 次調査、多賀城碑建屋解体修理)	平成 10 年 3 月
『年報 1971』(第 12・13・14 次調査)	昭和 47 年 3 月	『年報 1998』(第 69 次調査)	平成 11 年 3 月
『年報 1972』(第 15・16・17・18 次調査)	昭和 48 年 3 月	『年報 1999』(第 70 次調査)	平成 12 年 3 月
『年報 1973』(第 19・20・21・22 次調査)	昭和 49 年 3 月	『年報 2000』(第 71 次調査)	平成 13 年 3 月
『年報 1974』(第 23・24 次調査)	昭和 50 年 3 月	『年報 2001』(第 72 次調査、環境整備)	平成 14 年 3 月
『年報 1975』(第 25・26・27 次調査、東外郭跡南端部)	昭和 51 年 3 月	『年報 2002』(第 73 次調査)	平成 15 年 3 月
『年報 1976』(第 28・29 次調査)	昭和 52 年 3 月	『年報 2003』(第 74・75 次調査)	平成 16 年 3 月
『年報 1977』(第 30・31 次調査)	昭和 53 年 3 月	『年報 2004』(第 76 次調査)	平成 17 年 3 月
『年報 1978』(第 32・33 次調査、環境整備)	昭和 54 年 3 月	『年報 2005』(第 77 次調査、環境整備)	平成 18 年 3 月
『年報 1979』(第 34・35 次調査、環境整備)	昭和 55 年 3 月	『年報 2006』(第 78 次調査)	平成 19 年 3 月
『年報 1980』(第 36・37 次調査)	昭和 56 年 3 月	『年報 2007』(第 79 次調査)	平成 20 年 3 月
『年報 1981』(第 38・39・40 次調査)	昭和 57 年 3 月	『年報 2008』(第 80 次調査)	平成 21 年 3 月
『年報 1982』(第 41・42 次調査)	昭和 58 年 3 月	『年報 2009』(第 81 次調査)	平成 22 年 3 月
『年報 1983』(第 43・44 次調査)	昭和 59 年 3 月	『年報 2010』(第 82 次調査、環境整備)	平成 23 年 3 月
『年報 1984』(第 45・46・47 次調査、環境整備)	昭和 60 年 3 月	『年報 2011』(第 83 次調査)	平成 24 年 3 月
『年報 1985』(第 46・48・49 次調査)	昭和 61 年 3 月	『年報 2012』(第 84・85 次調査)	平成 25 年 3 月
『年報 1986』(第 49・50・51 次調査)	昭和 62 年 3 月	『年報 2013』(第 86 次調査)	平成 26 年 3 月
『年報 1987』(第 50・52・53 次調査)	昭和 63 年 3 月	『年報 2014』(第 87 次調査)	平成 27 年 3 月
『年報 1988』(第 54・55 次調査)	平成 元年 3 月	『年報 2015』(第 88・89 次調査、環境整備)	平成 28 年 3 月
『年報 1989』(第 56・57 次調査)	平成 2 年 3 月	『年報 2016』(第 90 次調査)	平成 29 年 3 月
『年報 1990』(第 58・59 次調査)	平成 3 年 3 月	『年報 2017』(第 91 次調査)	平成 30 年 3 月
『年報 1991』(第 60・61 次調査)	平成 4 年 3 月	『年報 2018』(第 92 次調査)	平成 31 年 3 月
『年報 1992』(第 62・63 次調査)	平成 5 年 3 月	『年報 2019』(第 93 次調査)	令和 2 年 6 月
『年報 1993』(第 64 次調査)	平成 6 年 3 月	『年報 2020』(第 94 次調査)	令和 3 年 3 月
『年報 1994』(第 65 次調査、環境整備)	平成 7 年 3 月	『年報 2021』(第 95 次調査)	令和 4 年 3 月
『年報 1995』(第 66 次調査)	平成 8 年 3 月		

②多賀城関連遺跡調査報告書

『統生城跡Ⅰ』(第 1 冊)	昭和 50 年 3 月	『統生城跡Ⅲ』(第 20 冊)	平成 7 年 3 月
『統生城跡Ⅱ』(第 2 冊)	昭和 51 年 3 月	『統生城跡Ⅳ』(第 21 冊)	平成 8 年 3 月
『伊治城跡Ⅰ』(第 3 冊)	昭和 53 年 3 月	『統生城跡Ⅴ』(第 22 冊)	平成 9 年 3 月
『伊治城跡Ⅱ』(第 4 冊)	昭和 54 年 3 月	『統生城跡Ⅵ』(第 23 冊)	平成 10 年 3 月
『伊治城跡Ⅲ』(第 5 冊)	昭和 55 年 3 月	『統生城跡Ⅶ』(第 24 冊)	平成 11 年 3 月
『名生館遺跡Ⅰ』(第 6 冊)	昭和 56 年 3 月	『統生城跡Ⅷ』(第 25 冊)	平成 12 年 3 月
『名生館遺跡Ⅱ』(第 7 冊)	昭和 57 年 3 月	『統生城跡Ⅷ』(第 26 冊)	平成 13 年 3 月
『名生館遺跡Ⅲ』(第 8 冊)	昭和 58 年 3 月	『統生城跡Ⅹ』(第 27 冊)	平成 14 年 3 月
『名生館遺跡Ⅳ』(第 9 冊)	昭和 59 年 3 月	『亀岡遺跡Ⅰ』(第 28 冊)	平成 15 年 3 月
『名生館遺跡Ⅴ』(第 10 冊)	昭和 60 年 3 月	『亀岡遺跡Ⅱ』(第 29 冊)	平成 16 年 3 月
『名生館遺跡Ⅵ』(第 11 冊)	昭和 61 年 3 月	『木戸宮跡Ⅰ』(第 30 冊)	平成 17 年 3 月
『東山遺跡Ⅰ』(第 12 冊)	昭和 62 年 3 月	『木戸宮跡Ⅱ』(第 31 冊)	平成 18 年 3 月
『東山遺跡Ⅱ』(第 13 冊)	昭和 63 年 3 月	『木戸宮跡Ⅲ』(第 32 冊)	平成 19 年 3 月
『東山遺跡Ⅲ』(第 14 冊)	平成 元年 3 月	『六月坂遺跡ほか』(第 33 冊)	平成 20 年 3 月
『東山遺跡Ⅳ』(第 15 冊)	平成 2 年 3 月	『日の出山宮跡群Ⅰ』(第 34 冊)	平成 21 年 3 月
『東山遺跡Ⅴ』(第 16 冊)	平成 3 年 3 月	『日の出山宮跡群Ⅱ』(第 35 冊)	平成 22 年 3 月
『東山遺跡Ⅵ』(第 17 冊)	平成 4 年 3 月	『日の出山宮跡群Ⅲ』(第 36 冊)	平成 23 年 3 月
『東山遺跡Ⅶ』(第 18 冊)	平成 5 年 3 月	『大吉山瓦宮跡Ⅰ』(第 37 冊)	令和 4 年 3 月
『下伊田野宮跡』(第 19 冊)	平成 6 年 3 月		

③研究紀要

『研究紀要Ⅰ』	昭和49年3月	『研究紀要Ⅴ』	昭和53年3月
『研究紀要Ⅱ』	昭和50年3月	『研究紀要Ⅵ』	昭和54年3月
『研究紀要Ⅲ』	昭和51年3月	『研究紀要Ⅶ』	昭和55年3月
『研究紀要Ⅳ』	昭和52年3月		

④総括調査報告書・資料集

『多賀城跡 政庁跡 図録編』	昭和55年3月	『多賀城跡木簡Ⅱ』 宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅲ	平成25年3月
『多賀城跡 政庁跡 本文編』	昭和57年3月	『多賀城跡木簡Ⅲ』 宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅳ	平成26年3月
『多賀城跡 政庁跡 補遺編』	平成22年3月	『多賀城産輪陶磁器』 宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅴ	令和 2年3月
『多賀城跡 外郭跡Ⅰ—南門地区—』	平成29年3月	『多賀城と古代日本』	昭和50年3月
『多賀城跡 政庁南面地区 —城前官衙遺構・遺物編—』	平成30年3月	『多賀城と古代東北』	昭和60年3月
『多賀城跡 政庁南面地区Ⅱ —城前官衙総括編—』	平成31年3月	『多賀城跡—発掘のあゆみ—』	平成15年3月
『多賀城跡 政庁南面地区Ⅲ —政庁南大路・南北大路—』	令和 3年3月	『多賀城跡—発掘のあゆみ 2010—』	平成22年9月
『多賀城迹紙文書』 宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅰ	昭和54年3月	『多賀城跡—発掘のあゆみ 2020—』	令和 2年3月
『多賀城跡木簡Ⅰ』 宮城県多賀城跡調査研究所資料Ⅱ	平成23年3月		

⑤整備基本計画など

『特別史跡多賀城跡整備基本計画』	平成28年3月
『多賀城跡調査研究所沿革史』	令和 2年3月
『特別史跡多賀城跡附寺跡緑化修景基本方針』	令和 3年3月

報告書抄録

ふりがな	みやぎけんたがじょうあとちようさけんきゅうしょねんぼう2021 たがじょうあと							
書名	宮城県多賀城跡調査研究所年報 2021 多賀城跡							
副書名	多賀城跡-第95次調査-							
巻次	宮城県多賀城跡調査研究所年報 2021							
シリーズ名	宮城県多賀城跡調査研究所年報							
シリーズ番号	2021							
編著者名	高橋栄一・白崎恵介・村上裕次・初鹿野博之・鈴木貴生・矢内雅之							
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所							
所在地	〒985-0862 宮城県多賀城市高崎1丁目22-1 TEL 022-368-0102 FAX 022-368-0104							
発行年月日	20220328							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
特別史跡 多賀城跡 附寺跡	宮城県多賀城市 市川・浮島	04209	004	38°18′24″	140°59′18″	2021年5月31日 2021年12月15日	700㎡	調査計画に基づく学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
特別史跡 多賀城跡 附寺跡	国府・城柵	奈良平安	掘立柱建物 竪穴建物 土坑 溝 自然流路	土師器・須恵器・須恵系土器・白磁・灰釉陶器、軒丸・軒平瓦・丸・平瓦、転用磁、土製品、石製品、鉄製品、鉄滓			政庁の北側で、第Ⅲ期以降の特筆すべき大型の建物を発見	
要約	<p>第95次調査の目的は、第94次調査A区の未調査範囲を中心に遺構の分布や構成を確認すること、沢状地形の範囲など旧地形を把握し、地形と遺構の分布との関連性を確認することであった。</p> <p>調査の結果、以下の成果を得た。</p> <p>①掘立柱建物2棟、竪穴建物1棟、土坑5基、溝14条、自然流路3条、柱穴を検出した。古代の遺構は掘立柱建物、竪穴建物、古代末から中世の遺構は土坑、溝、中世以降が溝と自然流路である。</p> <p>②掘立柱建物は2棟あり、SB3415は北・東に順が付く大型の建物で、年代は第Ⅲ期以降と推定される。政庁と近接し、その位置は第Ⅱ～Ⅳ期の政庁の建物配置計画に基づいている。平面形式、規模、配置の計画性から政庁と密接な関係を持った建物と考えられる。SB3450は第Ⅲ期以降の建物で、政庁以外で検出した掘立柱建物の中では大規模なものである。</p> <p>③中近世以降の溝を9条検出した。このうち、SD3426とSD3458、SD3438とSD3453はそれぞれ平行し、規模も類似することから2条の道路の可能性がある。</p> <p>④出土遺物は、土師器、須恵器、須恵系土器、白磁、灰釉陶器、瓦、転用磁、土製品、石製品、鉄製品、鉄滓、中世陶器、近世以降の陶磁器・瓦質土器・土師質土器・銅銭である。古代が主体で、その中でも瓦の割合が高い。土器では、溝から11世紀後半の須恵系土器がまとめて出土した。</p>							



SD3449 出土須恵系土器

宮城県多賀城跡調査研究所年報 2021

多賀城跡

令和4年3月28日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市高崎一丁目22-1
TEL (022) 368-0102
FAX (022) 368-0104

印刷所 株式会社 ソノベ
